
春になったら、会いに行く

雪宮鉄馬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春になったら、会いに行く

【Nコード】

N1115U

【作者名】

雪宮鉄馬

【あらすじ】

学校の中庭に、ひっそりと佇む花壇。誰も寄り付かないため、荒れ放題になった小さな花壇の前に佇む女生徒の姿を見つけた、教師の桜井は、ふと彼女のことを気になり声をかけた。その女生徒・宮野美咲が、花壇を見つめて、とある「計画」を胸に秘めていることなんて知らないで……。互いに心に傷を持つ、生徒と教師の交流と恋愛を、交互の視点と心理描写で描いていく、温かな恋愛小説です。

1・屋上の聖域（前書き）

初めまして&こんにちわ。

本作を目に留めていただきありがとうございます。

「春になったら、会いに行く」（タイトルが長いので略して「はるあい」と呼んでください）は、約一年ぶりの恋愛小説になりますが、互いの視点を交互に描いていく、など新しい切り口に挑戦した小説です。

奇数回が「桜井先生」の視点、偶数回が「美咲」の視点で進んでいきます。ぜひ、最後までお付き合いいただけたらと思います。何卒、よろしくお願いいたします。

1・屋上の聖域

学校敷地内は全面禁煙。現校長が、校内の風紀を厳しくし、校内の美化を推し進めるために発表した。校門をはじめ、至る場所にプラスチックのプレートに書かれた、タバコ禁止のマークと「No Smoking」の簡素な文字。

もともと、高校生は喫煙をしてはならないと法律に書いてあるし、ウチの学校にそういうやんちゃな生徒はいない。県内でも有数の真面目な公立高校として知られているくらいだ。校内の美化どころか、月に一度、生徒たちがお世話になっている地域への恩返しと称して、ゴミ袋片手に町内を練り歩く。

要は、全面禁煙のご命令は、俺たち教師に対する命令である。

折りしも、テレビでは健康志向の高まりを報じ、タバコにかかる税金も上がっているご時世、二十年以上愛煙家だった人まで、喫煙をやめている。しかし、つい数年前にタバコの味を覚えた俺としては、まったく禁煙するつもりはなく、肩身が狭い思いはこの上なかった。

だから、いつも誰にも見つからないようにこっそりと屋上に上がる。屋上は立ち入り禁止の区域。危険な場所だから、生徒たちの安全を思えば当然のことなのだが、おかげさまで俺のような喫煙者には聖域となっていた。さらに言えば、屋上の鍵を管理しているのが、たまたま俺だったことも、ごく自然と俺に喫煙場所を与えた。

そうして、タバコに火をつけて、煙を空に吐き出す。

他人が言うように、美味しいものだと思ったことは一度もない。煙なんか吸い込むことに、大した意義は感じられないが、それでもタバコを吸い続けるのは、吐き出す煙と一緒に、この体に鬱積うつせきした、「何か」を吐き出すことが出来るような気がするからだ。

その「何か」は、とてもザラザラしていた。砂漠の砂か、それとも砂場の砂か……とにかくそんな感じた。それは、詰まらない日常

とか、単調な日々とか、エネルギーを持て余している中学生みたいな感慨ではない。だいたい、俺は今年で二十六になる。もつと何か大切なものを失って、ぼつかりと空いた穴に、風に乗せて運ばれてきた砂が、積もっていくようなイメージ。と、言っても本人にしか分からない感覚だろう。それを、タバコの煙にのせて、ふうつ、と空へ吐き出すのだ。

夏の気配とともに青く澄み渡った空に、一塊の白い煙が舞う。しばらくの間それは、俺の前を漂うと風に浚われてどこかへ消えてしまふ。そうしたら、また煙を吐き出す。肺が黒くなっていく代わりに、空を白くしていくような作業。もつとも、空はとても広く、俺の灰は小さい。おそらく、俺の肺がヤニまみれでどす黒くなる前に、空が煙で白くなることはないだろう。

いやいや、そんなことは分かっている……。当たり前だ。

「こんなことを考えている時点で、すでに末期症状か」

呟いた俺は、しばらく腕時計に目を投じ、時間を気にした。昼休憩が終わり午後の授業が始まるまでに、存分に煙を吐き出して、体に付いたタバコの臭いを落としておかなければならない。生徒たちの手前、全面禁煙のルールを守っていないことがバレると、教師の沽券に関わる。それでも、教師であると言う自覚まで、煙と一緒に吐き出したつもりはない。

ただ、何となく、トイレでこそそこそタバコを吸っては、大人に見つかからないように証拠隠滅を図る、不良高校生の気分だ。

「そういえば、そろそろ中間考査の問題を考えなきゃな」

誰に言うでもなく、また一人呟く。屋上には話し相手がないのだから、必然的に俺の呟きは、独り言になる。教師になって四年。試験の時に気が重くなるのは、学生の頃と何一つ変わっていない。ただ、学生時代と違うのは、試験が怖いとか面倒というよりも、どうやったら、生徒たちの信頼と、他の同僚たちの信頼を保てるのか、俺の気を重たくさせるのだ。

マニアックで難しい問題を作れば、生徒から「あの先生意地悪だ」

と嫌がられる。一方で、簡単な問題ばかり出せば、同僚たちから「生徒に媚を売っている」と罵られる。ちょうどいい具合の設問を用意するのは、実はタイトロープの上をスキップで渡るくらい難しいのだ。

「いやになる……」

三度呟き、煙を空に向かって吐き出した。背を向ける校庭の方からは、生徒たちが休憩時間を満喫する、楽しげで明るい声と、ボールの跳ねる音が聞こえてくる。青春時代というのは、往々にして元気が有り余っているもので、それが声にも、一挙手一投足にも満ち溢れていて、キラキラと輝いているものなのだ。

若いつていいな、と思う。いや、この国の人口の大半を占めるお年寄りからしてみれば、俺だってまだ二十六なんだから、十分若いのだが、胸の奥にザラついた感覚を感じる俺は、とてもキラキラなんてしていない。

「さてと、そろそろ戻る準備をしないと」

俺は、タバコの吸殻を携帯灰皿に押し込むと、足元に置いていた缶コーヒーを拾い上げた。コーヒーに含まれる消臭効果を狙って、タバコを吸った後には、コーヒーを一気飲みするのが習慣となっていた。コーヒー通に言わせれば、もったいない飲み方だが、それほどコーヒー中毒ではない。コーヒーとタバコ、どちらがこの世から消えたら困るか、と言われれば「断然タバコ！」と答える。

なので、今日のコーヒーはミルクで割ったカフェオレだ。

校内には、教師と学生向けに、自動販売機が置いてある。ラインナップはそれほど多くはないが、コーヒーだけは何故か六種類も揃っていて、毎日違うコーヒーを楽しめる。ちなみに、職員室には備え付けのコーヒーメーカーがあるのだが、さすがにコーヒー通でない俺にも、インスタント特有の酸味走った味は、どうにも好きになれない。そういった意味では、自動販売機に六種類ものラインナップがあるのは、嬉しいことなのかもしれない。

俺は、ブルトップを開き一気に、コーヒーを流し込んだ。ふと、

空を眺めるのも飽きて、コーヒーの缶を片手に視線を落とす。

そこは、俺のいる北校舎と南校舎に挟まれた中庭。ほとんどが日陰になる場所で、芝生が植えられているにもかかわらず、生徒たちの姿は見受けられない。だから、なおさら中庭にぽつんと佇む、その女生徒のことが、目に付いてしまった。

もちろん、地上の彼女は、屋上の俺になんて気付いていないだろう。

「何してるんだ、あいつ……」

空になったコーヒー缶を握ったまま、俺はじつとその女生徒を見つめた。彼女が立つ場所は、ほとんどが日陰の中庭で、日中の間だけ日が当たる場所に作られた花壇だ。

しかし、日陰の中庭に生徒が寄り付かないため、煉瓦で仕切られただけの質素な花壇は、もう長い間放置されたままだ……と言うのは、古参の先生から聞いた話。そんな事を思い出していると、彼女は何を思ったか、おもむろに膝を折り、手が汚れるのも構わずに、土に触れた。

誰も寄り付かない花壇で、あの子は何をしているんだろう……。

一度気になると、問い質さなければ性分。そんな性分が俺にあったとは、などと驚きつつも、俺の脚はすでに階段を駆け下りていた。よくある話で、俺が中庭に出たら、すでに彼女はいないという、ありきたりなすれ違いというヤツを懸念していたが、俺が中庭に出ると、彼女はまだそこにいて、撫でるように花壇の土に触れていた。その光景は、まるで一枚の絵画のようでもあった。

見るからに大人しそうで、他の女生徒とは明らかに違う。美人と言うには、まだ少女の面影を残し、長い黒髪を初夏の風になびかせるその姿に、触れれば消えてしまいそうなほど儚げな印象を感じる。だが、受け持ちのクラスの生徒でもなければ、見覚えのないはずの横顔に、俺の心はざわついた。まるで、幻想でも目にしているかのような気分だ。分かっている、あいつじゃないってことくらい。似ているというほど似ているわけでもないし、あいつはもう……。

「桜井先生？」

気づいた彼女は、咄嗟に立ち上がって、俺の名を呼んだ。随分可愛らしい声で、ともすれば校庭から中庭にまで響き渡る、休憩時間を楽しむ生徒たちの声に掻き消されてしまいそうだった。

「そんなところで、何してるんだ？」

俺は幻想を振り払うように二、三度頭を振って、気を取り直すと、女生徒に問いかけた。おもむろに立ち上がった彼女は、少しばかり困ったような顔をして俯く。俺の口調から、怒られたと勘違いしたのだろう。

なにせ、喫煙者の聖域ならぬ屋上の鍵と、中庭の花壇の管理は、俺に与えられた役目だ。言ってみれば、花壇の管理者たる俺の許可なく、花壇に足を踏み入れているのは、彼女の方なのだ。

「べつに、怒ってるんじゃないんだ。誰も見向きしない花壇で、君が何をしていたのか、それを知りたかっただけだ」

なるべく声のトーンを落としてやる。すると彼女は、意を決したかのように、ぎゅっと拳を握り締めた。顔をあげた彼女の口から飛び出した言葉は、俺の予想もしていなかったことだった。

「あの、わたしにこの花壇に花を植えたいんです！　お願いします、桜井先生！！」

1・屋上の聖域（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。
また、次回は「美咲」の視点となります。

2・見捨てられた花壇

わたしは悪い子です。

視力と成績と性格が悪いです。

視力はコンタクトレンズで補っています。中学生の頃は、眼鏡をかけていたので、目の中にレンズを入れるという行為には、とても抵抗がありました。でも、慣れてしまえば、どうと言うことはありません。

成績は、きちんと勉強すれば、頭の回転が遅いわたしでも、なんとか人並みの成績に追いつくことは出来ます。苦手な数学を除いて、性格だけはどうにもなりません。性格というのは、本来生まれて十七年間の人生で、染み付いて出来上がったものです。ですが、わたしの場合は違います。自分で自分の性格を捻じ曲げたのです。そうして出来上がった、どうしようもなく情けない性格は、簡単に変えられるものではありません。つまりわたしはずっと変わらないまま、この性格と付き合わなければならないのです。そう思うと、胸の奥がザラザラします。まるで、ぽっかりと空いた胸の穴に、冷たい風によって運ばれてきた砂が詰まっていくような、そんな感じです。

もちろん、この性格を誰かの所為にするつもりはありません。全部わたしの所為なのですから。

「姉ちゃんは、もう少し笑ったらいいと思う」

と、透は言います。透は、わたしの二つ年下の弟です。今年の春から、わたしと同じ高校に通うようになりました。黙っていると女の子みたいな可愛い顔立ちに、明るくて、何事もクヨクヨしなくて誰とでもすぐ仲良くなれる、とってもいい子です。勉強もよくできるし、スポーツも得意。ちょっと羨ましいくらいです。

だから、生徒のほとんどが、わたしと透が姉弟きょうだいだと言うことに、気付いていないかもしれません。何故なら、顔がちょっと似てるこ

とを除けば、わたしと透は何から何まで正反対だからです。

それにしても「笑えばいい」とは、難しい事を透は言います。わたしにとって、笑うというのは、最も難易度の高い技です。きつとオリンピックで金メダルを決めたり、ノーベル賞を獲得したりするくらい、とても難しいことです。

笑うと言うことは、楽しいことや嬉しいことがあるからです。すると、自然に笑うことが出来ます。犬とか猫とか、普通の動物にはない表情です。たまたま読んだ難しい心理学の本に、人間が笑のは「相手の警戒心を解くため」なのだそうです。でも、そうじゃなくて心から楽しいことや嬉しいことに出会えば、人間はそれを表現するために笑うのです。

もちろん、わたしにも楽しいことや嬉しいことくらいあります。テレビ番組で、人気のお笑い芸人さんが、取っておきのギャグをやれば可笑しいと思うし、お母さんが夕飯のメニューに、わたしの大好きなロールキャベツを作ってくれたときには嬉しいと思います。

それなのに、わたしは笑うことが出来ません。正確に言えば、笑い方を忘れてしまったのです。

わたしは、ずっと前に罪を犯しました。何度願っても許されないほど大きな罪です。そして、わたしはその罪を背負うことにしました。罪びとは、楽しいことや嬉しい事を甘んじて受けてはいけません。それが、自分自身に課した罪だから……。

そうして、笑うのをやめたら、いつの間にか笑い方を忘れてしまいました。作り笑いも出来ない、無愛想な子になってしまいました。だから、そんな気持ちの悪いヤツに近付こうとする人なんていません。

だけどわたしに、声をかけてくれた人がいます。

名前は、桜井先生。わたしと弟の通う高校で、生物学を教えている理科の先生です。他の男性の先生より若いし、背が高くて、カッコいいので、女の子たちからは人気があります。わたしは、選択科目である生物学を履修していないので、桜井先生とは面識がありません。

せんでした。だから、先生に、

「そんなところで、何してるんだ？」

と声をかけられたときは、本当に驚いてしばらく言葉が出ませんでした。

何してるんだ？ と問われれば、花壇を見ていました、と答えるしかありません。でも、何で花も咲いていない荒れ放題の花壇なんかに見ていたのか、と尋ねられたら、上手く答えられそうにありませんでした。

その花壇を見つけたのはほとんど偶然です。

お昼休みと言うのは、お昼ご飯を食べた後の、気だるい時間です。春の涼しさと夏の陽気が入り混じり、言い換えれば随分過ごしやすいため、頭がぼんやりとします。クラスの皆は、持ち寄った雑誌を広げて雑談したり、携帯電話を開いてゲームしたりメールしたり。元気のいい子は、グラウンドに出て、ボール片手にスポーツに興じます。でも、わたしには話し相手になる友達はいませんし、携帯電話でメールする相手もいませんし、ゲームをする趣味は持ち合わせていません。さらに、運動は苦手なのでボールで遊ぶことなんてもつてのほかです。

だから、十中八九、お昼休みは教室でぼんやりしています。でも、そのままだと、居眠りフルコースに突入して、はつきりしないままの頭で午後の授業を受けなければなりません。午後は、特に苦手な大事な数学の授業が待っています。ぼんやりした頭で受けていたら、あっという間にそうでなくても悪いわたしの成績は、坂道をまっさか様に転げ落ちていくこと請け合いです。そこで、わたしは頭をはつきりさせるために、校舎の周りを散歩することにしました。

グラウンドで遊ぶ人たちの楽しげな声をBGMに、ひらひらと舞う蝶々を目で追いかけながら、初夏の色に染まった空を見上げ、雲を数えます。ああ、あの鯨のような雲は何処へ行くのだろう……なんて、ほんのひと時だけ、詩人になったような気分です。

そうして、校舎の周りをぐるり。校舎と校舎の谷間に当たる、中

庭へとわたしは入りました。もともと、学校が創立されたときに、生徒たちの憩いの場として設けられた芝生の中庭に、人はいません。何故なら、日中のほとんどお陽様が当たらない場所だからです。それに、芝生の庭なら、表にあたるグラウンドにもあります。そちらの方は、きつと生徒たちでにぎわっていることでしょう。それに引き換え、閑散とした中庭は、どこか寂しげでした。

前もって言うと、わたしもジメジメした場所はまだあまり好きではありません。お陽様の当たる場所の方が好きです。でも、ここは校舎の校舎にはさまれて、日陰になる場所です。さすがに風通しはいいので、ジメジメはしていません。そんな中庭で、唯一陽の光が当たる場所が、理科室の前にある小さな花壇でした。

だけど、レンガで仕切られ、腐葉土が撒かれたそこは、花壇と呼ぶには余りに貧相です。花は一輪も咲いていないし、誰も手入れしていないのか雑草が生えて、腐葉土も乾ききってボソボソになっていました。

これじゃ、可愛そうだ……そんな風に思ったわたしは、散歩する脚を止めて、そつと膝を折り、花壇の土に触れてみました。乾いてしまっているけれどまだ柔らかくて、ちゃんと耕せば、元の姿に戻る。

指先に触れた感触から、わたしは確信めいたものを抱きました。花を育てるのは昔から好きです。体育が苦手なわたしは、どちらかと言えばインドア派で、庭の植木鉢で色んな花を育てて、押し花にして、家族や友達にプレゼントする、という趣味がありました。

でも、そんな趣味も、あの日、あの時からやめてしまいました。そんな事をする資格なんか、わたしにはないんだという事を、思い知ったからです。今では、植木鉢もプランターも庭の隅の物置に仕舞い込まれています。

それなのに、その荒れた花壇を見たたん、わたしはある「計画」を思い出していました。そして、桜井先生が現れて、「何してるんだ」と尋ねられたわたしは、咄嗟に、

「あの、わたしにこの花壇に花を植えたいんです！」

と答えてしまいました。当然のことですが、あまりにもわたしの答えが唐突過ぎて、桜井先生は少しだけ困った顔をしました。そして、しばらくわたしの顔をじっと見つめると、再び先生はわたしに尋ねます。

「名前、なんだっけ？」

先生の問いかけも唐突で、わたしは自分が名乗りもしていないことを思い出し、急に恥ずかしくなりました。

「えっと。わたし、三年の宮野です。宮野美咲です」

「宮野か……」

聞かない名だな、と言う風な顔をして先生は言っと、三度わたしに尋ねました。

「この学校には、園芸部なんてないけど、園芸に興味でもあるの？」別に興味があるわけではありません。思いついた「計画」を実行したいだけなのですが、それをどう伝えたらいいのか分からなくてわたしは頷いていました。

「園芸用具も球根や種も、ちゃんとわたしが用意します。ここの土、きちんと手入れすれば、きっと綺麗なお花を咲かせられると思うんです。ダメ、ですか……？」

「いや、ダメってことはないけれど。この花壇をいじってくれと言うなら、そりゃ賛成したいところだが、こういうことは、いくら教師の俺でも一存では決められない」

先生は、困り果てたような顔をして、頭をかきます。ふんわりと先生のカッターシャツとネクタイからタバコのおいがしました。

花壇は学校のもので、学校のものではありません。確かに、桜井先生が勝手に決めていいことはありません。そういうのをわがままって言うんだ、という事を思い出したわたしは、あわてて頭を下げました。

「あ、あの。ごめんなさい、無理なことお願いして。今の、聞かなかったことにしてください、先生」

「待った！」

くるりと踵を返して逃げ出そうとするわたしを、先生は呼び止めました。

「えっと、宮野だっけ？ もしも、お前が本気で、この花壇をいじりたいって言うなら、明日の放課後にでも、俺のところへ来い。それまでに、何とかしておくから」

「えっ？」

「いや、この花壇の管理責任者、俺なんだよ。だから、もしも綺麗にしてくれるっていうなら、俺としては願ってもないことだ。仕事が一番減るからな」

驚くわたしに、先生は少しだけ笑って言いました。そもそも、これまで学校に花壇があることすら気付いていなかったわたしは、花壇に管理者がいたことも、桜井先生がその責任者をしていたことも知りませんでした。

「あのっ……」

その瞬間、キンコンカンと午後の授業のチャイムが、わたしの「ありがとうございます」と言いかけた言葉をかき消しました。

2 . 見捨てられた花壇（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

3・似たもの同士

理科の教師として、生物学を教えている手前、薬品の臭いには慣れている。理科準備室の備品棚には、常に実験用の薬品や試薬、ホルマリンなどが常備されており、その中でもホルマリンの臭いときたら、かなり独特のクセがあるため、なれない人の多くは鼻をつまむ。

そんなホルマリンの臭いに慣れている俺でも、医療用の薬品の臭いには、いつまでたっても慣れそうにもない。

どちらも同じ薬だろう、という人も居るかもしれないが、理化学に用いられる薬品と、医療用の薬品は、例え同じ成分であっても、まったく臭いが違うものなのだ。

特別、俺にとっては、医療用の薬の臭いを嗅ぐ度に、記憶にこびりついた痛みが騒ぎ出し、胸の奥がまるで、肌を紙ヤスリでこすられたようなザラザラした感覚に陥る。

せめてもの救いは、自動販売機の缶コーヒーではなく、豆から挽いたという特製のコーヒーの香りが、少なくとも俺の周りに漂っていることだ。

「それで？ 教頭先生は承諾したの？」

と、やたらニヤニヤと悪戯っぽい笑顔で、この部屋の主である彼女は言った。

タイトスカートからのぞく、すらりと長い脚。俺がまだ健康な高校生なら、思わず見とれてしまうような胸。鼻筋の通った、ファッションモデルも顔負けの美人。おおよそ、白衣を着ていなければ、誰も高校の校医であることに気付かないだろう。

彼女の名前は、大川岬。俺と同じ年で、中学高校の同級生でもある。高校時代の一時期は、とても「親しい」関係だったこともあるが、大学進学と共に関係は自然消滅し、互いにそれぞれの道を歩んだ。……はずだったのだが、数年の月日を経て、俺は理科の教師に、

大川は校医となつて、赴任先のこの高校で再会した。

しかし、すぐに「校医の大川先生」が、あの大川岬だとは全然気付かなかった。高校生の時にもそれなりに可愛い女の子ではあったが、見違えるほど大人っぽく美人になつた彼女に、気づけと言う方が無理難題だ。

彼女は俺との再会にとても喜んで、「きっと運命ね」なんて冗談めかして言つたが、それは運命ではなく、ただの偶然以外の何者でもないことを、俺も彼女も分かつている。何故なら、彼女と俺の親しい関係は、約八年前に幕を下ろしているのだ。そういうことに、いちいちはいやぐほど子どもではないし、今となつてはただの思い出にすぎない。だから、大川と俺は良き友人で居られる。

「まあね……教頭は生徒の自主性を尊重すればいいなんて言つてたけど、結局面倒を見るのは、俺だからな」

俺は、味気なく答えると、大川の淹れてくれたコーヒーをすすつた。さすがは、豆から挽いた本格派。実に香ばしく、コーヒー通でない俺さえも唸らせる味だ。

宮野美咲の「花壇に花を植えたい」という要望に応えて、教頭にお伺いを立てたのは、その日の放課後。頭の禿げ上がった壮年の教頭は、書類に目を落としながらも、あつさりと言野の要望を承諾してくれた。しかし、その裏には、俺に責任を丸投げすると言つ、実に「教育者」らしからぬ態度がありありとしていた。

生徒の自主性などと言つて、生徒と関わることや、面倒なことに首を突っ込むのは嫌いな人であることは、周知のこと。今更がっかりすることではないのだが、気が付くと愚痴をこぼすために、自然と保健室へと足を向けていた。

保健室は、放課後と言うこともあつてか生徒の姿はなく、ちょうど仕事終わりに、大川が自慢の特製コーヒーを淹れていた。この学校に校医は大川一人だけ。教師ではない彼女は、職員室に席はなく、代わりにこの保健室が彼女の城でもあつた。ここには、校長や教頭などの管理職の眼も届かないためか、傷薬や腹痛の内服薬、包帯な

どに混じって、彼女の私物が沢山置かれている。コーヒーマーカ―もその私物の一つだ。

俺が校内全面禁煙のルールを破って、屋上と言う名の聖域でタバコを吸っているのに対して、大川は保健室と言う名の聖域で、美味しいコーヒ―を淹れている。似たもの同志、ということだ。

その同志のご相伴に預かりながら、俺は愚痴交じりに経緯を話した。話し相手としては、大川は優秀だ。どんな話でも厭な顔一つせず聞いてくれる。きつと、生徒たちの悩み相談を引き受けているうちに身に付けた技能なのだろう。

「宮野さんね、あの子がそんなこと言い出すなんて意外ね」

話を聞き終えた大川は、コーヒ―カップを片手に言う。

「なんだ、大川は宮野美咲のこと、知ってるのか？」

「当たり前よ。っていうか、生徒の健康を預かる身として、全校生徒の顔と名前くらいはちゃんと覚えてるわ」

につこりと微笑む大川。思わず俺は舌を巻く。同じ不良教師でも、大川はやるべき仕事はきちんとこなしているようだ。

「それに、わたしと同じ名前でしょ、ほら、おおかわみさき、みやのみさき。だから、必然的に覚えてしまったのよ。わたしの印象では、真面目であんまり自主性や積極性の強い子じゃないと思ってただけ」

「要は大人しい子ってことだろう？ 確かにそういう雰囲気だったな」

「それに、あんまり体も強くないから、よく貧血や目眩めまいを起こして、保健室に来るのよ。ホント、いまだき珍しいくらいおとなしい子。だから、意外ね……」

よほど、宮野美咲という生徒が、俺に要望を突きつけてきたことが以外だったらしく、驚きの顔をした。ころころと変わる大川の顔は、見飽きない。だが、友人である女性の顔をまじまじと見つめるわけにはいかない。俺は、飲み干したコーヒ―カップを診察机におくと、代わりに机に放り出していた紙切れを取り上げた。

「まあ、なんにせよ、園芸部を部活動として新設することになった。明日にでも、生徒総会への申請書を宮野に渡すつもり」

と、言いながら、紙切れを眺める。部活動申請の書類だ。すでに顧問としての俺の名前と印鑑は押してある。後は、宮野美咲が名前を記入して、生徒総会に提出すれば、正式に部活動として認められる。教頭からの承諾もあるから、早ければ今週中には、活動開始出来るだろう。

しかし、時期はずれの部活申請には、部活動のための予算が下りない。来年の四月までは、自費で賄うしかないのだが、どの道小さな花壇をいじるだけだ。それほど費用を必要としたりはしないだろう。少しくらいなら、俺にも補助してやるくらいの余裕はある。

「意外って言えば……桜井くんも意外よね」

唐突に大川が言う。何が言いたいのかわからずに、俺は思わず小首をかしげた。すると、彼女は笑いをかみ殺したような表情になる。「だって、あなたって昔から、あんまり他人に深く関わらない人だったじゃない。それが、何の心境の変化かしら。宮野さんのために申請書まで貰ってきて、少し暗いなら活動費をポケットマネーで補助してやろうと思ってる。まあ、たしかに、宮野さんってどこか夢で可愛いところがあるものね。男としては、守ってあげなくなるタイプかしら」

「はあ？ なにバカなこといつてるんだ。俺は教師で、宮野は生徒。教師が、生徒のために何かしようって思うのは、教師として当たり前だろ！」

「あら、桜井君がそんな熱血教師だったなんて知らなかったわ」

からからと、大川は笑った。人をからかったような口調は、昔から変わらない、大川の特徴だ。

「少なくとも、あの子は何かを塞いでる。あなたもね。似たもの同志、通じるころでもあったんでしょ。まあ、いずれにしても、あの荒れ放題の花壇に花を植えることは悪いことではないわ。頑張つて、桜井先生。中間考査の問題作りもね」

俺に厭な事を思い出させた大川は、そのまま俺を保健室から追出した。俺は、申請書を片手に、廊下を理科準備室へと歩いた。

確かに、なんで宮野の「花を植えたい」という、取るに足らない願いを聞き入れてやったのか、自分でも良く分からない。よく知りもしない生徒なのに、ここまでしてやる義理はない。「そういうことは、担任にでも相談しろ」と突っぱねても良かった。俺自身不思議だった。でも、「聞かなかったことにしてください」と彼女が言った瞬間、俺は何とかしてやりたいと思ったのだ。

似たもの同志……。もしも大川の言うとおりなら、宮野美咲も心の奥でザラザラしたものを感じているということだろうか？

ふと、廊下の窓越しに見える、中庭の花壇を見つめながら、俺はそんな事を考えていた。その時はまだ、宮野の「計画」にも気付いていなかったし、彼女が抱えるものも、彼女の想いにも気付いてはいなかった。

3 . 似たもの同士（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

4・空を眺めるのが好き

「姉ちゃん!」

突然声がして、わたしの心臓は飛び出しそうになりました。振り返ると、わたしの部屋の戸口に、弟の透が立っています。ちよつと怒ってるみたいで、男の子にしては可愛い顔が吊りあがっていました。

「何度も呼んだのに、ぼーっとして!」

全然気がつきませんでした。

学校から帰って、制服がシワになる前に着替えた後、机に座ってぼんやりしていました。わたしの部屋からは、とても綺麗な空を眺めることが出来ます。青空、曇り空、星空……季節によって、柔らかかったり冷たかったり、色んな表情を見せる空は、いままさに初夏の夕焼け空に染まっていました。

ずっと以前。まだわたしたちが小さかったころ。わたしが小学生に上がったのをきっかけに、わたしと弟に部屋が与えられることになりました。そろそろ子どもたちのプライバシーを尊重しようという、両親の配慮です。ところが一戸建ての宮野家には、対照的な二つの部屋しかありませんでした。ひとつは、今わたしの部屋になっている、空が見える西向きの部屋と、もう一つは北に面した日陰の部屋です。当然、当時のわたしたちはどちらが西向きの部屋を手に入れるかで、姉弟喧嘩をしました。結果は、姉であるわたしが口と実力で勝利し、見事にこの部屋を手に入れたのです。

その日から、悲しいことや辛いことがあると、嬉しかったこと楽しかった事を思い出しながら、空を眺めるようになりました。そうしていると、悲しいことや辛いことがあっても、全部忘れて、元気になれるような気がするのです。

でも、今日は違いました。少しだけ、いつもより心が弾んでいました。わたしの顔はいつも通り笑顔なんか何処にもなくて、透には

わたしの心が弾んでいることなんて分らないかもしれませんが、とても嬉しいことがあったのです。

中庭に寂れた花壇があるのを見つけたのは、一昨日のこと。そして、桜井先生が園芸部を作るために部活動申請書を持ってきてくれたのは、今日の放課後でした。

先生にとつてわたしは沢山居る生徒の一人。しかも直接教鞭を執ってもらっている先生ではない桜井先生が、約束を覚えているかどうか、本当のところ、半信半疑でした。でも「計画」のためには諦めるためには行きません。

午後の授業が終わり、わたしは荷物をまとめると、その足で理科準備室へと向かいました。理科準備室へ向かう道すがら、すこし花壇に寄り道もしました。そして、決意を新たにして、いざ理科準備室の扉をノックすると、先生が約束を覚えていないかもしれない、と言つわたしの不安を他所に、

「待つてたよ」

と、先生は朗らかな笑顔でわたしに、すでに顧問の先生として桜井先生の名前とサインが書かれている申請書を手渡してくれました。そんなたった一枚の紙切れですが、それがわたしの「計画」のスタートラインです。

「いろいろと準備するものもあるだろうし、すぐに花壇をいじると言つわけにも行かないだろう。それに先立つものも必要だしね」

わたしが、部員の欄に名前を書く間、先生が言いました。先立つものとは、「お金」のことです。新しい部活は四月の予算会議までに申請しないと、受理はしてくれませんが、代わりにその一年間は部費がもらえません。部活動には、いろいろと経費がかかることは分かっていますけど、今はカレンダーも折り返して六月です。来年の春まで残り半年と三ヶ月は、一文無しで部活動をやっていかなければなりません。

でも、花壇を綺麗にする園芸用具なら、いくつかは我が家の倉庫に、使わなくなつてしまつた植木鉢と一緒に眠っています。

と、わたしが先生に提案すると、先生はちよつと渋い顔をしました。

「それは感心しないよ。個人的な趣味の園芸じゃなくて、例え一人きりの部活でも、学校の部活動だ。生徒になにもかも負担させるわけにはいかないよ」

だから、大抵の生徒は、きちんと四月に部活動を申請します。それは、よく分かっているのですが、来年を待つていたら、わたしは卒業してしまいます。それでは、計画は実行ません。

だけど、「計画は今じゃなきゃだめなんです」なんて先生に言うわけにもいきません。先生はわたしの考えなんて、知りませんし、知る必要もないです。知つてしまえば、きっと先生は笑うと思います。バカだねつて言うと思います。

「でも、種や球根を買うには、お金が要ります。肥料とか花の種つてあまり安くないんです。でも、少しくらいなら、お小遣いを切り詰めれば何とかかなりますし、アルバイトもします」

「だめだ。校則で、特段の事情がない生徒のアルバイトは認められていないのは、宮野だつて知つてるだろ？」

そういわれてしまえば、何も言い返せません。ほとんど初対面のわたし一人のために、わざわざ園芸部の顧問を務めてくれる先生、わたしの計画に巻き込んでしまった先生です。それだけで、とても嬉しいことなのに、わがままを言うわけには行きません。

「用具なら学校の備品を使わせてもらえばいいさ。ありもので間に合わせて、秋の引退までに、少しでも形に残る事をすれば、後に続くものも現れる。宮野が卒業した後も……」

先生の言うとおり、予算がないわたしにできることは、花壇に生えた雑草を取り除き、土を耕して、綺麗に整備するのが精一杯かもしれせん。でも、それではダメなんです。

「花を植えたいんです。十月七日までに花を咲かせないといけないんです！」

つい、ぼろりと零すように、言つてしまいました。すると、当然

のように先生はきょとんしました。

「何で？」

「それは、その、十月七日はわたしの十八歳の誕生日なんです。その日までに、花を咲かせたいなって……」

咄嗟に付いた嘘です。でも、二十パーセントくらいは、ホントのことです。十月七日は、わたしの誕生日です。でも、それがわたしの「計画」ではありません。

先生はしばらく、わたしの顔をじっと見て、急ににっこりと笑って、

「そうか。女の子ってのは、いつでも誕生日にこだわるもんな。俺なんて誕生日なんて、過ぎてから思い出すよ。二十六回も誕生日を迎えると、歳をとるのも学校の年中行事と一緒に、ただの通過点だからね」

と冗談めかして言いました。本当は笑うべきだったのかもしれない。いえ、愛想笑いでも、笑いたかった。それなのに、わたしはにこりともせず、先生に苦笑いをさせてしまいました。

「大人しいんだな、宮野は」

そんなことはありません。大人しいと言うよりは、ただの根暗なんです。笑い方も忘れた、いつとも能面みたいな顔してる気持ち悪いやつです。

先生はわたしの顔を見つめ、溜息のような息を吐き出し、

「まあ、俺もやかましいのは苦手だよ。……バイトの件は、学校にバレなきゃ問題はないだろ。どうせ、バイトしてる子なんて、沢山居るだろうし。でも、宮野は三年生だ。受験勉強だってあるし、日々の生活だってある。くれぐれも無理はするなよ」

優しくわたしに笑いかけてくれました。ちよつとタバコの臭いがする笑顔でした。

そうして、先生の「無理はするなよ」という言葉の大切さもかみ締めることなく、ついにわたし一人だけの園芸部が発足し、「計画」は始まったのです。それは、わたしにとって、とても嬉しいことで

した。笑わなくても、心は軽く弾んでいました。きつとあの日、忘れた感覚に、わたしはちよつと浮かれていたのかもしれませんが。だから、学校から帰って、着替えるなり、ぼんやりと窓から見える夕焼け空を眺め、透の呼びかけにも気付かなかったのかもしれませんが。「それで、何か用？」

わたしの部屋の戸口に立つ透に尋ねると、弟は少し呆れたような顔をしました。

「今日は、姉ちゃんが食事当番でしょ？　ぼく、お腹すいたよ」
そう言われて、カレンダーに目をやります。毎週土日と火曜日と木曜日は、わたしが夕飯を作る係りです。我が家は、両親が共働きで夜が遅いため、昔から夕飯はわたしと透で作ることにしていました。浮かれてしまい、そんなことも忘れていたみたいです。

「ごめんね」

わたしはぺこりと頭を下げました。そんなわたしに、弟は腰に手を当てながら言いました。

「なんかさ、姉ちゃん、最近謝ってばかり。昔は、そんなんじゃないかったよね？」

「うん、ごめんね」

きつと、弟はさらに呆れ顔をしていたと思います。でも、わたしはあえてそんな弟と目を合わせることなく、足早に階段を下りて、台所に向かいました。

夕飯のメニュー、何にしよう……。

4 . 空を眺めるのが好き（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

5・秘密のとりひき

生徒たちが一喜一憂しながらも、どこか晴れやかな顔をしている。彼らにとつて、地獄とも呼べる戦いを何とか生き抜いたのだ。そう、「中間考査」という戦いを。

しかし、教師の方も試験期間というのは、戦いである。

試験問題は、すべて教師陣が考える。大手予備校の問題集をそのまま引用する、怠惰な教師も少なくない。出来ることなら、俺もそうしたいところだ。だが、俺は自分で言うのもなんだが、そういうところだけ律儀な性格をしている。必死に頭を悩ませて、問題が出来上がったのは、試験日の二日前。

さらに、当日の試験時間には、教師が担当科目以外の試験監督も務める。生徒の皆がそういうわけではないが、こあわよくば試験監督の眼を盗み、カンニングをしようとする者も居る。そのため、目をさらにして、光らせて居なければならないのだ。

もしも、カンニングが発覚することなく、そのまま試験で不正な高得点を納めたなら、その生徒の将来に関わることだし、俺自身の責任も問われかねない。屋上でこっそりタバコを吸うような、不良に育てたくはないと言うような、教師としてのプライドが、俺にも備わっているようだ。

そうして無事に何事もなく、試験と言う名の生徒と教師の熾烈な戦いが終わりを告げて、教師には延長戦が待っている。生徒の答案をすべて採点してやらなければならないのだ。それも、教師としての責任なのだが、試験を終えた生徒たちの晴れ晴れとした顔を見ていると、いつも、少し羨ましいような、腹の立つような気持ちになる。

教師だって人間だもの……。

そんな言い訳に似た文言を頭の中に去来させながら、赤ペン片手の採点作業に息が詰まる思いを感じた俺は、気分転換の一服と洒落

込むつもりで、屋上の聖域を目指して、理科準備室を出た。

すでに、外は夕暮れの色。リノリウムの廊下がオレンジ色に染まり、湿気を帯びた六月の風も、やんわりと涼しさを含んでいた。

ふと、そんな廊下の窓越しに見える花壇に目をやる。

そういえば……といった具合に、中間考査を終えたら、園芸部の活動を開始する、という約束を思い出した、ちょうどそのタイミングで、視界の端にぼつんと立つ宮野の姿が入った。

宮野美咲は、出会ったときと同じように儚げに佇み、ぼんやりと花壇を見つめている。どうやら、俺に気付いてはいないようで、このまま無視して通り過ぎることも出来たが、何故か俺は足を止めずにはいらなかった。

『似たもの同志』

大川に言われた言葉を思い出しながら、

「宮野」

と、廊下の窓を開いて声をかけると、宮野は少し驚いたような顔をした。

「どうしたんだ？ 試験も終わったんだ。さっさと帰って、友達と遊びに行ったりしないのか？」

大概の生徒は、試験が終われば、抑圧された鬱憤を晴らすかのように、大手を振って遊びに出かけるものだ。かく言う、俺自身も学生の頃は、試験が終わると、少しはハメを外したものだ。

だが、宮野は俺の科白に、少し陰を落としたような表情で俯いた。
「友達は……」

「いません。と続いたのだろう。ほとんど聞き取れないような声で、宮野は言う。

宮野は、明らかに口数が少なく、笑顔も見せないタイプだ。それを、大人しいと呼ぶのかどうかは良く分からないが、物静かではある。一方、他の生徒たちは、青春真っ只中を、日々前進し続けながら、元気いっぱいキラキラと輝いている。現代っ子らしい物怖じしない性格で、時折、教師である俺のことを「桜井ちゃん」と親し

げに呼ぶ生徒も居るくらいだ。

そうしてみれば、物静かで遠慮がち、夏の風に煽られれば、あっという間に飛んで言ってしまうような印象すら受ける、宮野と他の生徒は、水と油のようにも見える。

言い換えれば、宮野は何処か厭世的な雰囲気すら漂わせていた。

「それで、家にも帰らないで、何してたんだ？」

宮野の顔がこれ以上暗くなるのを嫌って、俺が話題を変えるように尋ねると、固くなりかけた彼女の顔が少しだけ和らいだ。

「花を……何の花を植えるか、考えていたんです。出来れば、一年中花を咲かせられる、花壇にしたいんです」

「ふうん。それで、何の花を植えるか、決まったのか？」

「はい。これから、夏の間に種を植えると、最初に花を咲かせるのは、早くても、来月以降です。だから、夏から冬に咲く花を植えようと思います」

「冬？ 冬に咲く花なんて、あるのか？」

俺は、植物、特にガーデンフラワーに関しての知識は乏しい。花を愛でるとい習慣がそもそもないのだ。すると、宮野はこくこくと二度ほど頷いて、

「ありますよ。クレマチス、ガーデンシクラメン、クロツカス、ストック、スイートアリッサム、スノードロップ、プリムラ……」

と、スラスラと花の名前を連ねていく。聞き慣れない花の名前もあり、それだけで、宮野のガーデンングに対する造詣の深さを思い知らされた。

「右の一角には、パンジーを植えようと思います。それから順番に、リコリス、ラベンダー、ゼラニウム、コスモス、ストック、クロツカス、プリムラ」

宮野は、おそらく随分悩んで選んだであろう、花の名前を、白く細い指で煉瓦で仕切られた花壇のブロックを指差しながら、列挙していく。そして、最後に少しだけ間があって、

「あと、その端には、ヒースを植えようと思います」

おずおずと、花壇の隅っこ、日陰の中庭で、最も日当たりの良い場所を指差した。

「ヒース？ 聞かない名だな」

「ちょうど、ぶどうの房を逆さにしたように、白や桃色の小さな花をいくつも咲かせて、とても可愛いですよ。日本では別の名前があるって……」

他の生徒に比べて、物静かな印象の宮野がやたらと饒舌に語る。

なんだか、宮野にも歳相応なところがあるのだな、と思わず感心した俺は、しばらくの間、彼女の話を黙って聞いていた。しかし、俺が言葉を発しないと、次第に宮野は不安そうな顔になる。

「あの、ごめんなさい。詰まらない話をしてしまつて」

また、宮野は俯きかけた。俺は、それとわかるように笑つて、

「いや、詰まらないことはないよ。園芸部の部長兼、部員のお前が、そんなに花に詳しくたとは思わなかった。ちよつと驚いたよ」

と、正直な感想を笑顔に載せて言うつと、宮野は少しだけ頬を染めた。思えば、その時、初めて宮野の表情と呼べるものを見たような気がする。

「えつと、昔から花が好きで……お母さんから教わつた押し花を、よく作つてました」

「押し花？ そりゃまた、古風だな」

おおよそ年頃の女子高校生とは思えない趣味に、思わず噴出しそうになるのをこらえた。いや、むしろ大人しい宮野には良く似合つた趣味だと思う。ただ、彼女は俺の「古風だ」という科白に敏感に反応して、恥ずかしそうに再び俯いた。

話題を変えよう……。

「やつぱりバイト、するのか？ 試験が終わつても、三年のお前には受験勉強もあるだろ。それでも、バイトしなきゃダメなのか？」

「はい。先生のお財布に迷惑かけられませんから」

冗談のつもりなのか、宮野はそういうと、顔を上げた。

園芸部は試験の前に設立されたばかりの、部員約一名の弱小部活

しかも、時期はずれの申請で、生徒会からの活動予算は下りないため、宮野は花の種や肥料などの消耗品を手に入れるため、バイトをすると言った。もちろん、教師としては校則違反であるバイトを認めるわけにはいかないが、園芸部顧問として活動費をいくらか財布から出してやるというのも、彼女のプライドを傷つけかねない。結局、宮野がバイトをすることに、俺は目を瞑ることにした。不良教師らしく。

「でも、まだどんなバイトするかは決めてません。色々ありすぎて、自分に何が一番合っているのか分からないんです」

「真面目なんだな、宮野は。まあ、いずれにしても無理だけはするなよ」

「はい。お気遣いありがとうございます、桜井先生」

宮野は、ぺこりとお辞儀をする。宮野の長い髪が、初夏の夕暮れ時を駆け抜ける、淡いオレンジ色の風にふわりと揺れた。

無理はするな。教師として至極当然の科白を吐き出したつもりだったが、それはほとんど本心から出た言葉で、大川が冗談交じりに言った「守ってやりたい」というのとは違って、初夏の穏やかな風にも吹き飛ばされそうな宮野のことを、教え子の一人として、「放っておけない」と言った方が、いいかもしれない。いや、大差ないか。

「先生、先生はタバコを吸いに行く途中だったんじゃないですか？」

宮野の小さな口からこぼれだした言葉に、俺は心臓を掴まれたような気がした。

「あ、ああ。そうだけど。何で分かったの？」

「だって、先生のシャツ。タバコの臭いがしないから」

宮野は、鼻が利くのだろうか。

「バレバレね……。俺がこっそりタバコ吸ってること、内緒にしてくれよな。俺も、宮野のバイトの件、内緒にしておくから」

少しだけ笑って、片目をを瞑ると、宮野はそれといって顔色を変えることなく「わかりました」と短く応えた。

「いいバイト、見つかるといいな。でも、今日はそろそろ、日が落ちる。さっさと家に帰れよ。じゃあ、また明日な」

俺はやや声のトーンを落として、宮野に言うつと、窓を閉めた。しかし、宮野はその後もしばらく花壇のところに、ぼんやりと立っていた事を、俺は屋上の聖域から、タバコを吹かしながら、同じようにぼんやりと眺めて知っている。

5 . 秘密のとりひき（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

6・商店街の花屋

世の中は不景気だそうです。

暗い話ばかりが、右へ左へ飛び交っても、高校生のわたしには、それほど実感が湧くものではありませんでした。ところが、いざアルバイトを探してみると、なかなか見つからなくて、ようやく世の中が不景気なんだ、という実感を得ました。あんまり嬉しいことはありません。きっとわたしの両親も、世の中の大人の人たちすべてが、とっても苦労しているんだと思うと、少しばかり胸が痛みます。

桜井先生も苦労されているのでしょうか？ もしそうだとしたら、わたしのわがままにつき合わせるような形になってしまったことは、とても申し訳なく思います。それでも、わたしは計画を実現したいのです。そうしなければ、わたしは前に進めない……。そんな気がするのです。

アルバイトの条件にこだわりはありません。高校生でも雇ってくれて、頭の悪いわたしがちゃんと学業と両立できるのなら、どんなお仕事だって頑張ります。お給金だって、花壇に花を植えるためのお小遣いが稼げたら、それでいいのです。でも、どのアルバイトも、常に長し襷に短しです。

どんな仕事でも頑張る、と言った以上は、どんな仕事でもウエルカムなはずなのですが、やっぱり身の丈に合う仕事と、合わない仕事があります。例えば、ファミレスの接客はわたしには向いていないでしょう。作り笑顔も出来なくて、弟に窘められるような、根暗のわたしが「いらっしやいませ」と言ったところで、お客さんに不快な思いをさせてしまいます。かと言って、体力に自信があるわけではありません。肉体労働は、わたしには向いていません。

そんな事を言っていると、本当にわがまま以外の何ものでもなくなってしまうですが、アルバイトを理由に、両親や弟に迷惑をかけ

たくありません。中間試験の点数は、予想通りあまりいいものではありませんでした。わたしの両親は、成績の事をとやかく言う人たちではありませんが、言われないから余計に心苦しくて、アルバイトをするなんて切り出せず、結局家族にはこそそことしながら、アルバイト探しを始めました。

それに、桜井先生にも「無理はするな」と言われました。わたしの通う高校では校則で、アルバイトが禁止されています。もちろん、先生たちの眼を盗んでアルバイトしている子はたくさん居るけれど、だからと言って、わたしのわがままに付き合ってくれる、優しい桜井先生にも迷惑をかけるわけには行きません。

そうして、中々良いアルバイトにめぐり合うことが出来ずに、ヤキモキしていたわたしの前に現れたのが、「フラワーショップ・タカナシ」でした。

通学路の途中、国道を渡り、一本路地に入ったところに商店街があります。八百屋さん、魚屋さん、お肉屋さん、クリーニング屋さん、喫茶店に並ぶ、小さくて可愛らしいお花屋さんに、アルバイト募集の貼り紙を見つけたのは、ほとんど偶然でした。むしろ、こんなところにお花屋さんがあったことを、全然知りませんでした。

本当は学校の帰り道、無料のアルバイト雑誌を手に入れるために立ち寄ったのですが、そんなことなんて忘れてしまって、吸い寄せられるように、わたしは「フラワーショップ・タカナシ」の入り口をくぐりました。

店内はとても静かで、花のために空調が効かせてあり、ひんやりとしていました。すこし息を大きく吸い込むと、店内に所狭しと並べられた、色んな花のいい匂いが、ふんわりと鼻をくすぐります。「いらっしやい」

奥の方から声がして、わたしはドキリとしました。

「何のお花をお探ですか？」

にっこりと優しいような笑顔で、わたしの傍にやって来たのは、黄色いエプロン姿と店長のネームを付けた、女の人。わたしよりずっ

と年上、わたしのお母さんくらいの年齢でしょうか。目じりに少し小じわが見え隠れしていますが、目鼻立ちの整った、ポニーテールの良く似合う明るい美人な女の人です。

「もしも、店内にない花をお探でしたら、ご注文下さい。三日以内には、お取り寄せできると思います」

てつきりお客さんだと勘違いしている店長さんに、わたしは慌てて頭を左右に振りました。

「あ、あのあの。違うんです。わたし、アルバイトの貼り紙をみて突然舞い降りた緊張の所為で美味く言葉に出来ませんでした。だけど、店長さんは、一瞬だけ驚いたような顔を見ると、再び優しいような笑顔になって、

「あら、そうだったの？ ごめんなさいね、お客さんだと思ったの。それじゃ、早速面接をしましょう。奥へどうぞ」

と、わたしをお店の奥に事務所へと案内してくれました。事務所といっても、人が三人も入ればぎゅうぎゅうになりそうな、本当に小さな部屋で、簡易のデスクとパソコン、パイプ椅子が二つあるだけです。

「えっと、わたしは店長の、タカナシです。あなたのお名前は？」
勧められたパイプ椅子にわたしが腰を下ろすなり、店長さんこと、タカナシさんは面接を始めました。「宮野美咲です」と名乗る声も、思わず裏返ってしまいます。

「美咲ちゃんね……。さっそく、アルバイトの件なんですけど、一つだけ確認させて。あなたのその制服から察するに、あなた西高の生徒さんよね？」

「はい、そうです」

と、わたしが頷くと、タカナシさんは少しだけ顔を曇らせました。「たしかあそこはアルバイト禁止のはずじゃなかったかしら。校則を破っても、アルバイトしたいの？ お小遣い、足りない？」

「えっと、その……」

タカナシさんの疑問に、上手く説明する自信がありませんでした。

何度が、言葉に詰まりながらも、ようやくタカナシさんに分かるように、アルバイトの動機を話し終えたときには、すでに時計の針が半周していました。

いつから、わたしはこんなに口下手になってしまったのだろうか……、タカナシさんは、口を閉ざすと何事か思案をめぐらせているように、沈黙と時計の音だけが、わたしとタカナシさんの間を流れていく間、わたしはずっとそんな事を考えながら、床を見つめていました。

「子育てもひと段落して、ずっと夢だったお店を実家の近くに開くことができたの。ちょうど、二ヶ月前」

不意に、タカナシさんが語り始めます。

「こんな小さな、フラワーショップだから一人で何でもできるって思ったんだけどね。経営っていうのは、思ってるよりも難しいもので、夫や娘に手伝ってもらうことも出来るけれど、家族の反対を押し切って、わがままで始めたお店だから、これ以上迷惑はかけられない。そういうわけで、あなたにお給料を弾んであげることが出来ないわよ」

確かに、失礼だけど、儲かっているようには見えない、小さなお花屋さん。それでも、花壇に植えるお花のために、お花屋さんでアルバイトできたら、とても素敵なことだと思います。それは同時にわたしの計画が一步前進に近づくということです。だから、お給料なんて、いくらでも構わないのです。

「フラワーショップの仕事はとても大変よ。商品を枯らさないようにちゃんと手入れしてやらなくちゃならないし、あまり楽しい仕事じゃないわ。アルバイトと言っても、毎日来てもらうことになるかもしれない」

「一生懸命がんばります」

決まり文句のような言葉をわたしが言うと、タカナシさんは少しだけ苦笑いを見せました。

「無理をしてはだめよ。ちゃんと受験勉強もすること。家族やお友

達に迷惑をかけないこと。それが約束できるならアルバイトに来てわたしも、美咲ちゃんに無理強いはいしないし、学校にも内緒にしてあげる」

「本当ですか？」

「ええ、勿論よ。どうせ、アルバイト禁止なんて言っても、ほとんどの学生がアルバイトしてるものよ。わたしも、高校生の頃は、よくアルバイトしたものよ」

遠い昔を懐かしむように言ったタカナシさんは、ずっとわたしに手を伸ばしてきました。わたしが、おずおずとその手を掴むと、タカナシさんはにっこりと微笑んで力強く握手してくれました。

「じゃあ、エプロンを用意しておくから、来週からアルバイト、よろしくね」

そう言われて、わたしはなんだかとても嬉しくなって、でも顔は全然笑っていなかったけれど、何度も何度も頷き返して、お礼の言葉をお口にしました。

それから、少しだけ仕事のお話をして、家に帰る時刻には、商店街のほとんどのお店が、シャッターを下ろした後でした。わざわざ国道まで送ってくれたタカナシさんは、別れ際にふと何かを思い出したように、歩き出したわたしを呼び止めました。

「そつえば、わたしの娘も西高に通ってるんだけど……美咲ちゃんと同じ年の三年生。タカナシカノって言うんだけど、知らない？」心当たりのない名前に、わたしは思わずきょとんとしてしまいました。そもそも、わたしは友達も居ないため、同級生の名前すらろくに覚えていません。だから、タカナシカノ、と言われてもピンと来るものではありませんでした。

「そつか、知らないか。フラワーショップを始めてから忙しくて、娘とはろくに口聞いてないのよ。ちゃんと、受験勉強してるんだか……。これでも親としては気になるの。だから、もしも知ってるなら、って思っただけ」

わたしの表情を読み取って、タカナシさんは少しばかり、残念そ

うに溜息を吐きました。何と言葉を返していいのかわかりません。

「まあ、いいわ……。気をつけて帰るのよ、美咲ちゃん」

わたしは言葉に迷ったまま、何も言い出せず、家路に就きました。そんなわたしのことを、歩道橋の向こうに見えなくなるまで、タカナシさんは見送ってくれました。

6 . 商店街の花屋（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

7・地域清掃の日

宮野がアルバイトを始めたらしいと話すと、大川は愛用のコーヒークップを片手に、少し驚いたような顔をした。誰の眼からも明らかほど、積極性に欠けるところのある宮野が、本当にアルバイトをはじめるとは、思っていなかったらしい。

授業も急ぎの仕事もないときは、暇をもてあます。職員室や理科準備室に籠るのも息苦しいし、屋上でタバコを吸うわけにも行かない時には、決まって保健室のドアを叩く。大川のコーヒーをご馳走になりながら、無駄話に花を咲かせるのだ。もっとも、最近の話題は宮野と園芸部の話に集中していた。

中間試験が終わって、宮野も部費のためのアルバイトを始め、ついに園芸部が活動開始となった。宮野のアルバイトにあわせ、部活動の時間は、朝練ならぬ早朝と、アルバイトの時刻までのほんの短い放課後に絞られた。

もっとも、とりあえずは、花壇の雑草を抜き、土を耕してやらなければならぬ。長い間、真つ当な花を咲かせていない花壇は、土がやせ衰えている。そのため、さらさらと流れるグラウンドから聞こえてくる運動部の掛け声と、不ぞろいな吹奏楽部の練習に耳を傾けながら、スコップと手鍬で黙々と雑草を抜くのはとても地味な作業だが、反対に、綺麗な花を咲かせるためには欠かせない作業だった。「そう、じゃあ園芸部の活動は、順調にスタートしたってわけか。でも、宮野さん、朝と放課後の草抜きに、毎日のアルバイトと受験勉強じゃあ、休む暇なしね」

大川は、そう言うのとちと、デスクの上に置かれたバインダーに目を落とした。どうやら生徒たちの健康状態をチェックした資料らしい。さすがに、教師と言えども、盗み見るのが許されない個人情報のかたまりだ。特に、女の子たちのそういった情報を、男の教師である俺が見ていいはずもない。

ただ、少しだけ目の端に入ったページには、確かに「宮野美咲」と言う名前が記入してあったのを、目ざとく見つけてしまった。

「このところ、時々貧血を起こして、保健室へ来るのよ」

大川の言葉に、今度は俺が驚く番だった。

「何か病気とか？」

「ほとんど寝不足みたい。あの子、顔に出さないから分かりにくいけれど、疲れてるって顔をしてた」

宮野は、自分の感情を表あまり出さない。笑うところなんて、まだ一度も見えていない。それでも、全校生徒の健康を診ている校医の大川には、宮野のほんの些細な感情の動きを読み取ることが出来るようだ。

「無理はするなって、言っただけどな……」

俺は、大川の淹れてくれたコーヒートを煽って、湯気を溜息と共に吐き出した。

「あら、桜井くん。宮野さんのこと、心配してるの？」

「そりゃ一応、園芸部の顧問としては、部員のことは心配するさ。

何かあれば、責任を取らされるのは俺だからな」

「ふうん。でも、それだけかしら？」

大川は口角を軽く上げて、意味深な微笑みを、俺に投げかけた。

「それだけ」も何も、それしかないだろう。少しばかり憮然としながら、俺は大川を睨みつける。

だが、大川は棘のついた俺の視線を、軽くかわすと、妙に真剣な表情になって、

「本当は、あの子と重ねているんでしょう？」

と、言った。

「あの子って誰だよ？」

「そんなこと言わなくても、分かってるでしょ。でも、宮野さんに重ねるのは、感心しないわ。たとえあの子がどんな子でも、宮野さんは宮野さんよ」

まるで、説教でもするかのような大川の口ぶりに、俺は少しばかり

り腹が立つてきた。

「べつに重ねたりしてねえよっ！ 教師が生徒の事を気にかけるのは、普通だろ？」

「フツーかどうかは、さておいても、ムキになるところを見ると、自覚はあるみたいね。過去のことは過去のこととして、あの子をあの子として見てあげないと、傷つくのは宮野さんよ。それは、教師としてするべきことじゃないわ」

「分かったような口を聞くなよ！ お前のそういうところが、嫌いだ」

思わず、棘を帯びた言葉を吐き出してしまつて、俺はひどく後悔した。だが、先に俺の心の穴を掘り出すような真似をしたのは、大川の方だ。

「嫌いで結構よ。わたしたちの関係つて、十年も前に終わっているもの。たとえ、この学校で再会したことが運命でも、それは変わらないでしょ？ だったら、桜井くんは十年の間、ずっと引きずり続けてるものを捨てなきゃいけないんじゃないかしら」

「何も引きずっているものなんて……」

「ない、と言いかけた口が、自然と噤んでしまう。引きずっていないければ、大川に掘り出されるような心の穴など、存在していないはずだ。」

「困ったものね。わたしは校医だけど、教師の心のケアまでは出来ないわ。大人の心療内科は専門外よ」

大川はコーヒーをすすった。コーヒー好きのクセに猫舌の彼女は、まだコーヒーが熱かったのか、少しばかり顔をしかめた。

「別にそんなこと、頼んでないさ。タバコでも吸ってくるよ」

何となく、言い合いになりそうな予感に、俺は席を立った。嫌いだ、などと言っておきながら虫のいい話かもしれないが、大川と喧嘩をしたくはない。

「そついえば、桜井くん。あなた、授業があるんじゃないの？」

時計に目をやった大川が、ふと気付いたように言う。もうじき三

時限目が始まる時刻だ。大川は何故か、俺の授業日程を把握している。確かに、今日の三時限目は、本来なら三年生の授業が入っている。今から、屋上に上がっているのは、おそらく授業開始までに間に合わない。あわよくば間に合ったとしても、タバコの臭いを消すには至らないだろう。

「いや、今日は月一の地域清掃の日だ。だから、授業はない」

俺がそう言うと、大川は「ああそうか」と相槌を打って納得を示した。俺の授業日程は覚えていても、学校行事を覚えていないとは、大川も間が抜けている。昔、そういうところが好きだった、ということ俺は思い出して、苦笑いしそうになるのを必死でこらえた。

「とにかく。宮野がまた保健室へ来たら、きつく叱っておいてくれ。無理をして体を壊したら、元も子もないってね。俺がいうより、校医で女のお前が言った方が、効き目があるだろう」

「ええ、分かったわ。でも……宮野さん少し嬉しそうにしてたわよ。園芸部を始められたことが嬉しかったんでしょね」

「宮野がそう言ったのか？」

保健室の扉を開きかけた手を止めて振り返った。大川は肩をすくめ、

「うつん。そんな顔してただけ」

と素っ気無く言っつて、まだ湯気の立つコーヒーに息を吹きかけていた。

そんな大川を尻目に、俺は保健室を後にして、廊下を歩く。生徒たちが地域清掃に出かけているため、校舎の中はことさら静寂に包まれていた。

地域清掃は、この学校の設立当時のしきたりのようなもので、日ごろお世話になっている地域の人たちに貢献するため、生徒たちがゴミ袋を片手に、街を練り歩き、ゴミ拾いや草むしりを行う。随伴する教師は、持ち回りのローテーションであり、今月は俺の当番ではない。そのため、ヒマをもて余していると言ったら、地域清掃に出かけた生徒たちに悪いだろう。

もつとも、生徒たちも決まりごとだから、地域清掃というボランティアに参加しているに過ぎない。高校生にとって、ゴミ拾いなど退屈なことで、授業がないだけマシくらいにしか思っていないことだろう。

真面目にやっている生徒はほんの一握り。宮野は……彼女の性格から察するに、たった独りでも真面目にやってそうなのがする。今日の朝も、花壇の整備のために、草むしりをしたばかりだというのに、文句も言わず街のゴミ拾いをしている姿が目には浮かぶようだ。

俺は、タバコに火をつけながら、宮野たちが地域清掃しているであろう公園に目を投じた。

と、その時だ。キイッと掠れた音を立てて、屋上の鉄扉が開いた。俺は、心臓が抉り出されるほど驚いて、思わず、タバコを遥か地上へと落としそうになった。

「先生、探しましたよ」

そう言っただけ現れたのは、女の子に受けそうな愛らしい顔立ちの、男子生徒だった。その顔に、どこかで覚えのある面影を感じながらも、受け持ちのクラスの意図でない事を確認しつつ、制服の上着が妙に似合っていないところを見ると一年生だろうか、と推察をめぐらせた。

「ぼく、一年の宮野透です」

いきなり、男子生徒は自らの名を名乗り、「お聞きしたいことがあります」と付け加えた。

宮野……その聞き覚えのありすぎる名前に、俺は驚きを隠せず、一度は落下を免れたタバコを、ついに四階の高さから、地上へと落っこちてしまった。

7 . 地域清掃の日に（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

8・小鳥さん

ごみはゴミ箱に。

公園の植え込みに立てられた、小さな看板が悲しそうな顔をしていました。何故なら、看板の足元には、タバコの吸殻や、ペットボトルが投げ捨てられているからです。自分の住んでいる街をきれいにしたい、という気持ちは、誰にでもあるものですが「つい」とか「うっかり」ごみを散らかしてしまうことというのも、誰にでもあることです。

だから、わたしたちの学校は、月に一度「地域清掃」に取り組んでいます。もちろん、学校の心象を良くしようという、大人たちのちよつとずるい算段もあるのですが、わたしは掃除をすることが嫌いではありません。ごみを拾って、街が一つきれいになるたび、悪い子のわたしに染み付いた罪が、砂粒くらいほんの少しだけ、許されたような気分になるからです。でも、それもちよつとずるい算段に違いがありません。

今月の地域清掃は、学校から程なく近い、公園です。児童公園ではなく、憩いの場として親しまれていて、後援の中心には、亀と鴨のいる小さな池があります。清掃活動に当たっては、生徒に半透明のゴミ袋が手渡されます。見つけたごみを、この袋の中に入れるのです。池の中にも水面の隙間にごみが見えますが、さすがに、柵を乗り越えて池の中に入るわけには行きません。

わたしたちに出来るのは、雑草をむしったり、公園のあちこちに、心無い人が投げ捨てたごみを拾い集めることくらいです。

わたしは、看板の足元に落ちた、ごみを拾って、まだ空っぽだった袋の中に入れました。

ふと顔を上げて辺りを見渡せば、真面目に地域清掃に取り組む生徒、先生が近くにいるときだけ真面目な振りをする生徒、端から掃除なんてゴメンだと友達とだべる生徒、十人十色と言うように、

みんな思い思いに地域清掃を楽しんでいます。

だけどわたしは、どのグループにも属することなく、ただ後を着いて行くだけでした。わたしには友達と呼べる人が、この学校に一人も居ません。高校生活と言う名の大事な青春をわたしは大幅に口スしながら、ただ無言でゴミを拾っているだけなのです。そんなわたしの事を、桜井先生が見たら、どんな風に思うでしょうか。優しい先生のことだから、わたしの事を心配してくれるかもしれません。弟の透がわたしのことを心配してくれるように……。

そんな、桜井先生と透が、ちょうど同じ頃、学校の屋上に居ることなんて、わたしは知る由もありませんでした……。

「よし、そろそろ学校に戻るぞ！ ほら、そこ私語ばかりしてたな！」

引率の先生が生徒たちの空っぽに近いゴミ袋を見て声を荒げました。今月の引率は体育の先生で、真面目で熱血漢な先生は、生徒たちを叱り飛ばしながらも、自分もゴミ袋を片手に清掃に参加しています。先生のゴミ袋は、すでにゴミで満杯になっていました。

思わず、わたしは「すごい！」と思い舌を巻いてしまいました。

生徒たちは、「だって、暑いんだもん」と、あからさまにやる気のない適当な返事を返すと、そろそろ先生に従って、公園の出口へと歩いて行きます。慌てて、わたしもその列の最後尾に遅れないように、ついていこうとしたその時、ふと生垣の傍に小さな青い花に目を奪われて、足を止めました。

花壇植えられるような、可憐な花ではなく、どちらかと言えば、雑草です。ぽつんと寂しげに咲いています。すっかり土に根を張って、とても凜として可愛らしい花のように、わたしには見えませんでした。残念なのは、ガーデニングに使われるような花ではないため、その花の名を知らないことでした。アルバイト先のタカナシさんのお店にも、きつとこんな花の種は置いていないでしょう。

わたしは、ついその花に目を奪われて、その場にしゃがみこんでしまいました。

「なんて名前の花なのかな」

花が答えてくれるわけもないのに、まるでその小さな青い花に話しかけるように、独り言を呟きました。すると、予想外の方向からその答えが返ってきて、驚かされました。

「オオイヌノフグリ。春に咲く花なのに、こんな季節に咲くなんて、これぞ雑草魂ってやつかな」

振り向くと、わたしと同じ制服を着た女の子が立っていました。

短い髪と、日焼けしたみたいになつと浅黒い肌が良く似合う、明朗快活を絵に描いたような女の子です。彼女は、にこにこ笑顔で浮かべながら、わたしの隣にちょこんとしゃがみました。

「宮野さんって、最近、園芸部作ったんでしょ？ 時々中庭の花壇を手入れしてるの見かけるよ。もしかして、花が好きなの？」

わたしが頷くと、彼女は小さな青い花を指先でつつきながら、口元に八重歯をのぞかせながら、につこりしました。

一体誰なのでしょう。わたしの名前を知っているということは、きっとクラスメイトなのでしょう。ですが、心当たりのない顔です。まあ、そんなだから友達がいないんだ、と言われてしまえば、それまでです。わたしは、クラスで浮いた存在であると同時に、クラスメイトの顔と名前をほとんど覚えていません。それは、突然わたしに話しかけてきた、彼女も例外ではありませんたでした。

わたしが困った顔をしているのに気付いたのか、彼女はまるで風船みたいに、頬を膨らませて怒ります。

「何？ わたしのこと覚えてないの？ ひつどーい！」

「う、ごめんなさい」

恐縮してしまうばかりです。わたしのような、根暗で喋らない子に話しかけてくれる人なんて、そうそうお目にかかれるものではありません。それなのに、わたしときたら、そんなありがたい人の名前を知らないのです。ホントにひどいやつです。

ところが、彼女は頬をしぼめると、また八重歯をのぞかせて笑いました。

「ま、話したの初めてだもんね。きつと中学の同窓生だつて言つても、覚えてないでしょ？」

わたしは、彼女の言う「中学」という言葉に、胸の奥がチクリとするのを感じました。ちょうどぽっかりと空いた心の穴の中に、針を投げ込まれたような気分です。もちろん、彼女が同じ中学の同窓生、と言われてもピンと来るものではありません。

「ごめんなさい」

もう一度わたしが言つと、彼女はからからと笑つてわたしの肩を軽く叩きました。

「謝るほどのことじゃないつて。わたし……」

彼女が名乗ろうとしたそのタイミングで、公園の入り口の方から呼び声が飛んできました。

「小鳥ことりーっ！！　なにしてんの、早く来ないと授業に間に合わなくなるよ！」

友達でしようか。公園の入り口で手を振る何人かの女の子たちに、「今行く！」と手を振る、彼女はすつと立ち上がりそそくさと友達のもとへと、制服のスカートを翻しながら走つていきました。

そんな後姿に、小鳥さんなんて、変わった名前。苗字だろうか、それとも名前だろうか、とわたしはどうでもいい事を思い浮かべていました。

すると、不意に、小鳥さんの友達の押し殺した声が、夏の風に乗つて、わたしの耳元に届きました。

「小鳥、なに宮野なんかと話してたの？」

明らかに、わたしを毛嫌いするような口調の棘です。でも、小鳥さんはわたしに見せたのと同じような、からからとした笑い声と共に「花の話してただけ」と言いました。

「でもさ、宮野って何か、根暗だし、名に考えてるか良くわかんないし、気持ち悪くない？」

「そうそう、いつも、ぼんやりしてて、何処見てるのか分からないし」

「中学のころと別人だよな」

「そりゃ、あんなことがあったんだもん、別人にもなるって」

口々に、わたしへの批判らしき言葉が飛んできます。でも、彼女たちは、わたしが意外と地獄耳だという事を知りません。なので、わたしは聞こえていない振りを決め込みました。

弟に指摘されるほど、わたしは感情を顔に出すのが得意ではありません。笑ったり怒ったりする方法を、忘れてしまったのです。だから、相手にしてみれば、わたし何を考えているのか分からない、というのも無理はありませんでした。しかし、

「でもでも、最近宮野ってば、生物の桜井先生に媚売ってるって話だよ」

というのには、さすがに驚いてしまいました。媚を売っているつもりなんかありませんし、噂になっていいることも知りませんでした。もちろん、わたしと先生の関係は、部活の部員と顧問以外の何ものでもないのですが、ゴシップ的な噂話というのは、年齢を問わず誰だって好きなものです。

「なんか、中庭にある花壇をいじってるって聞いた。先生を顎でこき使ってるらしいよ」

「マジで!? うわぁ、ショック。桜井先生のこと好きだったのに」
噂には、尾ひれが付くのは当たり前です。でも、さすがに桜井先生の名誉のためにも、反論をした方がいいのかなと思ったその時、意外にも黙って話を聞いていた小鳥さんが、少し声を荒げて言いました。

「そんなことないって! 少なくとも、花が好きな人に、悪い人はいない!」

その言葉に、呆然としたのは、他ならぬわたしでした。

突然わたしに話しかけてきて、わたしの見方をしてくれるなんて、不思議な人……。

「なにそれ、ドラマの科白? ダサいよ、小鳥!」

ケタケタと大声で笑う、小鳥さんの友達たちを他所に、わたしは

小鳥さんの背中をぼんやりと見つめて、少しだけ嬉しい気持ちにな
っている自分に気付きました。

8 ・ 小鳥さん（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

9・二人きりの園芸部

話がある、と言ったくせに、宮野透は一向に口を開こうとはしない。実に不可解な空気が流れる中で、俺と宮野透は、ただ、黙りこくって、屋上から一望する街の眺めをみつめていた。

宮野透には見えないだろうが、俺の頭にはいくつもの疑問符が去来していた。しかし、沈黙はそれらを何一つ解決してくれないことは、大人の俺が一番良く知っていた。

俺と宮野透に直接の面識はない。この高校の履修過程において、一年生は必ず化学を履修する。そして、二年生から、物理と生物のどちらかを履修するような仕組みになっている。だから、宮野透は彼の姉と同様、接触のない大多数の生徒の一人であり、彼にとっても俺という存在は、大勢の先生の一人、と言ったところだろう……。「そういえば、地域清掃はどうした？　まさか、もう終えて戻ってきたとか言っんじゃないだろうな？」

屋上の手すりに寄りかかりながら、俺は教師らしい叱責の言葉で沈黙を破ることにした。すると、宮野透はにべもなく、「サボリです」と言い放った。教師を目の前に、堂々とした態度だ。しかし、その一言によつて、会話は、ブツリと途切れてしまう。

話があると言ったのは、宮野透の方なのだから、俺が気をつかう理由など何処にもないのだが、何故か口を開こうとしない、宮野透に困り果ててしまった。逃げるのは良くない、と思いながらも、俺は地上に落つこととしてしまったタバコを諦めて、ズボンのポケットから新しいタバコを取り出して火を着ける。

「まさか、宮野美咲に弟がいたなんてな。知らなかったよ」

「まあ、ぼくと姉ちゃん、全然似てないですからね。無理もないです」

似ていないというのは、顔のことではないのだろう。確かに、宮野透は、女の子たちに受けの良さそうな顔をしている。それでも、

やはり姉弟ということなのか、一瞬その顔を見ただけで、どこか面影につながるものを感じずにはいられない。

むしろ、宮野透の言う「似ていない」のは顔色のことだろう。姉と違い、宮野透は自信なさ気な顔色など見せない。それどころか、何処か俺に対して、敵愾心のような棘のある視線をぶつけてくる。その理由を、このタバコが吸えないほど短くなる前に、問い質しておきたい。

しかし、このままでは一問一答のように、会話は細切れのままで、埒が明かないため、仕方なく俺のほうから切り出すことにした。

「それで、話って何なんだ？」

「話っていうのは……そのっ」

言いづらいことなのか、急に宮野透は口ごもる。だが、一瞬の後、意を決したように頷くと、

「単刀直入に言います。姉ちゃんに、園芸部なんか辞めるように、先生から言ってください！」

俺に向かって文字通り言い放った。俺が二本目のタバコを地上に落としてしまったのは、言うまでもない。下には、小さな植え込みがある。もしも、タバコの火が燦れば、学校が火事になってしまうかもしれないという、心配と共に、俺は宮野透がそう言った、その真意を測りかねた。

「園芸部なんか、とは随分な言い草だな。どういうことだよ？ お前の姉ちゃんが何してても、お前には関係ないだろう？ 悪いことしてるわけじゃないんだ」

「それは、そうですけど。家族として、迷惑してるんです。ぼくの家、両親が夜遅くまで働いているから、家事はずっと姉ちゃんと二人で分担してきました。でも、姉ちゃんがバイト始めた所為で、全部ぼくの負担になってるんです！ ぼくだって、色々やりたいことがあるんです」

「それで、園芸部を辞めさせたいってか。悪いが、それはお前の姉ちゃんが決めることだろう？ 俺が言ったところで無駄だろう」

三本目のタバコを取り出して、今度は落とさないように強く指に挟むと、火をつけた。宮野透は、俺の言葉に閉口してしまう。宮野家の事情は知らないが、たしかに弟だって部活や遊びに勤しみたいだろう。それを、姉の部活動が原因圧迫されているとなれば反感を持つのも、無理のないことかもしれない。

しかし、そのことと、俺に向けられる敵愾心を帯びた視線は、結びつかない。いや、むしろ、宮野透は本心を口にしていないような気がした。

再び、俺と宮野透の間に、沈黙が流れる。その隙間を埋めるように、夏空に吐き出される白い煙を、俺たちはただ眺めていた。

しばらくすると、屋上から見下ろす校庭に、そろそろと人の姿が現れる。地域清掃を終えて、くたびれた足取りの生徒たちだ。みな頭を垂れて、屋上の俺たちに気付く様子はなかった。

「まあ、それとなく宮野には言ってみる。弟が困ってるってな」

そろそろ予鈴がなる時刻。俺は携帯灰皿の中に吸殻を押し込みながら、宮野透に言った。宮野透は何も言わず、こくりと頷いた。それで、終わりのはずだった。

しかし、踵を返す宮野透は、何を思ったのか、ぴたりと足を止め振り向いた。不意に、宮野透の棘を帯びた鋭い言葉が、俺を貫いていく。

「本当は、先生が姉ちゃんに無理をさせてるんじゃないんですか？ ここのところ、姉ちゃんいつもバイトと受験勉強でクタクタになってるんです。それに、噂だってあるんです」

「噂だって？」

思わず、俺は訝った。

「ええ、姉ちゃんが先生に媚を売ったって」

そう言つと、宮野透は足音を立てて屋上を後にする。一方、そんな噂が立っていることなんて今の今まで知らなかった俺は、耳を疑いながら、半ば呆然として、ただひとり立ち尽くした。

おかげさまで、午後の授業は手につかなかった。

俺が宮野にアルバイトをするよう勧めた覚えはないし、宮野に媚を売られた覚えもない。俺は、単に宮野の花を植えたいという希望を、園芸部の顧問になることで、叶えてやった。そこにあるのは、教師と生徒の関係だけだ。自分で、園芸部を始めたいと言った以上、彼女は部のために活動予算を稼ぐ義務がある。もちろん、俺が自費を裂いて、園芸部に援助することはできるが、それは一人だけの園芸部にとって、特定の生徒を贖済するということになるし、そもそも宮野自身が認めないだろう。

事実はどうあれ、そういうくだらない噂はよくない。下らなければ下らないほど、噂というものは広まっていくのだ。それは、宮野を傷つけることにつながる。

確かめたわけではないけれど、俺がそうであるように、あの子もそれほど強い人間ではないようだ。つまり、大川の言葉を借りるなら、俺と宮野は「似たもの同士」なのだ。しかも、感情を発露しない彼女のことで、他愛もない悪意に踏みにじられることがあれば、ひどく思いつめてしまうかもしれない。

教師として、園芸部の顧問として、きちんと説明したい。ところが、俺にはその手段はないし、もしも俺が弁明などすれば、余計に宮野は立場が悪くなる。

宮野を傷つけたくはない……。

そんなことばかり考えていると、何度も黒板の板書を間違えてしまふ。そのたびに、「そこ、間違ってますか？」生徒に指摘されるというのは、教師としての沽券に瑕がついてしまふのと同じことだ。

それでも、何とか午後の授業を乗り切った。

授業終わりのチャイムがなると同時に、いつもより強烈な疲労感がどつと押し寄せ、俺は疲れた体を引きずりながら、中庭に向かった。もちろん園芸部の活動に参加するためだ。

すでに宮野は、中庭に座り込んで、小さな手鋤を片手に、土を耕していた。彼女は近づいてきた俺の足音に気づき、振り向かないで

言う。

「先生、何かあったんすか？」

いきなりの言葉に、俺は狼狽しかけた。足音だけで、俺の心の機微に感づくなんて、まるでエスパーのようじゃないか。

しかし、宮野の弟に頼まれたことを、彼女の頼りなく小さな背中に向かって、切り出す勇氣はさすがになかった。今更、園芸部をやめろ、というのはあまりに無碍なことだ。

「別に、なにもない」

用具入れにしている、薄汚れたプランターから、手鍬を取り出すと、半ば取り繕うように返した。もちろん、見え見えだったとは思うが、宮野がそれ以上問い質して来ることはなかった。

俺と宮野は放課後の中庭で、運動部の掛け声や吹奏楽部の練習をBGMにして、花壇に生える雑草を無言でむしった。中間試験の後、せつせと草むしりをしてきたおかげで、荒れ放題だった花壇は見違えるように、綺麗になった。あとは、宮野の望む花を植えるだけだ。

「なあ、宮野。バイト、辛いかな？」

俺がつぶやくように問いかけると、宮野はきょとんとして俺の顔を見た。何でそんなことを、突然聞くのかという顔だ。ほとんど、表情が動かないため、とても分かりにくい。が、一ヶ月あまり、放課後の時間を宮野と共に過ごして、なんとなく、彼女の表情が読み取れるようになってきた。

「辛くはないです」

俺を氣遣つての嘘ではないのだろう、きっぱりと宮野は言い切った。しかし、彼女の顔にはどこか疲れの色が滲んでいる。そう思うのは、やはり、宮野の弟が言ったことが、心のどこかに引っかかっているからだろう。

「そういえば、花屋でバイトしてるんだっただよな。店長さんはいい人かな？」

「はい、とっても優しいです。何のお役にも立てていないのに、いつも『ありがとう』って言うてくれます。そういえば、来週、初め

てのアルバイト代が出るんですよ。それで、肥料と種を買ってきてます」

「そうか、いよいよ園芸部も本格的に活動開始だな」

と、俺が言うと、宮野は心なしに微笑んだような気がした。そんな顔を見ていると、弟には悪いが、やはり「園芸部をやめろ」などと言えるはずもない。彼女が望んでしていることだ。たとえ家族でも、横槍を入れていいはずもないだろう、と俺は教師らしくない言い訳を、頭に過ぎらせた。

9 ・ 二人きりの園芸部（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

10・夏休みの約束

体が少し重いです。太ったわけではなくて、全身が疲労感に包まれているからです。でも、なるべくそういう顔を他人に見せてはいけないと思います。だって、園芸部を作りたいと言ったのも、アルバイトを始めたと言ったのも、全部わたしのわがままだからです。つい先日、授業中に貧血を起こして、保健室を訪ねたときにも、校医の大川先生に、

「園芸部に一生懸命なのも良いけれど、無理をしてはだめよ」と釘をされたばかりです。

わたし自身は無理しているつもりなんてないです。部活動をすることも、タカナシさんのお花屋さんで働くことも、とても楽しいことです。

それなのに、透や桜井先生の前では、不意に疲れた顔をしてしまい、余計な心配をかけてしまうことは、反省するべきかもしれない。わたしのことを心配してくれる数少ない、心優しい人たちに迷惑をかけるのは、許されないのです。なぜなら、わたしが中庭の花壇に花を植えるということは、それだけできつと迷惑になるからです。

それは、けして謙遜とか自分を卑下しているわけじゃなくて、わたしは花が好きだから、花壇を花で満たしたいわけではなくて、「計画」のためなのです。そのことを、透も桜井先生も知りません。

だから、気をしっかり持って、疲れたなんて口にはいけません。そう思えば思うほど、早起きして学校に向かい、授業が始まるまで花壇の手入れをして、放課後もまた花壇の手入れとアルバイトという生活に、体がまったくついていかず、疲れが蓄積されていくのを感じて、ぼんやりとしてしまいます。

そう、ちょうどその時も、ぼんやりしていました。

「ねえ、宮野さん、聞いてる？」

突然、わたしの視界にふたつの大きな瞳が、飛び込んできました。すこし睨みながらも、心配したような瞳は、小鳥さんの瞳です。

地域清掃の日から小鳥さんは、何故かわたしによく話しかけてくるようになりました。お昼休みには決まって、ガヤガヤとした教室の片隅にある、わたしの前の空席にちょこんと座って、たわいもないおしゃべりをします。

わたしは自分が根暗で無口だということは自覚しています。だから、ほとんど小鳥さんが一方的にしゃべって、わたしは相槌を返すだけなのですが、小鳥さんはいやな顔ひとつしません。

「ごめんなさい」

と、わたしが言うと、小鳥さんはさらに心配したような顔をします。そんな小鳥さんにも、わたしは迷惑をかけていると思うと、胸が痛みます。

「最近、よくぼんやりしてるよね。何か、悩みがあるなら話してよ。いつも、わたしが一方的にしゃべってるだけじゃ、申し訳ないし」

優しい言葉をかけてくれる小鳥さんは、きつととても優しい人なんだと思います。でも、悩みではなくて疲れは、小鳥さんに相談するわけにも行きません。せめて、愛想笑いでも返せたらいいのですが、そんな器用なことは出来ません。

「あの、何の話されてたんですか？」

「夏休みの話。っていうか、その敬語みたいなのやめてよ。同い年でクラスメイトでしょ？　そういうの、変だよ」

ぷうつと、小鳥さんはほほを膨らませます。まだ付き合いは浅いですけど、なんとなく小鳥さんのことが、少しだけ分かったような気がします。そういう顔をする時は、本気で怒っているわけじゃないみたいです。それでも、小鳥さんが気分を害したのなら、謝らなくちゃいけません。

「ごめんなさい」

「謝るのも禁止。まったく……それで、夏休みなんだけど、宮野さんバイト詰め？」

わたしが頭を左右に振ると、小鳥さんにはにっこりと笑顔になりました。

「だったらさ、どこか遊びに行かない？」

「わたしと？」

思わずわたしはポカンとしてしまいます。

「他に誰がいるのよ。今わたしは、宮野さんと話してたはずだけど」

空席になったわたしの前の席にちょこんと腰掛けた小鳥さんの言葉に、耳を疑わずにはいられませんでした。誰かからお誘いを受けるなんて、久しくなかったことです。身に余る光栄というのは、こういうことを言うのでしょうか。

「ほら、受験勉強の疲れを癒しに行くの。命の洗濯ってやつ。海とかどうかな！？ 隣町に、新しいビーチがオープンするんだって！」

海にはいつてみたい気がします。だけど、わたしなんかと海に出かけても、きつと楽しいことなんかありません。何一つ楽しい顔なんて出来ないわたしを見たら、きつと……ううん、必ず小鳥さんは幻滅して、嫌な気持ちになるはずです。

「わたし、泳げないから……」

嘘を吐いてでも、何とかして、お断りしようと思ったのですが、わたしがすべて言い終える前に、小鳥さんはわたしの手をぎゅっと握り締めて、

「泳げなくなっただけいいじゃん。浮き輪なら、貸してあげるよ。ね、海に行こう！ 決まり！」

と、有無を言わず、勝手に決定してしまいました。どうやら、わたしに拒否権は与えられていないようです。だけど、本当は、心の中はうれしさでいっぱいでした。ある意味、馴れ馴れしく話しかけてくる小鳥さんですが、人とこんな風におしゃべりできるのは、嫌なことではありません。きつと、昔のわたしなら、二つ返事で海に行くのを了承していたでしょう。そして、ワクワクしながら夏休みを待ち続けていたはずです。

でも、それは昔の話。今のわたしは、親しくなればなるほど小鳥さんを傷つけてしまうのではないかと、そんな漠然とした不安だけを感じていました。

「バイト、楽しい？」

さっきまで、海の話をしていたのに、唐突に、何の前触れもなく、小鳥さんがわたしに尋ねました。わたしがアルバイトしているのは、桜井先生と大川先生、それに家族しか知らないことです。なので、わたしが驚いていると、小鳥さんはクスリと笑って、

「宮野さんが、国道の商店街にある花屋で、バイトしてるのを見たって子がいるのよ」

と、わたしの疑問に答えてくれました。なるほど、目撃されていたというわけですか……。タカナシ・フラワーショップは、人通りの多い商店街にお店を構えています。店頭で、黄色いエプロンを身に着けて、お花に水をやったり、しおれた花を処分していれば、その姿を誰かに見られたとしても、何ら不思議なことではありません。「大丈夫だよ。担任にしゃべったりしないって。どうせ、バイトやってる子なんてたくさんいるんだから。それより、バイト楽しい？」ぐるりと教室を見渡しながら、からからと小鳥さんは笑って、もう一度わたしに尋ねました。わたしが「楽しいです」と短く返すと、小鳥さんは何か得心したように、こくこくと頷きました。

「いやさ、わたしもバイト始めようと思うんだよね。でも、部活と両立するのが難しくって」

だったら諦めなさい、とは言えないわたし。しかも、わたしの場合、部活のために校則違反のアルバイトをしているわけで、両立していると言えなくもありません。もっとも、その代償である疲れを引きずっているのだから、あまり自慢になる話ではありません。

小鳥さんは、陸上部で走り幅跳びをしています。こうして、お互いに話をするようになってから、時折グラウンドを走る小鳥さんの姿を見かけました。いつも、楽しそうに笑っている小鳥さんが、とても真剣な顔で汗を流している姿は、とても凛々しくて、かっこい

いと思いました。彼女にとって部活動は、「計画」のためだけに勤しむわたしとは違って、生きがいのようなものなのかもしれません。部活の小鳥さんとおしゃべりな小鳥さんの、ギャップを感じながら、わたしは一方的に語る彼女の話に、黙って耳を傾けました。

こんなアルバイトがしたい、時給はいくらがいい、可愛い制服を着られるのがいい、と次から次へとアルバイトへの思いを口にしていきます。小鳥さんはわたしに負けないくらいの、わがままさんだと思います。そんな話を聞いていて、わたしはふと肝心なことを思い出しました。

今日は、初めてのアルバイト代が出る日です。

もちろん、受け取ったその場で、買える分だけの花の種や肥料を購入するつもりです。つまり、折角もらったお給金がまた、タカナシ・フラワーショップへと還元されるのです。きつと、タカナシさんは苦笑するでしょう。もしかしたら、怒るかもしれません。でも、そのために、わたしはアルバイトをしているのだから、譲れないことです。

突然、教室にチャイムが鳴り響きました。午後の授業開始五分前を知らせる予鈴です。小鳥さんの話と、アルバイト代のことと頭がいつぱいになって、ぼんやりしたわたしは、思わず驚きに声を上げそうになりました。

雑談に花を咲かせていたクラスメイトたちが、そろそろと自分の席に戻り、午後の授業で使われる教科書やノートを机の上に広げ始めます。小鳥さんも、立ち上がると、自分の席へと戻っていきます。ところが、二、三歩歩いて振り返った小鳥さんは、

「夏休みの約束、ぜったいだかねえ！」

と、片目でウィンクして、わたしに念を押しました。

10・夏休みの約束（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

11・プレゼント

宮野が大きな青いプラスチックの籠を、重たそうに花壇まで運んできたのは、期末試験が始まる少し前だった。籠の中には、聞いたこともない花の種と肥料の袋がぎっしりと詰められていた。それは、初めてのアルバイト代で、宮野が購入したものらしい。

相変わらず宮野は、疲れた顔をしていたが、それにも増して、ようやく目的のものを手に入れられた喜びに、心なしか嬉しそうでもあり、分かりにくい表情ながらも、そうした顔は夏の景色に良く似合っていると思った。

そう、季節はようやく梅雨の湿り気が消え、代わりに、今年も猛暑を予感させる、夏の熱気と蝉の声がざわめきはじめている。

「そうだ、お前にプレゼントがあるんだ」

俺は籠を受け取りながら少しだけ微笑んだ。ノリのいい近頃の生徒たちなら、「お金くれるの？」などと、可愛いげのない冗談を言うのだろう。しかし、宮野はそういう子ではなく、きょとんと小首を傾げてみせる。

当然のことだが、教師が生徒にプレゼントを渡すのは、あまりよろしいことではない。平等こそが教育の根幹であることは、小学校の教師だろうが、高校の教師だろうが、変わらないことだ。だが、取るに足らないプレゼントなら、たいした問題ではないだろう、と俺はプラスチックの籠を地面に置くと、後ろ手に隠し持っていた帽子を、宮野の頭に載せてやった。白いリボンがあらわれた、すこし色あせた麦わら帽子だ。

「先生、これどうしたんですか？」

驚きを表情ではなく言葉で表した宮野に、俺はにっこり微笑むと、右手を庇代わりにして、空を見上げた。真っ青な夏空には、雲ひとつなく、西の空に傾き始めたにもかかわらず太陽から、じりじりとした日差しが降り注いでいる。

「期末試験も近いんだ。それに、受験生にとって本番の夏休み前に、熱射病で倒れたくないだろう？ 俺や大川が、いくら無理はするなつて言っても、聞く耳持たないみたいだし」

苦言を呈するつもりはなかったが、宮野はうつむいて「ごめんなさい」小さく言った。

「そう思ってるんだつたら、せめて部活動の間だけでも、麦わら帽子を被ること。いいな？ 約束だ」

「でも、こんなもの頂くなんて……悪いです」

宮野は明らかに恐縮したようだった。たかが、麦わら帽子のひとつで、遠慮するなんて、本当にいまどきの高校生とは思えない。それが、宮野らしい、と言えば宮野らしいところなのかもしれない。最初は、ずいぶんと根暗で、何を考えているのか分かりにくい子だと思っただ、こうして共に園芸部の部活動をするようになって、少しずつ宮野のことがわかってきたような気がする。

「いいんだ、そいつは妹のお下がりだ。だから、遠慮しないで使ってくれ」

「え？ 先生つて、妹さんがいらつしやるんですか？」

「ああ、まあな」

当然の質問に他意はないのだろう。しかし、急に胸の奥がザラザラし始める。その話題に触れたくない……。

「お前だって、弟がいるじゃないか。世の中、一人っ子ばかりとは限らないぞ。さあ、そんなことより今日はどうするんだ？ 早速、花の種を植えるか？ とつととやらないと、あつという間に下校時間になるぞ」

「そうですね」

宮野は頷いて、用具入れから手鍬を取り出す。俺は、そんな宮野の後姿に、ほっと胸をなでおろした。わざと妹の話題を避けるようにしたことが、宮野にバレたかと思った。だが、俺の内心など宮野が知るはずもなく、彼女は振り返ると、帽子の鰐を持って、

「先生。麦わら帽子、ありがとうございます。妹さんにも、お礼を

言っておいて下さい。大切にに使わせていただきますって」

と言う。再び胸をなでおろした俺は「ああ」と、あいまいで短い返事を返した。

本当は、妹のことを口にするつもりはなかった。ただ、遠慮する宮野の顔を見ていて、つい口走ってしまったのは、多分俺のミスだ。俺に妹がいることを知っているのは、この学内で大川だけで、特別秘密にしているつもりもないが、話したくもない。大川の言うとおり、やっぱり俺は引き摺ったままなのか……。そう思うと妙に、心に開いた穴が、ざらついてくるのだ。

その乾燥した感覚を押さえ込むように、俺は花壇を耕した。

園芸部設立から、花壇を荒らす雑草を抜き、何度か土を掘り返し、水を与え、俺の心と同じようにカラカラ乾燥した土に、元気を取り戻させてきた。そうして、ついに花壇に花の種が植えられる……。と思ったのだが、その前にきちんと肥料をやって、土に栄養を与えなければならぬらしい。

そもそも、長い間放置された花壇の土は、とてもやせ衰えていた。それこそ、雑草に養分を吸い上げられ続けていたのだ。しかし、人間ず思うよりも自然と言うのは逞しいもので、宮野がこの中庭の花壇に花を植えようと思いついたのも、花壇の土に再生の余地があると思ったからだそうだ。

もっとも、その土を掘り返し、栄養を与える俺と宮野には、この土ほどの再生力があるかどうかは疑問だ。俺の心に穴が開いているように、宮野も何かしら、俺の知らないものを抱え込んでいる。そんな風に見えるのだ。

その根拠は、少し前に遡る。

まだ、宮野美咲という生徒のことがよく分からなくて、教師としてどう接してやるべきか悩み、名簿で調べた、彼女の中学時代の同窓生たちに、宮野のことを尋ね回ったことがある。その生徒たちは、それほど宮野と親しかったわけではないらしい。しかし開口一番、

「宮野さんって、なんだか中学のころとすごく変わった」

と俺に話して聞かせた。

「中学のころの宮野さんって、水泳部のエースで、明るくてよく喋る子だった」

「そうそう、高校に上がる前くらいから、別人みたいになったよね」

「根暗で喋らないから、違う人かと思った」

口々に、生徒たちの言う言葉に、耳を疑いかけた。宮野が明るくて、よく喋る？ 口数が少なく、表情にも乏しい、今の宮野からではとても想像できない姿だ。

しかし、園芸部の活動を始めてから、宮野の言動の端々に、彼女がどこか自分を押さえ込んでいることに気づいた。それは、心の中に穴が開いて、ザラザラした不快な感覚を押さえ込もうと、屋上にばっくれて、タバコを吹かす俺とよく似ているような気がする。

まちがいなく、俺は引き摺っていても、身勝手に他人と重ねて宮野を見ているわけではない。似ていると言うのなら、宮野はあいつではなく、俺に似ている。それこそ、俺と宮野は似たもの同士なんだ。

「先生？ どうしたんですか。ずっと、わたしの顔を見て」

突然、麦わら帽子の下に、怪訝な顔の宮野が現れる。思わずぱっとして、花壇に肥料をやる、宮野の横顔をじっと見つめていた。これじゃ、ただの変な人だ。

「いや、なんでもないよ。ただ、宮野がなんだか嬉しそうにしてるのが、可愛かったから」

空笑いしながら取り繕うと、宮野はすこし恥ずかしそうにほほを染めた。多分、今までで一番分かりやすい表情の変化だったと思う。「先生って、そういう冗談言うんですね。先生、熱射病にならないでくださいね」

ふいつ、とまるで赤く染まったほほを隠すかのように、宮野はそっぽを向いて作業に戻った。そんな宮野のことを見ていると、俺の発言にも他意があったわけではないが、さすがに恥ずかしくなっ

きた。

ちょうどそのとき、天の助けとばかりに、空から声が降ってきた。
「おおーい、宮野さーん！」

声に呼ばれて、宮野と俺が顔を上げたのは、ほとんど同時だった。きよるきよると見回して、三階の教室から身を乗り出して、こちらに手を振る女の子を見つけた。

確か、彼女は宮野と同じクラスの生徒だ。宮野とは好対照なくらい、顔一面に笑顔の花をさかせていた。名前はなんと言ったか……みんなから、小鳥と呼ばれていることは知っているが、授業受け持ちの生徒ではないため、それ以上は思い出せない。

「宮野さーん！ もうじき下校時間だよ。一緒に帰ろう！」

そんなに大声出さなくてもいいのに、小鳥の良く通る声は、反対側の校舎にまで反響して、中庭全体に響き渡った。

「今からそっち、行くね！」

宮野が何の返事を返していないにもかかわらず、小鳥はそう付け加えると、窓辺から姿を消した。しかし、宮野に話しかける生徒がいるというのは、驚きだ。もちろん、宮野にだって、友達がいてもおかしくはない。しかし、宮野がいつも一人ぼっちだったのも事実だ。

「今の、友達？」

園芸用具を片付けながら、俺が尋ねると、宮野は頭を左右に振った。その直後である。少し息を弾ませながら、パタパタと足音を響かせて三階から降りてきた小鳥が、俺たちの前に現れたのは。

11・プレゼント（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

12・とても素敵なこと

とても素敵なことが二つもありました。

ひとつは、念願だった、花壇に種を植えられたことです。花の種と肥料は、アルバイト先の「タカナシ・フラワーショップ」で買いました。折角いただいたアルバイト代が、瞬く内にタカナシさんの手元に還元されるのは、とても失礼だったかもしれません。でも、中庭の花壇に植える花の種と肥料などを手に入れるためにはじめてアルバイトです。どうせ買うなら、タカナシさんのお店で買った方がいいに決まっています。わざわざ、よそのライバル店に、塩を贈ったら、その方が、わたしを雇ってくれたタカナシさんに失礼です。花の種は九種類買い求めました。今は七月の半ば。この季節に植えて、年内に花を咲かせるものを中心に、いつでも花壇に花が咲いているようにするため、どの種を買うのか、本当に悩みました。きつと一番役立つ種は、パンジーです。だいたい、一年中咲いています。鮮やかで色とりどりの大きな花弁は、とても可愛らしくて、花壇にはぴったりの花だと思います。その一方で、花壇の一番隅、もっとも陽の光が当たる場所に植えるつもりの、ヒースの種も買いました。

「今から植えつけても、花は咲かないわよ」

ヒースの種を買いだめしたいというわたしに、タカナシさんは少しばかり驚いたような顔をしました。ヒースは、四月に植えて十月に芽吹く、冬の花です。三ヶ月遅れの、七月も後半戦に突入しようかと言う時期に植えても、ヒースの花が咲く可能性は、ほとんどゼロに近いことは、わたし自身よく知っていました。いわゆる、昔とった杵柄というやつです。

それでも、わたしがヒースにこだわったのには、理由があります。だって、それがわたしの計画だから……。もちろん、わたしの計画なんて、タカナシさんは知りません。桜井先生も知りません。でも、

ヒースを植えなければ、わたしが園芸部を設立して、花壇に花を植える意味はないのです。

わたしはそれほどいい子ではありません。おとなしいことが、いい子の証ではないのです。計画のために、先生を巻き込んだことも、本当にわたし一人のわがままなのです。

先生は、そんなわたしの黒々とした内心なんて知るはずもなく、わたしのことを気遣って、麦わら帽子をプレゼントしてくれました。それが、もうひとつの素敵な出来事です。

麦わら帽子は、ずいぶん色あせて、きつとピンク色だったはずのリボンは、真っ白になって、わらもところどころさくれ立っていました。でも、シンプルなデザインはとても可愛らしく、色あせても素敵な麦わら帽子です。

先生は「妹のお下がりで」と仰られました。つまり、この麦わら帽子は、先生の妹さんがわたしと同じくらいの年のころに被っていた帽子ということです。

先生の妹さんって、どんな人なんですか……？。

驚きとともに、こんな素敵な帽子を被っていた先生の妹さんに、少しでも興味を感じました。でも、わたしは咄嗟に言いかけた言葉を、ごくんと飲み下しました。それは、先生が明らかに妹さんの話題から避けようとしていたからです。

桜井先生の同級生だった校医の大川先生は、わたしが貧血で保健室に行くたび、桜井先生の話聞かせてくれます。もちろん、わたしが聞かせてほしいとねだったのですが、大川先生は、桜井先生に妹さんがいるなんて一言も言っていませんでした。

でも、余計な詮索をめぐらせて、桜井先生に厭な思いをさせたくはありません。だって、先生は少なくとも、わたしのことを心配して、麦わら帽子をプレゼントしてくれたのですから。

だから、月並みなお礼を言いながら、本当は尋ねたかったことも飲み込み、わたしは先生の厚意だけを受け取ることにしたのです。先生がどうしてわたしに優しくしてくれるのかを知りもしないで、

その優しさだけに甘えようとする、ずるくて賢しいやつなんです、わたしは。

そうして、夏色空の下で麦わら帽子を被って、すべての花の種を植え終わるころ、ちょうど、期末試験が近づいてくるころのことでした。

いつもどおりのお昼休み。近頃、休憩時間になると、わたしの所に来てきて、あれこれと一人で喋っては満足してつていく小鳥さんが、その日に限って、わたしの所にやってきませんでした。

クラスメイトなので、彼女が出席していることは確かなのですが、教室のどこを見渡しても、彼女の姿はありません。まるで、神隠しにでもあったみたいです。

少しだけさびしくて、少しだけ不安になりました。

彼女は、わたしの携帯電話のアドレス帳に登録された、初めてのクラスメイトです。友達、と呼ぶべなのは分かりませんが、少なくとも、彼女はわたしに好意を持ってくれているのだと思っています。だから、一日の例外もなく、たいした応答も帰ってこないのに、彼女は飽きもせずわたしに話しかけてくるのだと。

でも、ホントは違ったら……？

わたしをからかってただけだったとしたら、どうでしょう。それは得体の知れない神様から、素敵なことが重なって浮かっていたわたしへの天罰なのかもしれません。

『お前に、友達を作る資格なんか、ないんだ！ 過去の罪を忘れたのか？』

頭の中に、白いひげを生やしたありきたりな格好の神様が現れて、棍棒のような杖を振りかざしてわたしを怒鳴りつけます。そんな漠然とした、寂しさと不安にかられたわたしは、思わず小鳥さんを探していました。

雑談の声がこだまする廊下、生徒たちが思い思いに休む、会談の踊り場や、グラウンドの隅にある芝生、運動好きの子たちがボール遊びに興じる体育館。

やっぱり、小鳥さんの姿はありませんでした。

本当は、友達を作る資格がわたしにないことくらい、神様に言われるまでもなく、分かっていることです。だから、あの日以来、わたしは一人ぼっちの時間を過ごしすぎました。だけど、わたしは寂しがり屋なのです。一度、誰かの優しさや明るさに触れると、それが消えてなくなった瞬間に恐怖感を感じてしまいます。

でも、とうとうお昼休みの終わりを告げる予鈴が鳴り響いても、小鳥さんを見つけることが出来ず、わたしは落胆しながら、教室へと戻りました。

その途中。ちょうど廊下の曲がり角にある、女子トイレの扉の向こうから、聞いたことのある声が聞こえてきました。普段なら、おトイレの中で誰かが雑談に花でも咲かせているのだろう、と素通りするところですが、わたしの足はまるで接着剤でくっつけられたかのように、ぴたりと止まりました。

「ねえ、小鳥、どういうことなの!？」

小鳥さんの名前がとびだしてきて、思わずわたしは耳を澄ましました。

「最近、宮野とすごい仲いいじゃん。どういうことなの？」

叱責するような別の声がありました。聞き覚えのある声ではありませんでしたが、きっと小鳥さんの友達でわたしのクラスメイトでしょう。

「それは……」

返答に困ったような小さな声は、間違いなく小鳥さんの声です。なるほど、おトイレにいたんですね。なんて、悠長なことを思う余裕がわたしにはありません。

「それはそうだけど、宮野って、話してみたら、そんなに悪いやつじゃないし……やっぱり、よくないと思うの」

「何よ、今さら。だいたい、宮野をイジメようって言い出したのは、小鳥だよ。一抜けする権利なんて、あると思ってるの?」

え? 突然突きつけられた、死刑宣告のような言葉が、わたしの

心に開いた穴を、木枯らしとなって通り過ぎました。

小鳥さんが、わたしをイジめる？

「でも、みんなだって、桜井先生に媚を売る宮野が気に入らないって言ってたでしょ？」

小鳥さんの声は、おトイレの扉を隔てても、よく聞こえます。きつと小鳥さんたちは、外にわたしがいるなんて、想像もしていないでしょう。

「あんだだって、宮野のこと気に入らないって言ってたじゃん。だから、あたしたちも、宮野イジメに参加することにしたんだよ！」
「あんたがやらないなら、あたしたち、あんたをイジメちゃうけどいいの？」

息を呑む、小鳥さんの声が扉越しに聞こえてきました。突然死刑宣告の矛先が、わたしから小鳥さんに変わった瞬間でした。

詳しい事情はよく分かりません。少なくとも小鳥さんには、わたしに対する友情なんて存在していない、ということは分かります。受け入れたくない事実ですが、小鳥さんはわたしをからかっていただけだったのたということに、わたしは気づきました。

小鳥さんと友達になれたとは思っていませんでした。でも、他愛無く一方的な会話でも、小鳥さんの笑顔と一緒にいる時間が、少しずつかけがえのないものになり始めていたのに、一瞬にしてがらがらと崩れていきます。

だけど、不思議と小鳥さんへの怒りが沸いてきません。むしろ、わたしは自分を呪いました。これじゃ、また「三年前と同じこと」の繰り返しです……。

わたしは、体の震えをおさえながら、おトイレの扉から離れて、急ぎ足で教室へ戻りました。ややあつて、教室に戻ってきた小鳥さんは、わたしのことをちらつと見て、何事もなかったかのようににっこりと笑いました。

その笑顔を見て、わたしは確信しました。小鳥さんは、自分に向けられた死刑宣告を甘んじて受けるつもりなんだと言うことを。

そして、もうじき期末試験を控えたその日から、わたしは小鳥さんのことを、わざと避けるようになりました。

12・とても素敵なこと（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

13・いさかい

三日間続いた期末試験の最終日、宮野が倒れたことを知ったのは、その日の午後になってからだ。

ちょうど、試験監督のシフトを終え、息抜きと洒落込み、大川自慢のコーヒーのご相伴に預かろうと思っていたときのこと。理科準備室に真つ青な顔をして飛び込んできたのは、宮野のクラスメイトだった。確か、生徒たちから「小鳥」と呼ばれている、宮野の友人だ。

彼女の話によると、三年生に割り当てられた最後の試験科目は、宮野が苦手とする数学だった。最初は問題が解けなくて、うなっているのだと、誰もが思った。ところが、宮野の顔色はどんどん悪くなり、ついには机に突つ伏したまま、動かなくなったのだ。

宮野のクラスの試験監督を務めていた教員が、心配になって宮野を揺ると、宮野は額に脂汗を浮かべながら、朦朧としており、すぐさま保健室へと搬送されたのだそうだ。

小鳥から話を聞いた俺は、とるものもとりあえず、理科準備室を飛び出した。ところが、小鳥が付いてこないことに気づく。

「どうしたんだ？ お前は行かないのか」

と、駆け出した足を止めて振り向くと、小鳥は寂しげにうつむいていた。その表情には、先日三階の窓から身を乗り出して、宮野に話しかけた、明るい彼女の「らしさ」がなかった。

「そのっ、わたしは……」

行けません、と小鳥の唇が動く。それだけで、宮野と小鳥の間に何かがあったのだと言うことを悟るには、十分だった。あいにく俺は男だから、女の友情については、よく分からない。男には想像も付かないことで、あっさりと友情が瓦解したかと思えば、未練がましいじめじめ男も裸足で逃げ出すほどの、陰湿ささえ兼ね備えているのが、女の友情だ。

もちろん、その主観さえ、男ならではの勝手な解釈にすぎない。とどのつまり、彼女たちの友情と言うものが、どんなものだったとしても、それは当人たちの問題だ。多感な時期の少女たちに、俺が問い質すようなことは、彼女たちのためにも良くないことだ。

だが、教師としては放っておくわけにもいかない。少なくとも、小鳥は宮野のことを心配しているということを伝えてやることくらいは、出来るだろう。

「お前が気にしていたって、伝えておくよ。試験も終わったんだ、お前はとっとと家に帰れ」

と、俺が言うと、下を向いていた彼女の顔に少しだけ「らしさ」が戻った。

俺は小鳥を残し、理科準備室を後にした。小走りに駆け抜ける廊下の窓越しに見えるのは、中庭の花壇。いや、宮野の花壇と言うべきだろうか。花の種を植えたものの、まだ土の中から芽を出しておらず、殺風景なままだった。

ただ花が好きだから、園芸部を始めたわけではないのではないかな？

今更ながらに、窓越しの花壇を横目に思った。園芸部を設立して以降、宮野はどこか駆り立てられるように、部活動に夢中だった。毎朝俺よりも早く登校して朝の水遣り、そして放課後はいたちごっこのように生えてくる雑草と格闘し、アルバイトに出かける。そして家に帰れば、不在がちな両親に代わって家事をこなし、試験勉強に、受験勉強。園芸部が運動部のように体力を使うような部活動ではないにしても、植物を育てると言うのは、思うよりも根気の要る大変な仕事なのだ。そうして、過労はついにピークを迎えてしまったのだろう。

そんな大変な仕事を、無心になって続けている宮野の姿に、一抹の不安と彼女が園芸部を始めた本当の理由があるのではないかと気づいたのは、最近になってのことだ。

ようやく分かってきた、表情に乏しい宮野の顔が、趣味に興じて

いる顔ではなく、どこか思いつめたような顔に見えたのが、発端だった。

部活の顧問である俺に隠し事をしている、というのは気に食わない。

信用されていないということなのか？ だから、再三の忠告にもかかわらず、ぶっ倒れるまで無理な生活を続けたのかもしれない。そう思うと、保健室までの道すがら、だんだんと苛立ちが募ってきた。

だが、いきなりその苛立ちをぶつけるわけには行かない。ましてや、責任ある「顧問の先生」という立場だけが持つ、伝家の宝刀「園芸部の解散」を引き抜くのは、きっと彼女を傷つけるだけだ。その儚げな印象の少女は、そういったちょっとしたことで、簡単に砕け散ってしまうような薄いガラス細工のように見えた。

「あら、桜井くん。なあに、とても怖い顔してるわよ」

保健室の扉を開けた俺を待っていたのは、コーヒークップ片手に安穩とした口調の大川だった。

「宮野がぶっ倒れたって聞いて……大丈夫なのか？」

「ええ、お薬飲ませて、ぐっすり眠っているから大丈夫」

と、大川は白いカーテンのかかった簡易ベッドを指差した。

「わたしの見立てだと、試験勉強の寝不足と部活動の過労で板ばさみになって、とうとう電池切れを起こしたみたい」

想像通りの診断。人間は無理をして体力の限界を超えれば、自分の意思とは関係なく、倒れてしまう。そうして、大事に至ってしまうことだってあるのだ。特に、成長の真っ只中にいる十代の少年少女は、そういったことに気を配らなければならない。それを知っていたから、俺は何度も忠告したのだ。無理はするな、と。

再び湧き上がりそうになる苛立ちをぐっと抑えつつ、俺は大川の了承を取って、ベッドを仕切るカーテンをはぐった。

宮野は静かな寝息とともに、真っ白な布団に包まって眠っていた。その姿は、本当に触れただけで簡単に砕け散って消えてしまいそう

なほど頼りなく、思わず胸の隙間を締め付けられるようだった。

「先生……」

宮野が俺の気配に気づいて、目を覚ます。うつすらと開けた瞳の奥が、じつと俺を見つめていた。

「すまない、起こしてしまったな」

と俺が言くと、宮野は少しだけ頭を左右に振った。

「ごめんなさい。迷惑をかけてしまって」

「そう思ってるなら、どうして俺の忠告を聞かなかったんだ」

俺はため息混じりに、ベッド脇に丸椅子を寄せると、それに腰掛けた。

「部活にバイトに家事に勉強なんて、簡単に両立出来るわけがないじゃないか。みんな、少しずつ体を慣らして、きちんとした生活サイクルを身に着けていくものなんだ」

「わたし、体力には自信があっただんです」

「元水泳部のエースだったからか？　まる三年ほど、水泳から足を洗ったやつが、昔取った杵柄なんていうなよ。お前の弟が心配するわけだ」

「どうしてわたしが、水泳をやってたって知ってるんですか？」

わずかな驚きの顔とともにそう尋ねられても、さすがに宮野の事を聞きまわったとは言えず、俺は「そりゃ、一応先生だからな」とお茶を濁した。だが宮野はそれほど気に留める様子もなく、

「でも、もうへっちゃらです。もう疲れは取れました。試験も終わつたし、明日からもがんばります」

と言って、ベッドから起き上がろうとした。その顔は、まったく懲りていない、というよりも、無理をすることを厭うつもりがない、と言っているようなものだった。そんな宮野に、折角押さえ込んだ苛立ちが、ふつふつと再沸騰しはじめた。

「だめだ！　今日をもって、部活は無期限の活動停止だ」

少し怒気を織り交ぜた俺の言葉に、宮野の動きがぴたりと止まり、やや怯えた二つの眼が俺を見つめる。

「どうしてですか？」

「どうしてって、お前が俺の忠告を聞くつもりがないからだ。そもそも、お前の弟から、園芸部を辞めさせてほしいと頼まれているんだ。お前が園芸部を続けることで、しわ寄せが自分に来て、迷惑してるって言ってたぞ」

「透になんと言われようと、わたし、花を咲かせたいんです。咲かせなきゃいけないんです……」

今まで聞いた宮野の声とは比べ物にならないほど、はつきりと大きな声だった。きつと、カーテンの向こうで、俺と宮野の分のコーヒーを淹れていた大川にも聞こえただろう。

「それは、今じゃなきゃだめなのか？ 卒業までには、まだ時間があるんだ。焦ることなんてないだろう。それとも、焦らなきゃいけない理由が何かあるのか？」

宮野は、少しばかり複雑な顔をして押し黙った。焦らなければならぬ理由があることは明らかだが、口を開こうとしない。まるで話したくないと言っているかのようだ。そういう宮野の言葉と態度が、余計に俺を愕然をさせた。

やや、長めの沈黙が、俺と宮野の間を通り過ぎていく。

「先生には関係ありません……」

不意に聞こえた、宮野のつぶやきは、俺にとって最後通牒のようなものだった。

「そうか、俺のこと信用できないか」

それと分かるように、沈黙を破る大げさなため息をつくと、宮野は今にも泣き出しそうになる。それでも、俺が厳しい言葉を連ねたのは、信用されていないという落胆だけではなく、宮野を傷つけないかと思っていたことを、彼女自身がまったく受け取ってくれなかったことへの、ある種裏切られたような感情があったからだ。

「だったら、俺は顧問を降りる。園芸部も今日限りで解散だ。後は、お前の好きにすればいい。ただし、中庭の使用権は認めないぞ」

勢いに任せて伝家の宝刀を引き抜き、いくつもの棘が付いた言葉

を宮野にぶつけると、俺はカーテンをはぐつた。大川がコーヒーカーップを三つ、手にしながら、心配そうな視線をこちらに向けてきたが、俺は一瞥をくれただけで、出口の方へ向かった。

背中に宮野の泣き声と嗚咽が聞こえてくる。

まるで大人の態度でないことは分かっている。だが、ムキになる宮野の姿に、見たくないものを見せられたような気がした。それは、宮野のことではない……。

『お兄ちゃんには関係ない!』

宮野に感じた裏切りを、ずっと前に感じたことがある。その瞬間、脳裏でこだまし続ける声と、宮野の言葉が重なり、胸に湧き上がった悲しい気持ちをどうしても、大人の理性では抑え切れなかった。

俺は、宮野の鳴き声に、後ろ髪惹かれる想いを断ち切って、保健室を後にした。そして廊下に出てから、小鳥が心配していた、と伝えそくなったことを思い出した。

13・いさかい（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

14・子犬のリコリス

わたしがわがままな所為で、桜井先生と喧嘩をしてしまいました。先生は優しく、絶対に怒らないとタ力をくくっていたのに、わたしを叱り付ける先生の怖い顔と声に、胸の奥に空いた穴が押しつぶされてしまうほど、苦しくなりました。

ごめんなさい。その一言を言うべきだったのかもしれませんが、でも、言葉より先に出てきたのは、ポロポロとこぼれる涙でした。

どうしてこんなに悲しい気持ちになるのか、よく分かりません。本当はわたしが悪くて、泣いちゃダメなんだって分かっています。それに、先生なんて「計画のために利用する駒」くらいに思っているはずなのに、冷たい言葉と共に去っていく先生の後姿を見つめていると、呼び止めることも出来なくて、どうしようもないくらいの悲しみがわたしに襲いかかってきました。

とうとう涙をとめることが出来なくて、子どもみたいに泣きじゃくって、大川先生にまで迷惑をかけてしまったわたしは、とても悪い子です……。

そうして、芳しくない期末試験の結果と共に、暗い気持ちを引き摺ったまま、高校生活最後の夏休みが始まりました。

夏休みになったら、受験勉強の息抜きとかこつけて、小鳥さんと海に行く約束をしていました。でも、小鳥さんとはあれ以来、口を利いていません。わたしが、彼女を避けるようにしていたからです。すると、自然にわたしと小鳥さんの距離は開いて行って、お互いに気まずい雰囲気だけを漂わせるようになりました。今更、海へ行く、なんて約束は反故同然です。

そして、園芸部も活動停止となりました。夏は、蝉が鳴くように、動物が生を謳歌する季節でもあるのですが、逆に植物にとっては冬と同じくらい厳しい季節だということは、あまり知られていません。なぜなら、向日葵は、空に向かって太陽のような花を咲かせ、木々

の緑はよりいつそう深くなるからです。だけど害になる虫や、照りつける太陽の日差しによる水不足など、わたしたちがちゃんとお世話しないと、花はあつという間に枯れてしまうのが、夏という季節です。

先生の忠告を聞いていれば、試験中に倒れずに済んだし、園芸部も活動停止にならなかったし、成績だってもう少しマシになったと思います。計画のために、無理をして、結局優しい先生を怒らせてしまったのは、全部わたしの所為なんです。言い訳する余地だってありません。

気がかりなことは、試験前に植えた種たちが、今も無事でいけるかどうかです。それを確かめたくても、中庭を管理する先生を怒らせてしまったわたしは、中庭に立ち寄ることも出来ません……と言っるのは、ほとんどいい訳です。教員の先生方は、夏休みでもお仕事があるので、わたしが学校に行けば、間違いなく桜井先生と顔をあわせることになるでしょう。そのとき、わたしはどんな顔をしたらいいのか分からない、というのが本音でした。

でも、それとは反対に、桜井先生に会えないことが、とても寂しくて、ジレンマみたいなものを抱えたまま、わたしは、受験勉強さえも手に付かない怠惰な夏休みを、クーラーの効いた部屋の中で、鬱々としながら、悶々としながら過ごしていました。そして、先生にもらった麦わら帽子を手にベッドに寝転がり、天井を見上げて一日を過ごしていると、あつという間にアルバイトの時間になってしまします。

その日も、怠惰で無駄な一日を過ごし、アルバイトに行く時間になり、あわてて洗濯したてのエプロンを詰めたバッグを手に、玄関で靴を履いていると、ちょうど部活帰りの汗臭い透が帰ってきました。

「ただいま。姉ちゃん、バイト行くの？」

と言う、透の問いかけにわたしはこくん、と頷きました。すると、透は少しだけ顔を曇らせました。

「園芸部やめたんでしょ？ だったら、もうバイトなんてしないでいいじゃん。お小遣い足りないの？ だったら、ばくのを分けてあげるよ」

矢継ぎ早に、透はそう言っ、何故かわたしを通せんぼします。

透の言うとおり、園芸部は活動停止になったから、もうアルバイトを続ける理由なんてありません。別に欲しいものはありませんし、お仕事で不在がちな両親は、せめてもの罪滅ぼしと、わたしと徹にお小遣いだけはきちんと毎月手渡してくれます。だから、お小遣いにも困っていません。

それでも、わたしがアルバイトを続ける理由は、タカナシさんと働いている時間だけは、先生のことを忘れられるからです。忘れたくないけれど、忘れてしまわなければ、夏休みが終わったあとも、わたしはどんな顔をして先生に会えばいいのか分からなくなってしまうような気がするのです。

そんなこと、恥ずかしくて透に伝えるわけがなく、わたしは少しだけ声のトーンを落として「急いでるの」と、言いました。でも、透はやっぱりわたしを通せんぼします。

「また、ぶつ倒れちゃうよ。姉ちゃんが倒れたって聞いて、父さんも母さんも心配してたんだ。もう、バイトなんか辞めなよ」

「大丈夫だよ。もう倒れたりなんかしない」

そう言いながら、ふとわたしは、先生の言葉を思い出していました。

先生と喧嘩した日、先生がこぼすまで、全然知らなかったことです。透はわたしの知らないところで、先生に会っていたみたいです。そして、わたしに園芸部をやめさせるよう、掛け合っ、たみたいなのです。

以前のわたしならきつと、余計なお世話だと言っ、透を叱り飛ばしたかもしれません。でも、自分でも分かるくらい、以前のわたしと今のわたしは別人です。それは、心に穴が開いた所為なのかもしれません、その時わたしは、そんなこと関係なく、何で透が園

芸部やアルバイトを辞めさせたがっているのか、透の本心が分からずに、困ってしまいました。

「あのね、透。心配してくれてありがとう。でも、ホントに大丈夫だから。アルバイトするのが楽しいから、行くの。だから、道を開けて」

ちよつとだけ語気を強めると、透はしぶしぶ道を譲ってくれたので、わたしは夏の日差しが照りつける中へと、玄関を出ました。

「行つてらっしゃい」

という透の視線が、背中に突き刺さるような気がしましたが、振り返らないように、わたしはタカナシ・フラワーショップへの道を歩き始めました。

住宅街から公園の中を、鴨の浮かぶ池を横目に素通りに、土手沿いの道を国道へ出て、しばらく歩いて歩道橋を渡った先、表通りから一本入った商店街にある、タカナシ・フラワーショップまでは、徒歩二十分の道のりです。あいにく、わたしは自転車を持っていませんし、家の近くの停留所からバスに乗ると、少し遠回りになってしまいます。なので、たとえアスファルトが溶けてしまいそうな夏の日差しの下でも、徒歩だけがわたしの交通手段でした。

あたりを埋め尽くす、何重奏もの蝉の鳴き声。街を通り抜けていく、ふわりと湿気を帯びた夏の風。雲ひとつない、昼下がりの青空。通りですれ違う人たちは、みんな汗を流しつつ、まるで日陰を求めているかのように足早です。

そんな中で、わたしだけが場違いなくらいぼんやりと街並みや空を眺めながら、土手の上を歩いていると、突然背後から声がして、わたしは呼び止められました。

「宮野さん！　ちよつと待ってっ」

聞き覚えのある声にドキリとしながら振り向くと、わたしの思っていた通りの人が、土手をぱたぱたと駆け上がってきます。

「小鳥さん……」

部活で日焼けした姿が夏に良く似合う、ショートカットの女の子

の名をつぶやきながら、わたしは一瞬逃げ出しそうになりました。だけど、小鳥さんは息を切らせながら猛スピードでわたしの元まで駆け寄ってきて、逃げたすチャンスを失ってしまいました。

「リコリスの散歩してたら、宮野さんの後姿が見えたから」

という、小鳥さんの手にはロープにつながれた、真っ白な毛並みの可愛い子犬がいます。リコリスというのは、きっと子犬の名前でしよう。リコリスは、うれしそうに尻尾を振り回しながら、わたしの足元に擦り寄ってきました。

「これからバイト？」

思わず、撫でたくなる衝動を我慢しながら、小鳥さんの問いかけに頷きます。すると、小鳥さんは、いつもと変わらない明るい口調で、

「じゃあさ、国道まで一緒に行ってもいい？」
と言いました。

14・子犬のリコリス（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

15・花壇の聖域

理科準備室の前を通る廊下の窓越しに見える、中庭の花壇に、こ
こ一月あまり毎日のように見かけていた宮野の姿はない。それもそ
のはずだ。俺が宮野の態度に苛立ちに任せて、彼女を中庭から追い
出してしまったのだから。

立ち去る俺の背中に降りかかった、宮野の泣き声は、ずっと頭の
中に張り付いて離れない。表情の乏しい、宮野のはつきりと分かる
表情が、喜怒哀楽の「哀しみ」であつたことは、胸をチクリと突き
刺してやまなかつた。彼女を傷つけたくない、そう思っていたのに、
結局宮野を傷つけてしまったのかもしれないと思うと、俺まで悲し
くなってくる。

もちろん、大人として、教師として、倒れるまで無理をした宮野
を諷めるのは、当然のことだが、園芸部の解散という伝家の宝刀を
抜いてしまったのは、大人気なかつた、教師らしくなかつたと後悔
している。

だから、庭師が不在となつてしまった花壇に、毎日水をやること
が夏休みの日課となつた。教師には、生徒ほど長い夏休みは用意さ
れていない。ところが、授業のない長期休暇の仕事は、それほど多
いものではなく、暇をもてあましてしまう。その空いた時間を有効
活用するという意味合いもあつたが、せめて、宮野の植えた花の種
を枯らさないようにすることが、大人気ない態度をとつてしまった
ことへの罪滅ぼしだと考えていた。

「まあ、伝わらなければ意味のないことだけだな」

誰に言うでもなく独りごちながら、中庭に設置された水道管に青
いゴムホースをつなぎ、種たちにとっての命の水を撒く。シュツと
音を立てて、シャワーノズルから噴出した水道水は、小さな虹を花
壇の上に咲かせた。

虹を見つめながら、改めて花壇を前に思う。

花壇は、宮野にとっての聖域だったのかもしれない……。俺の屋上、大川の保健室と同じように。

雑草だらけで、土も乾いてしまった、見捨てられた花壇が、今は誰の目からも生きた花壇となった。崩れかけていたレンガの仕切りはすべて修復され、雑草を抜き去り潤いと栄養の与えられた土壌には、きちんと畝を作り、等間隔に種や球根が植えられている。

さらに宮野は几帳面な性格なのか、花壇のブロック単位に、小さなプラスチックのネームプレートを挿している。それには、如何にも年頃の女の子らしい、丸みを帯びた字で何の花が植えられているのか分かるように、花の名前が記されていた。

ほとんど、俺の知らない花だ。生物科の教師という職業柄、生き物に対する興味はあるのだが、俺の専門は動物であり、植物、とりわけ花には疎い。そんな、名も知らない花たちの中で、宮野が一際こだわりを見せていたのは、花壇の一番端に植えられた、「ヒース」という花だった。

どうして、宮野がヒースにこだわったのか、気になった俺は、学校の図書室で植物図鑑を紐解いた。

ヒースとは、もともとイギリスのとある原っぱの地形を示す言葉だったのだが、いつの間にか、そこに群生する花の名前になっていた。日本では「エリカ」と言う名前で呼ばれることが多い。冬に咲く花のひとつで、とてもポピュラーな品種らしく、一本の茎に小さな粒のような可愛らしい、赤や白の花を沢山つける。その種の植え付けは、大体四月ごろに終えておかなければならないらしい。そうして、半年近くの歳月を費やして、花芽を咲かせるのだ。ところが、宮野が中庭の花壇に、ヒースを植えたのは、七月の末。期末試験が始まる前のこと、つまり、俺と宮野が子ども地味な喧嘩をする前だ。遅すぎる植え付けは、芽を結ぶことはない。

現に、ヒースの植えられたあたりは、まだひっそりと静まり返り、芽のひとつも顔を出していない。

どうして、宮野は時期外れに、ヒースを植えたのだろうか？ 他

に植えたどの花も、きちんと植え付け時期を見計らっているし、宮野のガーデニングに対する知識は、素人の俺から見ても、確かなもので、勘違いしているとは考えにくい。

何か、考えがあつてのことなのか、それを確かめることは出来ない。宮野は、不在なのだから。

もちろん、携帯電話という文明の利器を使い、宮野を呼び出すことは出来る。しかし、あれから気まずいままで、電話をかける勇気はまるでなかった。いい大人が情けないことだとは思ふ。思うのだが、宮野のことを思い出せば、胸が痛むばかりで、いつこうにダイアルする勇気が持てない。それは、相手が宮野だからなのかもしれない。いつの間にか、宮野の存在が俺の心に開いた穴に入り込んでいた。

だから、せめて今出来るのは、新学期に宮野が落胆しないよう、花壇を守ることだけだ。

そうした決心を胸に秘めた水遣りが終わり、ふと顔を上げると、理科準備室の前を走る廊下から窓越しに、いつの間にか大川がじつと俺を見つめている事に気づき、図らずも驚きの声を上げてしまった。

「やあね、人をお化けみたいに」

カラカラと笑う大川は、確信犯だった。俺が物思いにふけて水遣りをしているものだから、少しばかりいたずら心に火を灯したのだろう。

「まったく、声くらいかけろよ。俺が心臓麻痺で死んだらどうするんだ」

「何言つてんのよ。桜井くんみたいなヘビースモーカーは心臓麻痺より先に心筋梗塞で死んじゃうわよ」

べつ、と舌を出す大川の仕草は、どこか少女のように見える。昔から大川は、宮野と違って喜怒哀楽のはっきりしたやつだ。さらに言えば、口では大川に勝てないのも、昔と変わらない。

「そうしたら、お前の枕元に毎日立ってやるから、覚悟しろよ」

「あら、甲斐甲斐しいこと言ってくれるのね、桜井くん。首を長くして、その日を待ってるわ」

さらりと冗談に冗談で返しつつ、大川は「それにしても」と前置いた。

「毎日、宮野さんの花壇に水遣りしてるところを見ると、園芸部を止めるつもりはないみたいね。良かったわ」

すでに大川も蚊帳の外では居らなくなっている。俺が冷たいことを言つて、宮野を泣かせてしまった後、彼女を落ち着かせたのは校医の大川だった。まあ、そのあとで散々愚痴を聞かされたのは、夏休みが始まったばかりのころだ。それからというもの、大川はことあるごとに、宮野と俺のことを気にかけてくれていた。

「良かったって、別に園芸部を再開すると決めたわけじゃない。それは、宮野の態度次第だ」

「今度、倒れられたら、責任問題になるから？　今回だって、教頭先生が目くじら立ててたものね。あの人は、なんでも事なかれ主義だから」

「それもあるけど……」

「あるけど、本気で宮野さんのことが心配なんですよ。顔に書いてあるわよ」

大川が俺の顔を指し示す。確かにそうなのだが、他人に言われると、これほど恥ずかしいものはない。しかし、否定するには、大川の言うことは的を射ていた。なんだかんだと言いつても、俺が苛立っていたのも、大人気ないと分かっていながら、冷たい言葉を投げかけてしまったのも、本気で宮野のことが心配だったからだ。

「ホントはね、宮野さんが泣いているのを見て、わたしは、ちょっぴり安心したのよ」

「はあ？　何言ってるんだよ」

安堵したような声と思いきもかけない大川の言葉に、俺は素っ頓狂な声を上げてしまった。生徒が泣いているのを見て、安心したとは何事か。俺は、夏休みの間中、宮野の泣き声が頭から離れないとい

うのに。

「いやいや、そうじゃなくって。ほら、もしも桜井くんがあの子と宮野さんを重ねあわせてるなら、やめたほうがいいって、言ったことがあったでしょ。でも、桜井くんはきちんと、宮野さんのことを見てた。だから、安心したのよ」

そういえば、そんなことを言われて、危うく大川と喧嘩しそうになったことがあるのを、俺は思い出した。

「宮野さんはとてもいい子よ。きっと、あなたに心配かけたことを反省しているわ。けど……宮野さんは、わたしたちの知らない過去に、ずっと縛られてもがいている。それに応えてあげられるのは、多分、同じように過去に縛られているあなたしかないんじゃないかしら」

大川は意味深な言葉を付け加えると、くるりと踵を返して窓辺から離れた。大川が何を言っているのか、そのときはよく分からなかった。

だが、宮野が笑わないことも、俺が宮野のために園芸部を設立したのも、宮野が俺と同じように心に穴を持っているからだとしたら、彼女はいつたいどんな過去に縛られているというのだろう。それを知りたいけれど、問いただすべきではないと言うことだけは、分かっていて。それは、ごくごくプライベートなことだ。

そんな俺に出来ることは、もしも、宮野が素直に反省してくれるなら、園芸部を再開することだけだ。そのために、俺は花壇を……宮野の聖域を守る。

15・花壇の聖域（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

16・友達だよね？

いつもと何も変わらずニコニコとしながら、他愛もない話に花を咲かせる小鳥さんは、わたしが距離を置こうとしたことなんて、ちっとも気にしていない様子でした。もちろん、小鳥さんのことを嫌いになったから、敬遠していたわけではありません。でも、その理由も小鳥さんは知らないはずです。

それなのに、どうして小鳥さんは明るく笑っていられるのか、わたしにはよく分かりませんでした。

「でね、リコリスったら、わたしのお母さんを泥棒と間違えて……」
国道までの道のりはそれほど遠いものではありません。止まらない小鳥さんの口は、次から次へと言葉を連ねていきます。わたしはというと、いつもと変わらず、相槌を打つだけです。それでもあの日から久しく遠ざかっていた、楽しいひと時に、心に空いた穴がじんわりと暖かくなるのを感じていました。

不意に、小鳥さんが抱きかかえた子犬……リコリスが「くうん」と喉の奥で鳴き声を上げ、空を見上げました。わたしもつられて、空を見上げます。抜けるような真つ青な空は、夏の鮮やかさの端に、秋の到来を知らせるいくつかの雲が浮かんでいました。

怠惰な夏休みも半分終わり、海には海月くらげが繁殖する季節となり、一緒に海へ行くという約束が果たせなかったのは、わたしの所為です。

あの日、小鳥さんたちの会話を盗み聞きしてしまったわたしは、小鳥さんへの怒りよりも、小鳥さんの友人たちが、イジメの矛先を小鳥さんに向けようとしていることのほうが怖くて、小鳥さんを避けるようになってしまいました。そのとき、すでに約束は反故になったも同然でした。だけど、そうすることで小鳥さんを守りたい、と思ったのです。

小鳥さんがわたしのことをどんな風に思っているのか、わたしに

は分かりません。他人の心を読む、超能力なんて、作り話の主人公だけが持っている特技です。でも、わたしは小鳥さんのことを、身勝手にも大切な友達だと思っています。わたしにそんな風に思われるのは、はた迷惑だったかもしれません。なぜなら、彼女はわたしをからかうために、わたしに近づいてきたのですから。

それは、ハッキリ言えば、許せないことです。小鳥さんと過ごす短い休憩時間は、わたしにとって、ザラザラに乾ききった高校生活における、唯一の潤いだったような気がして、そんな時間を与えてくれた小鳥さんの顔から、わたしには出来ないような明るい笑顔が消えてしまうことが、過去のトラウマを呼び覚ますようで、怖かったのです。そうして、失って初めて、わたしが思っているよりも小鳥さんがとても大切な存在なんだということに気づかされました。それは、桜井先生についても同じことです。先生と喧嘩してはじめて、どれだけ先生がわたしのことを心配してくれているのか、わたしがどれだけ先生にわがままを言うてきたのか、思い知らされました。

でも、すべて後の祭りです。

「ねえ、わたしの話、つままない？」

ぼんやりと空を眺めて、物思いに浸っていたわたしに、小鳥さんが不安そうな顔で言いました。わたしはあわてて「そんなことはないです」と頭を振りましたが、わたしに代わって小鳥さんがそのままでの表情で、空を見上げました。

「あのね、わたしね、本当は宮野さんのこと嫌いだった」

何の前触れもなく、突然の告白めいた言葉が、青い空に向かって吐き出されます。

「ずっと、いわなきやって思ってたんだけど、地域清掃のとき、宮野さんに話しかけたのって、本当は宮野さんのことをからかうためだったの」

「わたし、知らないうちに、小鳥さんに嫌な思いさせてたんですね。ごめんなさい」

と、悪い意味でドキリとしていたわたしが言うと、わたしたちの間に言い知れぬ重たい空気が流れ込みました。

「うつん、違うよ。宮野さんは何も悪くない。わたしが勝手にひがんで、勝手に宮野さんのこと嫌いになつてただけ」

「ひがんでた？」

「うん。宮野さんがバイト始めたとき、それは、わたしの役目なのにつて思うと、宮野さんのことが許せなかったの。宮野さんはわたしの代わりをしてくれてるんだって、思えなかった」

話が見えてこなくて、わたしは当惑してしまいました。わたしのアルバイトと、小鳥さんに何の関係があるのかよく分かりません。すると、小鳥さんは少しだけ目を丸くして、

「えっと、わたしの名前聞いて、気づかなかったの？」

と言いました。だけど、そもそもわたしは小鳥さんの本名を知りません。わたしが知っているのは、小鳥さんというのは、ニツケネームで、本名じゃないことくらいです。申し訳ない気持ちでいつぱいになっていると、小鳥さんは改めて、わたしに自己紹介してくれました。

「わたしの名前、小鳥遊花乃。小鳥に遊ぶって書いて、タカナシって読むのよ」

タカナシ……タカナシカノ。その名前には心当たりがありました。わたしのアルバイト先の店長さんこと、タカナシさんの娘さんの名前です。そういえば、同じ年だと聞いていました。今更それを思い出すなんて、自分の記憶力の薄弱さに、嫌悪してしまいそうになりました。

「小鳥が遊ぶような場所に、鷹はいないって意味らしいんだけど、読みにくい名前だから、みんな小鳥ってわたしのことを呼ぶの」

「ご、ごめんなさい！わたし、何にも知らなくて」

「うつん、謝るのはわたしのほうだよ。本当は、お母さんのお店を手伝うべきだったのは、わたし。でも、お母さんがお店開くのを反対したのに、気軽に『手伝うよ』なんて言えなくて……それで、宮

野さんがお母さんのお店で働き始めたのを知って、多分、嫉妬したんだと思う」

小鳥さんは、恥ずかしそうに頭をかきました。

「でもね、宮野さんと話するようになって、だんだんとその嫉妬心が消えていったの。むしろ、お母さんのお店を手伝ってくれて、ありがとうって気持ちでいっぱいになった。最初からそうじゃなきゃいけなかったのに、遠回りしちゃった」

「そんな……」

「ねえ、宮野さん。わたしたち、これから友達だよね？」

小鳥さんは真顔でした。もちろん、わたしは頷く以外にできません。だって、言われるまでもなく、わたしは小鳥さんのことを友達だと思っているから。

「良かった」

ホツと胸をなでおろす小鳥さんの顔に、笑顔の花が咲きました。

「じゃあ、ひとつだけ聞いてもいい？ 桜井先生となにかあったの？」

ぐるり、と話題が百八十度転換されて、そのベクトルがわたしの方に向き、再びドキリとしました。

「どうして？」

「だって、暗い顔してる。試験の最終日に、宮野さんが倒れたって、先生に知らせたのはわたしなの。その後から、ずっと宮野さんは真っ暗な顔してる。もしも、わたしの所為だったら、謝らなくちゃって思ってる」

「ううん、小鳥さんの所為じゃない」

本当に小鳥さんの所為ではありません。全力で首を左右に振って、わざわざ桜井先生に知らせてくれた友情に感謝しつつ、わたしはかいつまんで事情を説明しました。わたしの話を、小鳥さんが黙って聞く、というシチュエーションは初めてのことです。

「そっか、そんなことがあったのか、でも……」

話を聞き終えた小鳥さんが間を置いて呟き、人差し指でわたしの

顔をピツと指差しました。

「喧嘩したこと後悔してるんだったら、宮野さんから謝るべきだよ。いまこそ、ごめんなさいって言わなきゃダメ！」

「でも、先生ものすごく怒ってから」

許してもらえないかもしれない、というわたしの不安を打ち砕くように、小鳥さんにはにっこりとわたしに笑いかけてくれました。

「大丈夫。桜井先生は、頭のお堅い教師の中でも、融通の利く方だよ。だから、宮野さんのために、園芸部を作ってくれたんじゃない？」

いつの間にか、わたしたちは、国道に横たわる歩道橋を渡り終えていました。歩道橋の傍から奥へ続く路地を行けば、小鳥さんのお母さんが営む「タカナシ・フラワーショップ」に、このまま国道沿いに歩けば、その先にはわたしたちの通う高校があります。そう、ここは、その分岐点なのです。

「ほら、今すぐ行つてきなよっ！」

小鳥さんは片手でリコリスを抱えると、空いた手のひらでわたしの背中を強く押しました。よろけながら、わたしの体は、学校のほうへ向きます。

「でもっ、アルバイトが」

「でもない！ アルバイト店員なんて、他に代わりならいくらだっているけど、先生に謝って仲直りできるのは、宮野さんしかないんだからっ」

有無を言わせない勢いと正論が、小鳥さんの言葉にはあつて、わたしは「でも」「だけど」という言葉を飲み込みました。先生に謝る。それは、心のどこかでわたしが望んでいたことです。そして、先生が許してくれるなら、どんなに素敵なことでしょう。

「あの、これっ」

わたしは手持ちのバッグから、黄色いエプロンを取り出して、小鳥さんに手渡しました。タカナシ・フラワーショップのユニフォームです。洗濯したてのそれは、ふんわりと柔軟材の香りを漂わせな

がら、小鳥さんの手に収まりました。右手にエプロン、左手にリコリスを抱えた小鳥さんは、驚きの顔をします。

「きつと、タカナシさん……ううん、店長さん喜ぶと思う。だって、本当は小鳥さんに、お店を手伝ってもらいたいつて、言つてたから」
小鳥さんがそうしたように、わたしも小鳥さんの口から「でも」「だけど」という言葉がこぼれる前に、背中を向けて、学校のほうへと走り出しました。

そうして、小鳥さんの姿が小さくなっていくにつれ、わたしの心臓は、爆発しそうなくらい早鐘を打ち始めました。

16・友達だよね？（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

17・夏の終わり

水遣りを終えて、ホースを収めるため、校舎裏にある倉庫へ向かっている途中だった。

「桜井先生！」

と俺を呼ぶ息を切らせた声と、駆け寄ってくる足音が、宮野のものだと気づいた俺は、片付けの手を止めて振り返った。目にも鮮やかな、淡い白色のワンピースは、宮野の儚い印象に似合いすぎていて、思わず声を失った。

正直に言えば、蝉の鳴き声と夏の風にゆれるワンピース姿の宮野は、草原にぼつんと咲く一輪の小さな花を思わせるほどに美しく、見とれてしまったのだ。そもそも宮野の私服姿を見るのは、これが初めてだ。思えば、出会ってからずっと、いち生徒である宮野のイメージは制服姿に固定されていて、宮野が普段どんな服装をしているのかなんて、考えたこともなかった。

「先生、それ……」

何をそんなに緊張しているのか、ずいぶんと声を震わせながらも、宮野は目敏く俺の手に握られた、水遣りのホースに気づいた。

「もしかして、先生。ずっと花のお世話をしてくれていたんですか？」

「世話って言うても、水遣りだけだ。それに、お前のためじゃなく、折角、味気ない中庭の花壇に植えた花のためだ」

俺は、内心を悟られたくない一心でうそぶいたのだが、宮野は深々と頭を下げた。「ありがとうございます」と慇懃な礼を返してくれた。

数十分前、大川と話をしていたときには、後期の始まる九月を前にして、こんなにも早く宮野と再会し、言葉を交わすことになるなんて思いもしなかった。それだけに、宮野の私服姿以上に俺は驚きに包まれ、それを覆い隠すので一生懸命だった。だから、つい嫌味

他らしく聞こえるような言葉が、零れ落ちる。

「そろそろアルバイトの時間じゃないのか？　こんなところで油売
つてると、遅刻するぞ」

「アルバイトは、小鳥さんに変わってもらいました」

「小鳥に……？」

予想外の返事に小首を傾げると、ちょうど俺が大川と話している
そのとき、宮野は小鳥との間にあった出来事を聞かせてくれた。

小鳥の本名が小鳥遊花乃だということは、少し前、夏休み中の職
員会議で、全校生徒の名簿を閲覧した際に知った。同時に、彼女が
宮野のバイト先、つまりタカナシ・フラワーショップ店長の娘であ
ることに気づいた。もちろん、宮野はつい先ほど小鳥自身の口か
ら聞くまで、その事実を知らなかったわけだから、タカナシ・フラ
ワーショップをバイト先に選んだのはほとんど偶然だっただろう。

そして、小鳥との和解……そもそも喧嘩はしていないが、それによ
って誤解が解け、二人の間に真の友情が芽生えたことを語る宮野
は、心なしか声が踊っているようだった。

「で、お前はなにをしに来たんだ？　まさか、そのことを俺に教え
るために、わざわざ来たのか？」

「そのつ、小鳥さんに教えてもらったんです。アルバイト店員なん
て、他に代わりならいくらだっているけれど、先生にわたしの気持
ちを伝えられるのは、わたししかないって」

「気持ち？　それで、私服のまま校門をくぐった、てわけか？」

とんだ不良だな。茶化すつもりで付け加えると、宮野は眉を八の
字にする。彼女のわかりにくい顔色を、あえて確かめるまでもなく、
夏休みにわざわざ校門をくぐって、俺の前に現れた理由くらい、す
でに察しついていることだ。しかし、俺の言い草でその決意をくじ
くのは、教師である以前に、だいの大人として認められることでは
ないだろう。

「いや、冗談だ。お前が真面目すぎるほど、真面目だってことは、
よく知ってる」

「そんな、真面目なんかじゃありません……」

少しばかりの微笑を浮かべてやったものの、謙遜のつもりなのか、宮野は肩を落とした。

「受験勉強にバイトに部活、ほとんど三重生活を、ぶっ倒れるまで、ひとつも手を抜かないなんて、真面目過ぎるだろう？　俺にはそんな真似できないな」

「だって、わたしのわがままではじめたことだから、わたしがやらなきゃいけないことなんです。そうしなきゃ、わたしは前に進めない……」

「そう思うことが真面目だってこと。言い換えれば、肩に力が入り過ぎてる。何事も、がむしゃらにやって、自分を追い込むのも、いいけど、二十四時間そんな体育会系じゃあ、ぶっ倒れるのも無理はない。そうだろ？」

俺の問いかけに、宮野は何も答えなかった。どう答えていいのか分からないのだろうか。沈黙が、宮野の心境を表して、さわわと揺れる裏庭のポプラの木立が、宮野の白いワンピースに柄をつける。「先生は、どうしてそんなに優しいんですか？」

唐突な宮野の言葉に、今度は俺が答えを失う番だった。宮野に優しくしているつもりはなかったが、宮野の目には、俺が優しい先生と映っていたのを、そのとき初めて知った。

「別に、優しいつもりはないんだけどな。でも、お前の弟じゃなくても、お前のことが心配になるさ」

俺はホースを倉庫に片付けると、改めて棘のない言葉を選ぶように言った。

「なあ、宮野。お前の言う、やらなきゃいけないことって、何なんだ？　ただ花を植えて、中庭の花壇を綺麗にするだけじゃないよな？　それって、倒れるくらい自分を追い込まなきゃいけないことなのか？」

彼女がどう思おうとも、宮野に問いたさなければならぬ。なぜなら、彼女が園芸部の活動を始めたいといったことも、弟に迷惑

をかけながらも倒れるまで無理をしたことも、ただ庭造りや花が好きだから、という理由だけではないような気がしてならないからだ。もっと他の理由……それが「やらなきゃいけないこと」という言葉に集約されているのなら、園芸部の顧問となってしまった俺には、知る義務がある。

だが案の定、宮野は口を真一文字に結んで、何も答えない。そこで、俺は核心を突くつもりで、その花の名を口にした。

「エリカ……」

中庭の花壇、その一番端に植えた、季節外れのヒースは、別名そう呼ばれている。しかし、そのエリカにいったい何があるのかは、宮野だけが知っていることで、おおよそ見当が付くようなものではない。

「たしかに、エリカはこれからの季節に花芽を咲かせる花だが、植え付けの時期が遅すぎたな。きっと芽吹きはしない……」

「いいえきつと、芽吹きます。わたしの想いが届いたら、きっと花が咲くはずなんです……」

俺の言葉をさえぎるように、宮野は声を荒げた。そこには、いつもの頼りなさは微塵もなかった。

カマをかけたわけではなかったが、どうやら彼女には凶星だったようだ。それと同時に、俺の予想通り、ヒースの花こそが、中庭の花壇……「宮野の聖域」の主役だった。

「そうしなきゃ、わたしは前に進めない！ もう後ろを振り向きたくないんです。だから、花が咲かないなんて、言わないでくださいっ……」

畳み掛けるように口走った宮野に、俺は小首をかしげた。

「想いが届いたら？ 前に進めない？ それはどういう意味なんだ？」

ありがちな、青春の悩み。少なからず、誰もが通る、とても抽象的で筆舌しがたく、非常に曖昧模糊としているが、高校生という多感な時期を過ごす本人たちにとって、切実過ぎる苦しみというもの

がある。それを乗り越えるのは、時間がすべて解決してくれるもので、大人になれば、そういう悩みはすべて忘れてしまうことが出来る、というよりは、もっと現実的な悩みや、乗り越えなければならぬ社会の壁にぶち当たるもので、そういう曖昧な感傷に浸っている余裕なんか、なくなってしまうものだ。

なにあるう、この俺自身も十年ばかり昔、通ってきた道だ。

だが、違う。宮野の青春を包み込んでいるのは、そういうありがちなものとは少し違い、夏風のさわやかささえも、どんよりとした梅雨に変えてしまうような、現実的な輪郭を帯びているようだった。「言わなきゃ、ダメですか？」

質問に質問で返す宮野は、先ほどの勢いを失った。ただ、宮野の言葉の裏には、あの時と同じく「先生には関係ない」というニュアンスが含まれていることは、明らかだった。

「お前が何を思ってるのか、俺には関係ないことかもしれないけど、でも俺は、園芸部の顧問だ。そして、お前の先生だから、全く関係ないわけじゃないだろう？」

俺は、短くため息を吐き出すと、宮野に近づいて、彼女の頭に「んっ、と拳骨を落とした。ご時世がご時世だけに、そんなことをすれば教師としての資質を疑われかねないし、本格的な生徒と教師のトラブルに発展しかねない、と言う危惧があるから、普段なら生徒に手をあげたりはしない。

特別、と言えば語弊があるかもしれないが、すでに宮野は俺にとって特別な生徒であることだけは間違いなかった。だから、あえて彼女の頭をたたいてやった。もちろん、かなり手加減してやったから、宮野は痛みよりも、当惑した視線をこちらに向けてくる。

「ごめん、宮野。あのとき、むやみに怒鳴ったりして、大人気なかった」

「先生……？」

「でも、心配してるんだってことだけは分かってほしい。それと、お前が何を思ってた花を植えたのか、それは『やらなきゃならないこ

と」が実ったときに教えてくれれば、それでいい。それから、バイトは今日限り止める。教師として、これ以上生徒が日常生活や受験勉強に支障をきたしてまで、校則違反を続けることを見逃すわけには行かないからな」

どのみち、宮野のバイトは、店長の娘である小鳥が引き継ぐことになるだろう。そうなれば、宮野に出番はなくなる。本人もそのことが分かっていたから、小鳥にフラワーショップのエプロンを託したのだろう。

宮野はこくと頷くと、小さな声で俺に言った。

「先生、ごめんなさい」

その一言で、俺と宮野の夏の間の短い争いは幕を下ろした。それだけで、宮野という女の子の気持ちや考え方が、すべて分かったわけではない。あいも変わらず、笑顔の一つ見せない表情は、どこか固くこわばっているままだ。しかし、少しだけ、ほんの少しだけ俺と宮野の距離が縮まったような気がした。

「お互い様だよ」

と、言いながら俺は、先ほど拳骨を落とした宮野の頭を、軽くなでた。そんな宮野の、長い髪を揺らした風は涼しく、いつの間にか季節が夏から秋へと変わろうとしていることを、俺に知らせた。

17・夏の終わり（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

18・忘れられた笑顔

先生は、優しくしているつもりはない、とわたしに言いました。だけど、先生に「ごめんなさい」を伝えたとき、わたしたちの間に吹いた風は秋の気配を感じさせるほど涼しかったにもかかわらず、わたしの頭をなでくれる先生の手はとても優しく、胸の奥がじんわりとあたたかくなりました。

どうして、そんなに優しくしてくれるの？ どうして、先に謝ってくれたの？ どうして、何も聞かずに微笑みかけてくれるの？ 先生に問い掛けた言葉はたくさんあります。だけど、先生が優しいのは、きっと先生の人柄で、なにもわたしを特別扱いしているわけじゃありません。そんなの、当たり前のことです。

当たり前のことだと分かっているのに、先生に頭をなでられたその時から、わたしの胸の奥に、たしかに先生と言う存在が刻み込まれ、いつか先生の「特別」になりたい、と思うようになりました。そう、特別に……。

九月、夏の名残を残す日差しと、高くなつた空に浮かぶ白い秋雲。夏休みの終わりは、わたしたち受験生にとって、大学受験という決戦へのスタートラインです。後期の始まりと共に、待ってましたと言わんばかりに、有名予備校の模擬試験が行われ、何とか志望校への合格ラインを確保できたのは、きっと小鳥さんのおかげだと、口には出さないけれど、心の奥では本当に感謝しています。

先生と仲直りできたのも、園芸部を再開できたのも、間違いなくあの日の小鳥さんの後押しがあつたからに他なりません。

そんな小鳥さんとの距離は、夏休みが終わるのを待たずして、ぐっと縮まりました。とうとう海に行くことは叶いませんでした、二人で街をぶらついた、おしゃべりしたり。学校が始まってからも、小鳥さんが一方的に語りかけ、わたしが黙って聞くだけといういつもどおりのスタンスが、すでにわたしたちの学校生活の一部に

なりつつあります。

それは、久しく味わっていなかった、楽しい時間と言ってもいいのかもしれない。

小鳥さんの友達だった子たちは、小鳥さんがわたしと仲良くすることを、快く思っていないでしょう。だって、わたしは根暗で無口で、拳句の果てに桜井先生に媚を売る、いやらしい生徒、というレッテルを貼られています。もっとも、わたしが肯定も否定もしないから、そういう誤解が生まれるのです。

だけど、小鳥さんは周囲の陰口なんて、明るく笑い飛ばして、わたしに変わらない友情を与えてくれました。

そんな小鳥さんのことを、本当は親友と呼びたい……呼べる日が来ることを願って止みません。だけど、そう呼ぶことは、とても怖いことです。なぜなら、わたしは隠し事をしています。それは、先生にも隠していることです。幻滅されたくないから、必死になって心の奥底に閉じ込めながらも、わたし自身は、常にその過去の過ちに苛まれ続けている。このジレンマが、やがてもう一度同じような出来事に結びつくかもしれない、という恐怖は簡単に拭い去れませんでした。

人は、永遠に友達でいることは出来ない。偉い人の言葉ではありませんが、諍いやトラブルは、常に足元に転がっていて、一度捻じ曲がったものが、簡単には元に戻らないように、こじれた友情も簡単に元に戻すことは出来ません。その反面で、歳をとっても変わらない友情を育み続ける人もいます。そういうのは、とっても珍しいことかもしれないですが、わたしは出来るなら、わたしのことを友達だと言ってくれる人と、ずっとずっと友達でいたいと思うのです。こじれた友情も、取り戻したいのです。

そのためにも「計画」は絶対に成功させなければなりません。きっと、わたしの計画はわたしが思っているよりもっと、他の誰でもないわたし自身の未来を左右するものなのです。だから、わたしは、受験勉強の合間を縫って、先生と一緒にせつせと水をやり、雑草を

抜き、肥料を与えました。

いろいろあって、小鳥さんがタカナシさんのお店を手伝うことになり、代わりに、わたしには十分な余裕が生まれ、先生との約束通り、無理をせずに部活動と受験勉強を両立することが出来るようになりました。もっとも、わたしはアルバイトをお払い箱になってしまったわけなのですが、小鳥さんとタカナシさんが母子の絆を取り戻せたことは、友達として喜ぶべきことです。

もしも、この花壇に花が咲いたら、二人にも感謝の花束をプレゼントをしたいと思います。だって、タカナシさんのお店でアルバイトできたから、こうして花壇に花の種を植えることも出来たのです。ところが、いくら待ってもヒースの花が芽吹くことはありませんでした。

わたしがヒースの種を植えたのは二ヶ月前の七月。ヒースの植え付け時期はとくに過ぎていて、それは遅すぎる部活申請と同じように、時期を完全に逸しています。ですが、そんなことは図鑑やガーデニング手引書を読めばすぐに分かることで、先生に言われるまでもなく、ちゃんと知っています。

それなのに、花壇にヒースを植えたのは、わたしの「計画」それ自体が、「賭け」みたいなものだったからです。

賭けごとにはあまり好きではありません。そもそも、勝ち負けを競い合うことが好きではありません。中学のころ、わたしは水泳部に所属していました。県内大会でも、それなりの成績を収められる実力を持っていたのですが、わたしが一等でゴールのタッチを決めれば、それとほぼ同時に、わたしに負ける人たちが存在します。勝負に負けた人たちは、悔しい思いをして、時には涙を流します。大会のために行ってきた辛い練習も、文字通りすべて水の泡になってしまったのですから、無理ありません。そのとき、敗者を目の当たりにしたわたしは、決まって胸が苦しくなりました。

同じように、プロセスに多少の違いはあっても、賭け事もきつぱりと、勝者と敗者を決めるものです。でも、この賭けは、わたしだ

けの賭け事です。勝つのも負けるのもわたしだけ。だからこそ、勝ちたい。勝たなければ、「計画」は実りを得ません。実りを得なければ、わたしのわがままに付き合ってくれる先生に、なんと説明したら良いのかも思いつきません。

だから、言葉や意思が伝わらない植物に、わたしが出来ることは、芽吹きを強く思い描きながら、園芸部員としてふさわしく、中庭の花壇を手入れしてやることだけでした。

そうして、時間はあつという間に過ぎていき、九月のカレンダーも終わりに近づいたころ、半ば諦めと落胆が鎌首をもたげ始めた矢先、放課後の教室に桜井先生が駆け込んできました。先生は、わたしたちのクラスを受け持っている先生ではありません。わたしたちの教室に用があるとすれば、それはわたしに用事があるということなのです。

ちようどそのとき、わたしは帰り支度をしながら、小鳥さんのおしゃべりをいつも通りに黙って耳を傾けている真つ最中でした。話題は、フラワーショップのお話で、小鳥さんのお母さん……つまりタカナシさんが、「たまには顔を見せてほしい」とわたしに仰っている、とのことで、あながちわたしに関係のない話ではありませんでした。

そんな小鳥さんとわたしの、ある種独特な一方通行の会話をさえるように靴音を響かせながら、足早にわたしのところへやってくるなり、先生はわたしの頭を軽く小突いて「やったな！」と言いました。

何が「やった」なのかわからなくて、わたしは思わずきょとんとしてしまいます。それほど鋭いほうでなはないわたしに代わって、先生の言葉の意味にいち早く気づいたのは、つい先ほどまで、おしゃべりに夢中だった小鳥さんでした。

「もしかして、花壇の花が芽吹いたんですか？」

すると、先生は力強く頷いて、わたしに満面の笑みをくれました。鈍いわたしも、ようやく理解した時には、派手な音を立てて椅子を

跳ね除け、先生の呼び止める声もよそに、中庭へと駆け出していました。

グラウンドから聞こえて来る運動部の掛け声が、東と西、両側の校舎に反響し、中庭という谷間に降ってきます。

すでに、ひと目見ただけで、花壇の様子が変わっていることに気付いたわたしは、高鳴る胸の鼓動を押さえながら、一步一步を踏み締めるように、花壇へと近寄りました。昨日までは、ただの畝だった場所に、ぽつり、ぽつりと、淡い色をした若芽が顔を出しています。まるで、一斉に目を覚ましたかのようでした。

「宮野！ まったく、走らせるなよ。俺も若くないんだからっ」

一足遅れて、先生がやって来ました。若くないと言っています、先生はまだ二十六歳。十分若くて、息を切らしてはいませんでした。わたしは、先生が隣にやってきたのを確かめて、その視線を花壇の端に向けました。そこに植えたのは、わたしが一番植えたかった花、ヒースの花です。もちろん、ヒースも例外なく、土を割って芽を出しています。

「先生……奇跡って本当にあるんですね」

季節外れの花が咲く。それは、奇跡と言ってもおかしくありません。そつとつぶやくように言うと、先生は少し驚いたように目を丸くして、妙にまじまじとわたしの顔を見つめました。それは、わたしが「奇跡」なんて言葉を口にしたからではありませんでした。

「宮野の笑顔、はじめて見たよ」

先生が言いました。わたしは、わたしが笑っていることなんて、全然気づいていませんでした。だけど、心の一番深い場所に、ぽつかりと空いている穴の辺りから、温かいものがどんどん溢れてきます。それが、嬉しい、と言う気持ちだと知ったとき、校舎の窓ガラスに映る、わたしの顔は確かに、三年ぶりの笑顔を浮かべていました。

「わたし、まだ笑えるんだ……」

小鳥さんの駆け寄ってくる足音と、三年間忘れてしまっていた笑

顔、そして、ついにわたしの「計画」が実りを結ぼうとしていることをかみ締めながら、時間が経つのも忘れてヒースの芽をじっと見つめていました。

18・忘れられた笑顔（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

19・十月六日

笑顔を見るのは、嫌いじゃない。

嬉しい気持ち、楽しい気持ちを表現できるのは、人間だけに与えられたものであり、その笑顔を見て、嬉しさや楽しさを共有することが出来るのは、人間の特権でもある。そんなことは当たり前のことだが、それが宮野の笑顔なら、尚更だった。

彼女が十八年を迎えようとする人生の中で、どのように生きて来たのか、赤の他人である俺には分からない。しかし、今の宮野を見ていれば、きつといいことばかりではなかったというのは、想像に難くなかった。

ずいぶん前、大川に俺と宮野が「似たもの同士」だと言われたことがある。どこが、と問われれば、確たることは言えないけれど、大川の言うとおり、俺と宮野は似ている。俺も二十六年の他愛もない人生が、いいこと尽くめだったわけじゃない。辛いことや耐え切れないことが、確かにあった。それらは、まるで細胞を侵食する病原体のように、俺の心を蝕んでいき、大きな穴をあけた。そして風によって運ばれてくる、砂粒のような感覚が、穴の中でザラザラとする。

おそらく、宮野の心にも、大きな穴が開いているのだろう。そして、ザラザラとした感覚にとらわれては、ひとつずつ笑顔を忘れて行った。そういった意味では、俺よりも宮野のほうが重症だった。

だから、宮野と俺の二人で手塩にかけた中庭の花壇に、芽吹きの新緑が彩りを添えたことに、感極まった宮野が目細めて微笑んだことは、俺にとっても嬉しいことだった。それを共有と呼べるのかどうなのかは、よく分からないが、少なくとも、俺は宮野の笑顔に心惹かれた。

本当の宮野美咲は、明るい女の子だった……。以前、彼女を知る彼女の中学時代の級友たちから聞いた話が、真実だとすれば、その

笑顔こそが本当の宮野の顔なのだ。そんな宮野の顔を見ると、強要されたわけでも、空笑いでもなく、自然と心の内側からあふれた笑顔が失われていた経緯、即ち、彼女の心に大きな穴を開けたのは、いったい何なのか知りたくなかった。

少なくとも、俺は宮野のことをよく知っているわけではない。

教師と生徒という間柄なら、知る必要もないことだが、そのとき、俺にとって宮野の存在が、生徒のそれから大きく逸脱しつつあることに、少なからず無自覚ではいらなかった。彼女が背負い、朗らかな本来の自分を押し殺した理由もしくり、無理をして心配かけさせてくれることも、はじめて見たかすかな笑顔も、すべてが気になつて仕方がない。

ことあるごとに、脳裏によぎる宮野の顔に、教師と生徒という無味乾燥な間柄を超えて、もう少しだけ宮野という女の子のことを知りたいと思う。

しかし、「あとで話してくればいい」と言つた手前、宮野の心に空いた穴の正体を、今ら問いただすわけには行かない。

せめて、宮野の笑顔が消えることなく、このまますべてが上手く運んで、いつか「本当の宮野」に会えることを願いつつ、俺は今日も屋上の聖域で、タバコの煙を吐き出した。

季節は、煙を吸い込む風もひんやりとし始める十月の頭。

すっかり秋めいてきた景色とは対照的に、中庭の花壇は、植物には厳しいとされるこの季節にそぐわないほど、生命の力強さをあふれさせていた。そもそも、宮野は、冬に咲く花を選んで、花壇に植えたのだ。

植え付けの時期、肥料のやり方、世話の仕方。ガーデニングと一口に言つても、その方法は千差万別だ。しかし、宮野はそのすべてを熟知していた。「昔取つた杵柄」と言うニュアンスで、宮野は謙遜して見せたが、その知識は、教師の体面丸つぶれと知りながらも、舌を巻くほかなかった。だが、そんな彼女にも、季節外れに植えたヒース、ことエリカが芽生えることは、賭けだったのだらう。

あれからヒースは、すすくと育っている。根を張り、葉を伸ばし、ついには「ぶどうの房を逆さにしたみたい」と言った、宮野の言葉どおり、無数のつぼみが連なっている。

しかし、何事も順風満帆とはいかないのが、世の中の常。それを不運と呼べば、あまりにも空しく、不幸と呼べばあまりにも悲しすぎるからだ。

その事件がおきたのは、十月の六日。放課後の屋上。俺の聖域に人影はあるはずもなく、俺は不良教師の証でもあるタバコを吸いながら、吐き出した白い煙に、そういえば明日の「十月七日」は宮野の誕生日であることを思い出しているときのことだった。

「昔から変わらないわね、高いところが好きなんて……鳥にでもなりたいのかしら？」

突然背後から声をかけられて、心臓が飛び跳ねた。立入禁止の屋上で喫煙禁止のルールを破っている不良教師と言えど、小心者に変わりないと言うことは、自分自身が一番良く知っている。そればかりか、教師の俺が一人の生徒のことばかり気にかけているのは、少しだけ後ろ暗い。前にも言ったが、俺にも教師としてのプライドがあるのだ。

しかし、その声と近づいてくる足音が、大川のものだと知れると、飛び出した心臓は元の場所にすんなりと収まった。

「なんだよ、いきなり。気配が全然しなかったぞ」

冗談交じりに言っていると、白衣の裾と、長くしなやかな黒髪を秋風になびかせながら、大川は俺の隣にやってくる。

「別に気配を消したつもりはないわよ。それを言うなら、桜井くんがぼんやりとしていたんでしょ」

大川はにべもなくそう言っていると、手すりから身を乗り出すように、眼下に広がる街の景色をぐるりと見渡した。

「初めて、ここの屋上に上がったけれど、見晴らしいいのね。わたしたちの通ってた、高校とは大違い」

「そりゃ、俺たちの母校は街のと真ん中であつたからな」

ふと、十年近く前に通っていた、母校の屋上を思い出す。あのころから、屋上という場所そのものが俺にとって、聖域だった。ただ、屋上へあがるための鍵は、俺の持ち物ではなく、職員室からくすねたものであり、今思えば、立派な軽犯罪だった。

「見えるのは、周りのビルに切り取られた、四角い空だけ。それなのに、桜井くんってば、毎日屋上で寝転がって、四角い空を見上げてたわよね」

「まあな。小さいころは、パイロットか宇宙飛行士になるのが夢だったからな。空を見上げてると、落ち着くんだよ」

「そう言って、授業をサボりまくってたのは、よくないと思うけど。それで、いっつも担任の百合子先生に目の敵にされてたじゃない。

そんな桜井くんが高校の教師になった、なんて知ったら、百合子先生、きつと驚くわよ」

クスクスと、声を立てながら昔を思い出す大川。遠い日のことを、懐かしさというオブラートに包みながら語り合えるのは、俺たちが同級生であり、そして俺と大川が恋人と世間で呼ばれるような関係だったことの、何よりもの証だ。

だが、高校時代という遠い日は、俺にとつて懐かしだけのものではない。そこには、思い出したいくない瑕きずも隠れているのだ。

「俺のことなんて覚えてねえよ」

ぶっきらばうに返すと、大川はため息を吐き出した。

「そうかしら。そうやって、なんでも忘れたフリをしても、結局何も忘れられないことは、あなたもよく知ってることでしょ？　だから、ずっとあの子のことを引き摺ひきずってる」

「その話、また蒸し返すのか？」

大川は突然すぎる。話題を振るにしても、もう少しこちらの心の準備が出来るのを、待つてほしい。特に、彼女の言うことは、いつも的を射ていて、且つ、瑕を掘り起こそうとしてくる。

「蒸し返したくはないわよ。今のわたしとあなたの良好な関係を壊したくはないもの。でも、あなたが引き摺らなければ、わたしは無

理して未練を断ち切ることもなかったんじゃないかって、時々思うことがあるの」

「未練……。まさか、俺たちが別れたのは、俺の所為だっていうのか？ あれは、お互い別々の大学に進学して、ガキのままじゃいらなくなつたから、自然消滅つしてしまつたてやつだろう？」

大川がそんな風に思っていたなんて知らなかった俺は、驚きと共に釈明を口にした。しかし、大川は再びため息をついた。今度は、酷く重たいため息で、あつという間に、地上へと落下していく。

「意見の相違つてやつか……。でもさ、大人になつたからって、相手のことを好きでいる気持ちに変わりはないわ。それが、恋とか愛とか、そういうものでしょ。もちろん、今となつては桜井くんのことを責めるつもりはないけれど、あなたがあのこのことを引き摺っていて、もしも宮野さんとあの子を重ね合わせているなら、それは見過ごせない」

大川の言葉を聞きながら、俺は煙を吐き出した。それも、大川のため息と同じように重たくて、あつという間に地上へと落下して、霧散する。

「前にも言つたけれど、引き摺つてなんかいない。そりゃ、最初に宮野を見たとき、あいつのことを重ねそうになつたのはホントだ。でも、今は違つて、確信持つて言えるよ。俺は、きちんと宮野美咲のことを見てる」

「あら！ それってどういう意味かしら……。まさか」

言いかけた言葉を、ごくんと飲み下した大川が、意味深ににやりとする。女という生き物は、時折六感が鋭く反応することがあるらしい。彼女の笑みは、まに六感が直感的に俺の内心を悟つたかのようだった。

俺は、あわてて取り繕つては見たものの、あわてればあわてるほど、ボロが出てしまう。ボロは、大川に確信を与えるだけだった。「教え子に手出したら犯罪よ！」

大川が力いっぱい俺の背中をはたいた。ちょうど、タバコの煙を

肺に吸い込んだばかりだった俺は、思わずむせてしまう。

「手なんか出さねえよ！」

怒鳴り声を上げてはみたが、さすがに、女である大川に手を挙げ
るわけにも行かない。そういう俺の性分を知る大川は愉快そうに、
けたけたと笑った。そうやって、人のことをからかうのは、あのこ
ろと変わっていない。

「でも、ちよつと妬けるな。もしも、あなたの心に空いた穴を塞い
でくれる人がいるなら、それはわたしだと思ってたのに」

「ずいぶんと、しおらしいこと言うじゃないか」

「あら、これは本心よ」

どこまでが本気なのかよく分からない。大川は訝る俺の視線をい
なすと、くるりと踵を返した。

「おい、もう行くのか。一体何をしに来たんだよ、お前」

「暇だから、ダベりに来たの。ほら、いつもはわたしの聖域にあな
たが来るばかりじゃつまらないじゃない。だから、今日は、わたし
があなたの聖域にお邪魔しようって思っただけよ」

白衣を翻す大川は、後姿を見せたまま言った。心なしか、大川の
声が上ずっていることに気づいたが、その理由はよく分からず、俺
は「なんだよそれ」と返すしか出来なかった。

と、その時だった。

大きな音を立てて、屋上の扉が開け放たれる。予期せぬ来訪者の
登場に、千客万来なことなどと、落ち着いている場合ではない。
俺の手には、まだタバコが握られている。それを、慌てて携帯灰皿
に突っ込もうとした俺の手を、予期せぬ来訪者は声でさえぎった。

「先生っ、桜井先生！ 大変ですっ」

肩で息しながら、俺の名を呼ぶ来訪者は、宮野美咲だった。

19・十月六日（後書き）

ご意見。感想などございましたら、お寄せください。

20・聖域の崩壊

桜井先生を探して、学校中を走り回りました。中学以来、水泳をやめて久しいわたしの体力は、すっかり落ち込んでいて、あつという間に意気が上がってしまいました。桜井先生の姿は職員室にも理科準備室にもなく、ようやく先生の居場所が屋上だと言うことを教えてもらったわたしが、最上階へと続く長い階段を駆け上り、屋上の鉄扉を開いたとき、桜井先生は校医の大川先生とお話をされていました。

お二人が高校の同窓生で、とても仲がいいことは、すでに知っていました。本当なら、お二人が何を話されていたのか、気にかけたところですよ。でも、わたしにはその余裕がありませんでした。

一大事。そう、一大事なのです。

「どうしたんだ、宮野？」

わたしが真つ青な顔をしていることにいち早く気づいた桜井先生は、吸いかけのタバコを手早く形態灰皿に押し込むと、わたしのところまで駆け寄ってきてくれました。わたしは、今にも溢れ出しそうな涙をこらえるのに必死で、うつむきがちに、どう話すべきか、言葉に迷ってしまいました。スカートのすそを固く握り締め、手の震えを抑えながら、事実を一つづつかいつまんで話します。すると、見る見るうちに桜井先生の顔がこわばっていきました。

「行ってみましょう。この目で確かめてみないことには……」

そう言ったのは、大川先生です。お二人は顔をあわせて頷くと、屋上を後にします。阿吽の呼吸とでも言うのでしょうか。お二人の息のあった意思疎通に、わたしは促されて、お二人を中庭へと導きました。

放課後の中庭に、小さな人ばかりが出来ています。いつもなら、中庭に憩いの場を求める人なんて誰もいなくて、ひっそりと静まり返っている場所です。もちろん、目の前の人だかりも憩いのために

集まっているわけではありませんでした。

彼らが集る場所、それは、わたしたちの花壇です。長い間、管理者の役目を負った歴代の先生たちにも、見向きもされなかった、雑草と苔だらけの花壇を、わたしと桜井先生の二人で世話をしていることは、少なからず学校の話題となっていました。

なぜなら、ようやくそこに、何十年ぶりの花が咲こうとしていたからです。

「美咲、桜井先生、早く!!」

人だかりの中から、聞き覚えのある声がわたしたちを手招きしました。小鳥さんです。この一大事をわたしが知ったのは、小鳥さんが教えてくれたからに他なりません。だから、花壇の有様をこの目で見るのは、その瞬間が最初でした。

「ひどい……っ」

人だかりを掻き分け、花壇の姿に息を呑むわたしの傍で、桜井先生も絶句しました。

まるで獣が踏み荒らしたかのように、やわらかい花壇の土につけられた、無数の靴跡。つぼみをつけ、今にも開花しそうだった、花芽たちはズタズタになり、脇に添えた花の名を記したネームプレートや飾りも折られていました。

もはや、誰がそこに花壇があつたなんて思うでしょうか。

折角作り出した楽園が、非情な無法者に荒らされる。そういった光景が、目の前にあつて、三ヶ月あまりのわたしと先生の汗と苦勞が、一瞬にして無駄になつてしまったのです。

思えば、計画を思いつき、わがままを言つて、先生と始めた園芸部。毎日、朝と放課後、受験勉強の合間を縫つて、せっせと世話をしました。花の種や肥料を買ったために、小鳥さんのお母さんのお花屋さんでアルバイトもしました。そして、疲れ果てたわたしが倒れて、先生を心配させました。喧嘩もしました。でも、やっとすべての苦勞が報われて、花が、ヒースの花が咲こうとしていたのです。

跡形もないほどに荒らされた花壇に、計画が失敗したという事実

よりも、先生と二人で過ごした時間そのものが壊されて締まったような気持ちになって、わたしは悲しさに胸を痛めました。

「誰がこんなことを……」

桜井先生がつぶやきました。その声音には、わたしを叱った時とは違う、明らかな怒りが見え隠れしていました。そんな、先生のつぶやきを払うかのように、

「面白いことになったなあ」

「宮野さんのこと嫌いな人がやったんじゃないの？」

「それとも、桜井先生に恨みを持つ人とか」

「どうせこんな日陰に花なんて咲かなかったと思うよ」

と、中傷にもならないようなささやきが、あちらこちらから沸き起こります。もちろん、地獄耳じゃなくても、先生の耳にもちゃんとささやきは届いていました。

「おい、お前ら。見世物じゃないんだ。クラブ活動のあるやつは、さつさと練習にもどって、帰宅部どもは家に帰れ!!」

確かに犯人がいることは間違いないというのに、花壇を荒らしたのは一体誰の仕業なのかわからず、先生は行き場のない怒りを、人だかりにぶつけました。すると、みんなは雲の子を散らしたように、そそくさと中庭を立ち去っていきます。あとに残されたのは、わたしと桜井先生、大川先生、小鳥さんの四人だけ。

静かになった中庭を、ふつ、と秋の風が駆け抜けていきました。

その風は、やたらと冷たくて、切なくて、わたしはついにこらえきれずに、荒れ果てた花壇を見つめつつ、大粒の涙をこぼしました。

「美咲！」

「宮野さんっ」

小鳥さんと大川先生が、わたしのことを心配そうに見つめます。本当は、泣きたくなんかありませんでした。もっと、犯人に対して怒りを覚えるべきでした。でも、わたしにはそう出来なかった理由があったのです。その理由を、小鳥さんも大川先生も知りません。もちろん、桜井先生も。

「宮野……片付けよう。話はそれからだ」

先生はそういうと、わたしとは目を合わせずに、ひとり荒れ果てた花壇の真ん中にしゃがみ込み、踏みつけられた花芽を引き抜いていきます。そんな先生の背中が無情に思えて、わたしはまるで子どもみたいに大声で泣きじゃくりました。

それから、どうやって家に帰ったのか覚えていません。途中まで大川先生と小鳥さんに送ってもらったのは憶えているのですが、家に帰り着いたときには、すっかり家の周りを夜の帳が包み込んでいました。

「ただいま」を言う気力もなく、玄関を開ければ、先に帰っていた弟の透が「何かあったの？」と尋ねてくるのは、無理もないかもしれません。涙のあとをつけたまま、暗い顔して戻ってくれば、家族なら心配するのが当たり前です。それなのに、わたしはわたしはごしごしと顔を制服の袖でこすって、

「何でもないよ」

とそっけなく言い残し、部活で汚れたのか、黒ずんだ泥にまみれた透のスニーカーを横目に、そそくさと自分の部屋に引きこもりました。制服がしわになるのもかまわず、息苦しいのもかまわずに、ベッドの上に身を投げ出して、顔をうずめると、十八歳にもなつてこんなにわたしって泣き虫だったのか、と自分でも驚くくらいに、一晩中泣きはりました。

翌朝。カレンダーの日付は、十月七日。泣き疲れて眠ったわたしは、目覚まし時計のけたたましい音に目を覚ましました。

朝日の差し込む窓の外は、すがすがしい小春日和の空。ですが、わたしの体は重苦しい倦怠感に包み込まれていました。まぶたを閉じれば、荒らされた花壇の光景が蘇ってきて、悲しい気持ちがまったく晴れることはありません。

学校へ行きたくない……。

一度そんな風に思うと、ベッドから抜け出すのも億劫で、あつという間に時計の針は授業開始時刻をまわっていました。それを幸い

に、最初で最後の、無断欠席することにしました。要するに、サボりです。

でも、いざ学校をサボってみると、時間が経つにつれて、罪悪感がひたひたと忍び寄ってきます。今から学校へ行くべきかしら、それともこのままふて寝しているべきかしら。

そうして、一人ぼっちの静か過ぎる家の中で、悶々していると、唐突に携帯電話の着信音が鳴り響き、わたしは思わず悲鳴を上げてしまいました。なかなか部屋から出てこない姉に見切りをつけて、早々と登校した透からの連絡か、それとも小鳥さんからの連絡と思い、急いで携帯電話を手に取ったわたしは、そのディスプレイに表示された名前を見て、再び驚きの声を漏らしてしまいました。

『桜井先生からのメールが一件あります』

園芸部を始めるときに、連絡先として教えてもらった、桜井先生のメールアドレスです。先生が、わたしのことを心配して、メールを送ってくれたことは明白でした。そして、ついに罪悪感が、倦怠感の上に、ずんつと重たくのしかかってきます。

わたしは、恐る恐るメールを開きました。

すると、そこに書かれていたのは、わたしの予想を裏切った、おかしい文章でした。

『窓の外を見なさい』

ずいぶんと素っ気無い文章に、小首をかしげながら、わたしはカーテンを開けて、家の外に目をやりました。家の前に、白い乗用車が止まっています。両親の車ではなく、見覚えのない乗用車です。わたしの頭の上に、いくつものハテナが浮かびかけたそのとき、おもむろに乗用車の運転席が開いて、背の高い男の人が降りてきました。男の人は、すっと顔を上げると、二階の窓辺から見下ろすわたしに、にっこりと微笑みます。

コンタクトを外して、ばやけたわたしの視界でも、それが桜井先生であることは、すぐに分かりました。

再び、メールの着信を知らせるベルの音。もちろん、家の前にい

る先生からのメールです。

『寝癖を直して、服を着替えたら、降りてきなさい。今から、一緒にデートしよう』

20・聖域の崩壊（後書き）

ご意見。ご感想などございましたら、お寄せください。

21・デートのお誘い

デートなんて、ちょっとした冗談のつもりだ。

無断で学校をサボった宮野を、家から引つ張り出すための口実だった。だからと言って、彼女を無理矢理学校に連れて行くつもりもない。そうしたところで、彼女の涙を拭うことは出来ないだろう。

宮野が、泣くのを見たのはこれで二度目。一度目は、俺が大人気なく叱り飛ばした所為で、宮野を泣かせてしまった。悪いのは半分俺だ。しかし今回は違う。園芸部を始めて、三ヶ月あまり。宮野と二人で毎日欠かさずに世話してきた花壇が、何者かによって、無残にもあらされてしまった。いたずらなのか、それともイジメのつもりなのか分からない。いずれにしても、心無い第三者の手によるものだ。小説の中の名探偵なら、犯人探しもしただろう。もちろん、宮野の泣き顔を見たときは、頭にカツと血が上り、犯人を見つけ出して、ぶん殴ってやろうとさえ思った。しかし、俺は教師であり、名探偵ではない。心無い第三者が誰であっても、生徒や同僚たちに疑いをかけることは、教職の人間がすべきことではない。

荒らされた花壇の片付けもそこそこに、大川と小鳥遊に送られて家路に就く、すっかり気落ちした宮野の背中を見送りながら、教師の俺に出来ること……いや、教師としてだけでなく、俺自身として出来ることは、彼女の涙を拭ってやることしかない、と思った。

しかし、案の定と言うべきか、翌日宮野は学校に姿を見せなかった。予想していたこととは言え、昨日の事を思い出せば、宮野のことが気になって仕方がない。午前中の授業がまったく手につかず、板書を間違っては、生徒に指摘される始末。教師としては情けない限りで、このままではいけないと思い立った俺は、宮野のクラス担任に頼み込み、彼女の家の住所を聞き出した。

そうして、取るものもとりにあえず、午後の予定をすべて放り出して、通勤に使っている白い乗用車を、宮野の家まで走らせたのである。

る。

『少し、待っていてください』

短い文面の返信のあと、宮野は部屋のカーテンを閉めた。女の支度は時間がかかるもの。それが、高校生であつたとしても、変わらないことは、八年前に大川から教わつたことだ。

待つことは嫌いじゃない。

車の外でぼんやりと、宮野家の白い壁と赤い屋根の外観を眺めながら、タバコを吹かせて宮野が来るのを待つ。昔から、気長であることは、俺にとっての数少ない長所だ。

しかし、たつぷり三十分の時間をかけて身支度を終え、玄関から飛び出してきた宮野は、寝癖こそ直っていたものの、何故かいつもと変わらない制服姿だった。

「なんだ、その格好。デートの服装じゃないよな。それとも、今から学校へ行きたいのか？」

苦笑をかみ殺しながら言うつと、宮野はいささか恥ずかしそうな顔を、左右に振つた。

「その、わたし、私服をあんまり持つてないんです。だから、そのつ、制服が一番無難かなつて。ごめんなさい」

「べつに謝るところじゃないよ。その方が、課外活動に見えるだろう。さあ、乗つて」

まるでハイヤーの運転手のように助手席の扉を開き、宮野を手招きした。宮野は、怪訝な目をして俺を見る。

「あの、わたしとデートつて、本気なんですか？」

「本気本気、大真面目。俺は、いつだって真面目だから。とにかく、変なところにつれて行くような趣味は持つてないから、安心しろ」

軽いジョークを交えてやると、宮野は心なしか安心したように、助手席に乗り込んだ。

平日の町並みを横目に、ハンドルを切つて目的地……所謂デートスポットへと車を走らせる。無口な宮野との会話が弾むはずもなく、車内にひびくのは無機質なエンジン音ばかり。ステレオやラジオを

付けて、沈黙を払うこともできたが、学校をサボったという特殊な状況と、普段は見ることでできない平日の町並みや行き交う人の姿を車窓から眺める宮野は、心なしかうきうきしているように見えた。昨日、あんなに辛いことがあったことを思えば、彼女のうきうきに水を差したくはない。

「先生」

俺の内心を他所に、車窓越しに流れる町並みを見つめていた、宮野が呟く。

「どこへ行くんですか？」

「それは着いてからのお楽しみ」

「先生」

「なんだ？ 本当に変なところじゃないから、安心してくれよ」

「違います。……この車、タバコくさいです」

宮野なりの冗談のつもりだったのか、それとも本心かは分からない。言うほど、俺の車にタバコにおいては染み付いていない。一応、これでも愛車だ。なるべく車中でタバコをすわないように心がけているし、手入れも欠かさないようにしている。

俺は、宮野の言葉を冗談と受け取って、「慣れればいいにおいだよ」と笑って返した。だが、宮野の顔は簡単には微笑まない。もともと、分かりにくい表情の持ち主である。本人は「笑い方を忘れた」と言っていたが、中学時代の写真に見る、宮野美咲は今と言う時間を精一杯楽しんでいるような満面の笑顔をしていた。そんな笑顔を忘れてしまうことは、人間に出来ることではない。脳の一番深い場所に、記憶されているはずなのだ。

つまり、宮野は「忘れた」のではなく、「忘れない」だけなのだ。どうしてそうするのか、うなづいてしまった理由は何なのか、それを知りたい。

しかし、花壇が荒らされ、つばみをつけたエリカの花が全滅してしまった今、宮野が言っていた「やりたいこと」は、もう実りを迎えることはない。それなら、なぜ宮野が明朗快活だった自分を押し

殺してしまったのか、そして、彼女が何を考えて園芸部を始めたのか、今すぐにでも、知りたい。知らなければ、彼女の波を拭いてやることなんて、できやしない。

そのために、俺は宮野を助手席に乗せて、ここまでやってきたのだ。

『海の見える植物園』

温室を五つほど備えたありきたりな植物園だが、世界中に咲く色とりどり、何千種もの花を一年通して鑑賞できる。また、『海の見える』と言う名前のとおり、古いメリケン埠頭に面した場所で、園内には、レンガ造りの倉庫やガス灯などの、趣のある明治期の建物が、当時の面影を残しているため、デートスポットとしても、それなりに名が通っている。

園芸部の課外活動にはうってつけの場所だ。宮野が園芸部を始めた理由がなんであれ、あれだけ花のことに詳しいのだから、花が好きということは間違いないだろう。宮野と二人で行くなら、ここしかないだろうと、最初から思っていた。

現に、車を降りた宮野は、表情に表れなくても、嬉しそうだった。もちろん、ここは大人として、先生として、課外活動の名を借りたデートに誘った者として、宮野の入場料くらいおごる義務がある。遠慮しがちな宮野をどうにか説得し、財布片手にチケット売り場へ進むと、チケット売りの女性は、一瞬怪訝な顔をして俺たちを一瞥したものの、さしてとがめる様子もなく、流れ作業のようにチケットをもぎってくれた。

そうして、半券を握り締め入場した園内は、入り口の広場から、すでに鮮やかなの花であふれていた。いわゆる季節の展示と言うやつで、温室へ続くコンコースの両脇の花壇を、ピンク色に染まったコスモスが埋め尽くしている。それは、宮野が感嘆の声を漏らすのも、無理ないほど、美しい光景だった。

「きれい……」

彼女の両目に映るものと、俺の目に映るものは同じ。だが、宮野

の感じているものと、俺が感じているものは少し違うだろう。確かに、あたり一面のコスモスは、荘厳な迫力と美しさがあり、目を奪われる。しかし、俺の視線はコスモスの花壇に目を輝かせる宮野に向いていた。宮野が嬉しそうにしていることが、俺にとって嬉しいことなのだ。

コンコースのコスモス畑を縦断すれば、そこからは温室が続く。平日と言うこともあつてか、客の姿はまばらだったが、温室内には、季節外れの花も、日本では咲くことのない外国の花も、ガラス張りの温かさに守られて、見事に咲き誇っていた。

花のことに詳しくない、と言うよりは無知な俺は、温室内に飾られた花々を見て、こんなにも世界にはいろんな花があつたのかと、赤、白、黄色の花々を見て、なんだか平凡な感想を思いついた。もちろん、格好悪いので口には出さない。

一方、花好きの心に火がついたのか、微妙にだが、宮野の口数が多くなつていった。

「あっちの白い花は、ランの一種で……」

別に訊いてもいないのだが、宮野は逐一、覚えきれないほどの花の名前など色々なことを俺に教えてくれる。花を前にすれば、教師と生徒の立場が逆転してしまうのも、実のところ少しばかり心地よかった。

そうして、二時間近くじつくりと花を観賞した俺たちは、温室を抜けて、植物園の裏手にある、メリケン埠頭へと足を向けた。もとそこには、外国から輸入された小麦の貯蔵倉庫があつたらしい。その土地を買って、植物園にした、初代園長がメリケン埠頭の名残を残すことにした。そのおかげで、植物園にとっては蛇足的なレンガ造りの倉庫群だが、デートスポットとしては最適な植物園となつたのだ。

「二時間も歩きっぱなしで疲れた。そこで一休みしないか？ ジュースでも買ってくるよ」

ガス灯の下に並べられたベンチを指差して言うと、ひとまず宮野を残して、手近な自販機で適当な飲み物を手に入れる。そして、缶を両手に握りベンチまで戻ると、先に腰を下ろしていた宮野は、ぼんやりとしていた。

彼女の瞳に映るのは、ベンチから見渡せる、穏やかな海だ。緩やかに埠頭を駆け抜ける心地よい秋色の海風に、宮野の長い髪がなびいていた。静かで、とても絵になる風景に、俺はしばし立ち止まって、彼女のうしろ姿を見つめた。

初めてであったとき、宮野の姿を見て、思わずあいつと重ねそうになった。顔かたちはそれほど似ていないし、背丈も声も仕草だってまったくの別人だと言うのに、醸し出す雰囲気は瓜二つだったのだ。しかし、園芸部を始めて、宮野と長い時間接するにつれて、宮野は宮野だと思ふようになった。だから、今俺の目に映るのは、宮野美咲だ。

彼女の心は、目の前の海と同じように、穏やかでいるのだろうか。いや、そんなはずはない。昨日の出来事を思えば、泣きたいくらいだろう。しかし、どうやったら、宮野の涙を拭ってやれる？ 大川なら、冗談の一つも言ってやれば、すぐに元気になるが、宮野は違う。過去の彼女が明るく朗らかな少女だったのかどうかさえも疑わしいほど、現在の宮野は、繊細なガラス細工のようだ……。

「先生、どうしたんですか？」

視線に気づいたのか、宮野は怪訝な顔をする。俺は取り繕うような笑顔を浮かべつつ、宮野の隣に腰を下ろした。

「オレنجジュースでよかったか？」

中身と同じ色をしたジュースの缶を差し出すと、宮野は少しばかり遠慮がちに「ありがとうございます」と礼を口にして、それを手に取った。

二人してベンチに腰掛け、海を眺めながら、ジュースを飲む。今日が平日で、お互いに仕事と学業を放り出してきたことも、ゆるゆると時間が過ぎていくことも忘れるほど、本当に穏やかで平静な時

が流れていく。ジュースが空になるまで、お互い沈黙していたが、それは嫌な沈黙ではなかった。むしろ、心地いいほど、俺と宮野は埠頭の眺めに心癒されていた。

「あの、先生」

不意に、宮野が口を開く。

「ありがとうございます。わたしを元気付けてくれるために、植物園に連れてきてくださったんですよね？ それとも、今日がわたしの誕生日だったこと、覚えていてくれたんですか？」

「まあ、そのどちらもあるけれど……ずっと前から、お前に聞いたことがあった。ちょうどいい機会だからな」

と、もったいぶったように言っていると、宮野は手持ちの缶を膝の上に乗せて、きょとんとした。

「聞きたいこと？」

「ああ、そうだ。俺は、まだるっこしいのがあんまり得意じゃない。だから、単刀直入に聞くよ」

俺は、そう前置いてから、宮野に尋ねた。そう、ずっと気になっていたことだ。

「宮野、嘘ついてるよな。お前の本当の誕生日は、十月七日じゃないよな？」

21・デートのお誘い（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

22・三年前の罪

嘘を吐くのは得意じゃありません。一つ嘘を吐いたら、その嘘を守るためにたくさんさんの嘘を吐かなきゃいけない。そうして、相手も自分もたくさん傷ついてしまふ。だから、嘘を吐いてはいけない。

小さいころに、大人たちから、誰もが教わることです。だから「お前の誕生日は、十月七日じゃないよな」と先生に言われた瞬間、わたしは思わず、膝の上に乗せたジュースの缶を落つこととしてしまいそうになりました。

そう、わたしの誕生日は「十月七日」ではありません。わたしは、三ヶ月前に十八歳になっています。別にサバを読むつもりではありませんでした。ただ、「計画」のことを知られたくないばかりにとつさに嘘をついたのです。

でも、嘘を吐くのが苦手なわたしの嘘なんて、とつくの昔に先生の知るところとなっていたのです。なぜなら、生徒の名簿を見れば、わたしの誕生日がきちんと記されています。現に、先生は名簿を見て、わたしの嘘に気づいたのです。

それは夏ごろのこと。先生はわたしの嘘に気づいていながら、ずつとわたしを咎めなくてくれました。そして、今も決してわたしの嘘を頭ごなしに叱るわけでも、怒鳴りつけるわけでもなく、優しい口調で問いかけてくれます。

「別に咎めるつもりはないんだけどさ、どうしてそんな詰まらない嘘を吐いたんだ？」

「それは……」

わたしは悪戯を叱られた子みたいに、俯いて固まってしまいました。嘘を吐いたことを話せば、同時に計画のことも話すことになってしまいます。わたしの下らないかもしれない計画を聞いた先生に、笑われたくはありません。

「笑ったりなんかしないよ。ただ、知りたいんだ。どうして嘘を吐

いてまで、エリカの花にこだわったのか。いつか、すべてが終わったときに話してくれればいいって、お前に言っただけで、もう花壇はないし、エリカの花もない。だから、今知りたい。だめか？」

先生は何もお見通しです。そして、「だめか？」などと言われれば、話さないわけには行きません。先生の優しさに甘えて、計画を実行するためにわがまま放題だったわたしには、先生にすべてをお話ししなければならぬ義務があるのです。

「十月七日は誕生日です。でも、わたしの誕生日じゃなくて、友達の……ううん、友達だった人のお誕生日なんです」

わたしは、遠い日を思い出するように、穏やかな海原を見つめて、口火を切りました。

三年前……。

まだ中学生だったわたしは、水泳部のエースでした。よく笑い、よく喋り、よく怒る、どこにでもいる明るい女の子で、友達もたくさんいましたし、弟と喧嘩したって、いつも勝つのはわたしでした。それは、自分でも信じられないくらい、今とは別人の宮野美咲です。そんなわたしとは対照的に、すがのえりか菅野衣里果は無口で大人しくて、絵に描いたような、眼鏡のよく似合う文学少女でした。だけど、衣里果はお世辞にも社交的とは言えず、クラスにも馴染めず、いつも一人ぼっちでいることが多く、そのころのわたしは衣里果のことを、自分とは一番無関係な人間だと思っていました。

ある日のことです、部活帰りに、校庭の隅でうずくまる衣里果を見かけました。何をしているんだろう？ わたしは、衣里果が体調でも悪いのかと勘違いして、思わず衣里果に声をかけました。クラスメイトとして放っておくわけには行かなかったのです。

「菅野さん、どうしたの？ 大丈夫？」

だけど、衣里果は体調が悪いのではなくて、校庭の隅にある花壇の花をじっと見詰めていたのです。ちょっとバツが悪くて、苦笑いしてしまったことをよく覚えています。そして、花壇に目をやると、そこにはヒースがたくさん植えられていました。

「ヒースの花、綺麗だね」

わたしが言うと、衣里果は少しだけ驚いた顔をしました。ヒースというのは、外国での呼び名で、日本ではエリカという名前で親しまれています。何気ない一言だったけど、それはわたしが「花好き」であることの、ちょっとした証でもありました。

「あつ、菅野衣里果。ヒースと同じ名前なんだね。ひよつとして、だから花壇なんか見てたの？」

衣里果はこくりと頷きました。

それが、わたしと衣里果の出会いです。衣里果も花が好きで、特に自分と同じ名前を持つ、ヒースをこよなく愛していました。お互いに「花が好き」という共通の趣味をもつわたしたちは、それまで一番遠い存在だと思っていたのが嘘のように、意気投合しあつと言う間に、親友と呼べる間柄となっていました。

衣里果は無口なりに、いつもわたしの話に耳を傾けてくれました。わたしは、毎日一方的に色々な話をしました。昨日見たテレビの話にはじまって、先生たちへの悪口とか、部活の話とか、恋愛の話。

果ては、美味しい食べ物の話まで。そして時折、文学少女の衣里果が薦めてくれた本を貸し借りしたりするような、どうでもいいくらい下らない毎日でも、二人でいる時間が一番楽しくて、それはお互いに感じていることでした。

ずっと、この友情は変わらない。大人になっても、「美咲」「衣里果」と呼び合える、気兼ねない友人を手に入れたと、わたしは信じていました。でも、永遠なんて、この世界に存在していないなんて、ヒット曲の歌詞にもよくあるように、当たり前のことだったのです。

無口で大人しい衣里果。クラスに馴染めない衣里果。高校受験でストレスの貯まっていたクラスメイトたちにとって、そんな衣里果はストレス解消のための、恰好の餌食でした。

ある日突然に始まった、衣里果へのイジメ。

最初のうちは、軽い悪戯程度でした。ところが日を負うごとに、

イジメはどんどんエスカレートして行き、ついには目も当てられないくらいに、酷いものとなっていきました。

衣里果の机は、いつも落書きに汚れていました。「死ね」「根暗」ものすごく幼稚で悪意だけに彩られた言葉が、消えない油性ペンで描かれて、時折、誰かが持ってきた花が机の上に飾られている、と言ったこともありました。つまり、死者への献花です。

体操服を隠す。上履きの中に、ガラス片を仕込む。鞆を捨てる。ごみやバケツの水をひっかける。根も葉もない噂を作る。女の子のイジメは、直接的な暴力に訴えないだけに、陰湿極まりないものでした。

きつと、衣里果にとって苦しい毎日だったのは間違いありません。それでも、まじめな性格だから、学校を休むことなく、毎日のイジメを必死耐える衣里果は、見も心もボロボロでした。先生たちは、事なかれ主義の権化で、衣里果に対するイジメを見て見ぬ振りを決め込んでいました。

わたしが十八年であつた大人の中で、もっとも最低な人たちです。だけど、わたしもそんな最低な人たちと、何も変わらない……。衣里果は、親友のわたしに迷惑をかけたくなかったのでしょう。一度も、イジメについて相談されたことはありません。わたしの前では、いつもと変わらない顔をして、いつもと同じように振舞っていました。

わたしは、それをいいことに、なるべく衣里果のイジメに関わらないようにしました。それは、裏を返せば、わたし自身がイジメられたくないということです。

巻き添えを食うのはゴメンだ。どうせ他人事だ。そんな風に考えていたことは、否定できません。親友はわたしを気遣ってくれていると言うのに、わたしは親友を気遣うどころか、自分がイジメの被害者にならないように、少しずつ彼女と距離を置くようになって行きました。

話しかけられても無視したり、困った顔を見かけても気づいてい

ないフリをして、あからさまに彼女を避けるうちに、わたしは加害者の立場に回っていることに全然気づきもしませんでした。それが、一つの事件を引き起こすなんて、思いもせずに……。

だんだんと元気をなくし、まるで抜け殻のようになっていった衣里果は、ある夜、家族が寝静まったところを見計らって、お風呂場で自分の手首を切りました。だくだくと流れる血を湯船につけ、ひっそりと死のうとしたのです。

幸い、衣里果のご両親がすぐに気づいて助けたため、一命は取り留めたものの、それを知ったわたしはショックでした。そのときになって、わたしは初めて自分の罪に気づいたのです。

わたしはとるものもとりのあえず、すぐに病院へ走りしました。だけど、衣里果は会ってくれませんでした。「美咲にだけは会いたくない」と言っただけです。お互いを親友だと認め合っていた衣里果にとって、わたしは薄情者の裏切り者です。ヒドイやつです。最低の人間です。そんなやつに会いたいわけがありません。

衣里果は退院後、家族と共に遠い街へ引越していきました。

時間の流れに「もしも」なんて存在しなくても、もしもわたしが衣里果の最後の友達で居続けたなら、きっと彼女は自殺を思いとどまったかもしれません。でも時間は戻せず、わたしは彼女の心と、白い手首に、深い傷跡をつけてしまったのです。

もちろん、わたしだけが悪いわけではありません。だからと言って、わたしは罪から逃げ出すことなんて出来ませんでした。結果として、わたしは「ごめんなさい」を言うことも出来ないまま、趣味だった押し花作りを止め、水泳部の友達やクラスメイトの輪から外れ、明るかった自分の性格と共に笑顔を封印することにしました。それが、わたしにとっての唯一の罪滅ぼしのつもりだったのかも知れません。親友を傷つけて、その命を奪おうとした罪人は、笑ったりしてはいけなかったのです。衣里果がどれだけ苦しい思いをして、自らの命を絶とうとしたのかを考えたら、楽しいこと嬉しいことに甘んじてはいけません。

でも、そうやって長い人生を生きていく勇氣は、わたしにはありませんでした。

22・三年前の罪（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

23・金色の太陽

「学校の中庭に花壇を見つけたとき、衣里果と話した、約束を思い出したんです」

埠頭を包み込む、さざなみの音をバックに、宮野は三年前の出来事……彼女が明るさと引き換えにした出来事から、現在に至る思いを切々と語る。

「約束？」

「はい。わたしと衣里果は、花が好きで、わたしはベランダの植木鉢で、衣里果はお家の花壇で、花を育てていました。だから、お互いの誕生日に、お互いの好きな花をプレゼントしようって」

「それはまた、女の子らしい約束だな。もしかして、その子が好きだった花が……」

俺が思い当たる節を口にすると、宮野はこくりと頷いた。

「ヒースです。日本ではエリカって呼ばれていて、自分と同じ名前の花で、小さくて目立たないけど、とても綺麗で可愛い花だから好きだ、と言っていました」

しかし、お互いの誕生日を前にして、友情が崩壊し、約束は反故になった。そのことは、宮野にとって悔やみきれないことだったのかもしれない。だから、宮野は花壇を見つけたそのとき、三年前の親友との約束を思い出したのだ。

「もしも、もう一度ヒースを咲かせて、衣里果にプレゼントできたら、きつとわたしは衣里果に『あときは、ごめんなさい』って言えるような気がしたんです。そうしたら、衣里果に許してもらえつつ思ったんです。ホントは、中庭の花壇を花でいっぱいにしたかったんじゃないくて、自分を取り戻して、明るい未来を手に入れる、きつかけが欲しかっただけ……そのヒースを植える『計画』のためだけに、わたしは園芸部を始めたいなんて、わがままを言ったんです」

そういう宮野は、やや自分自身を嘲るような顔をした。

「咄嗟のことだったから、六月に植えたヒースが芽吹くかどうか、ほとんど賭みたいなものでした。だから、芽が顔を出した時には、本当に嬉しかった。最低でしょ、わたしって。楽しいことや嬉しいことに甘んじてはダメだって、自分で言っておきながら、嬉しくて笑って。だから、花壇が荒らされたのは罰なんです。きっと神様がこう言っただけです。『お前は幸せになる資格のない、最低の人間だ』って」

悲観に暮れる彼女の瞳からは、今にも大粒の涙が零れ落ちそうだった。花壇が荒らされたことだけが悲しいのではない。衣里果に許しを請うきっかけを失ったのが悲しいのではない。親友を見捨ててもなお、おろかな計画を考えて「変わりたい」と願う自分が悲しくて、泣き出しそうなのだ、と彼女は言った。

「たとえヒースの花をプレゼントできたとしても、衣里果はわたしのことを許してなんかくれません。だって、わたしは彼女を苦しめたんです。同じだけ、その苦しみを味あわなければ、いけないんです。そんなこと分かってるのに、でも、心に開いた穴が大きくなっていくのが怖い。いつか、全部飲み込まれてしまふんじゃないかって思うけれど、わたしは衣里果のように自分の命を絶とうとするような勇氣は持てないんです」

ひどく自分のことを過小評価するのは、宮野の悪い癖。しかし、宮野が何を抱えて来たのか、どうして笑わない子になってしまったのか、その理由を知ってしまった今、俺には何が出来る？ 同じように、心の穴を持つ者として、どうすれば宮野の涙を拭いてやれる？

俺は、沈黙の中で必死に考えた。

「なあ、宮野。そういうのは、勇氣って言わないんじゃないのか？ 自分で命を絶つなんて馬鹿げてる。生きてこそ、なんてありきたりなことを言うつもりはないけれど、でも生きてみなきゃ、未来に何が待ってるかなんて、誰にも分からない。だから、誰のためじゃなくて自分のために、生きていくんだ。そうして、生きていけば、

笑ったり喜んだりするのは当たり前。嬉しいときには、心から笑えばいい。そんなこと、神様ら何言われたって、遠慮なくていいんだ」

自分で言うのもなんだが、かなりクサイ科白をはいてしまったことを、少なからず後悔した。熱血教師のつもりもないし、説教じみたことを言うのは嫌いだ。禁則を破って、教師という立場でタバコを吹かす不良教師を辞任する身としては、教訓を口に出来るほど立派な人間だとは思っていない。それでも、するすると口を吐いて出てきた言葉を、撤回することは出来ない。

宮野でなかったら、笑い飛ばすか、引いていくところだろう。しかし、宮野は真面目過ぎるくらい真面目な女の子だということを、俺はよく知っている。そうでなければ、三年前の出来事を、罪だといって背負い続けたりはしない。

「先生は、わたしの『計画』を笑わないんですか？ 馬鹿だなんて思いませんか？」

宮野は自信なさげにうつむいたまま、尋ねた。

「馬鹿だな、って思うよ。宮野とその子が親友なら、その気持ちを素直に伝えればいい。エリカの花なんてなくても、その子のところへ行って、直接言えばいい。ごめんなさい、ってね。たった六文字だ。とても簡単なことじゃないか」

「簡単じゃありません。六文字で許してもらえるほど、衣里果の心の傷は浅くないんです」

暗く影を落とす不安は、彼女の瞳を潤ませる。俺は、そんな宮野の不安を打ち払うように、ぽんぽんと宮野の頭を軽く叩いた。

「宮野は親友のことを信じられないのか？ だけど、俺と喧嘩したとき、お前は素直に謝れたじゃないか。あの時と同じように、こんどは親友に『ごめんなさい』と素直に言うんだ」

許すことは難しい。怒りを抑えて、相手を慮るなど、人間はそれほどよく出来た生き物ではない。それが、自分を傷つけた相手ならなおさらだろう。体の傷は、傷跡こそ残っても、癒えてしまう。し

かし、心の傷はいつまでも開いたまま。やがてそれは、大きな空洞になっていく。まるで胸の奥に風穴が開いたように。

だから、人は傷つかないように、争いごとがあると、自分を守ろうとする。わたしは悪くない、悪いのはあなた、といった具合に。しかし、宮野は心の穴にいつか飲み込まれてしまうのではないかという恐怖を感じながらも、三年間罪を背負い続けた。悪かったと、自分自身を責め続け、そうすることでしか、傷つけた相手と同じ地平に立てないと思い込んでいる。

他人に許しを請うというのは、そういうものかもしれない。許すことよりも、許されることはもっと難しいことなのだ。でも、そのどちらも出来ないことじゃない。

「本当に宮野が心からその子のことを思うなら、その気持ちは伝わる。だって、親友だったんだろう？ 親友って言うのはさ、どんなときでもお互いを思いやれる相手のことだ。それはとても難しいことだけど、宮野がその子のことを親友だと思うなら、伝わるんだ。もう十分罪は償った。少なくとも、俺はそれを知ってるよ。だから迷ったり、立ち止まったらだめだ」

「先生……」

宮野の瞳から、ぼろぼろと涙が落ちて、彼女のスカートを濡らす。「泣くのはこれが最後。泣き止んだら、友達のところへ行け。それで、ちゃんとお前の言葉で謝れ。そうしたら親友は、絶対に許してくれる。だって、宮野もその子も生きているんだ。生きていれば、謝ることも、許すことも出来るんだ。だから、泣くのはこれで最後にするんだ」

「泣くのはこれが最後……」

時折宮野はついに、うつ、うつ、と嗚咽の声を漏らす。その白い手で何とか涙をぬぐい取ろうとするが、堰を切ったように涙が止まらない。

「どうして？」

突然、宮野が上擦った声で、時折しゃくりあげながら言う。

「どうして先生は、そんなに優しいの？」

そんなこと、聞かなくても分かるだろう？　なんて気取った科白を返すことは出来ない。俺は教師で、宮野は生徒なんだ。本当は特別であつてはならない相手。それなのに、すでに俺は宮野を特別に思っている。思っているから、言えない。

「優しいつもりはないよ。そう見えるだけ……」

言いかけた言葉をふさぐように、宮野は俺の胸に顔をうずめて、泣き声を上げた。わーん、とまるで子どもが泣くかのようなその声は、埒頭中に響き渡る。だが、あたりの人の視線がこちらに向くのを承知の上で、俺は宮野の細い肩を抱き寄せた。

せめて、宮野が泣き止むまで、こうしていよう。それが、涙を拭うことになるかもしれない。いや、俺に出来るのは、それくらいしかない。結局、三年前の後悔と訣別し、本当の意味で涙を拭えるのは宮野だけ。その背中を押すことが出来たなら、あとは宮野が一人で歩き出す。縛られた過去を捨てて、未来へ……。

俺は、宮野を抱き寄せながら、遠く水平線を金色に染め上げながら沈んでいく太陽を見つめ、そんなことを思った。

23・金色の太陽（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

24・前に進みたい

先生がわたしのことをどう思っているのかは、よく分かりません。十八歳のわたしにとつて、二十六歳の先生は大人です。少し変わったところもあるけれど、わたしの悲しみや涙を春の日差しのように、温かく包み込んでくれる。わたしはそういう先生の優しさが嬉しくて、泣いてしまいました。

泣くのはこれが最後……。

泣いていたって始まらない。前向きだけが取り得で無鉄砲だった中学生のころの、まだ衣里果と笑い会えたころのわたしなら、きっとそう思ったに違いありません。先生に抱きしめられた瞬間、わたしはそのことを鮮明に思い出しました。

そして、衣里果に逢うため、六文字の言葉を携えて出かけたのは、それから数日後のことです。決心だけなら、先生の車で家に送ってもらう間に固めていました。折角、先生が背中を押してくれたのです。だから、ちゃんと向き合わなければいけない、と思ったのです。だけど、わたしは衣里果の居所を知りませんでした。衣里果はあの事件の後、両親とともに遠い街へと引っ越していきました。それが何処の何という街なのか分かりません。

探る手立てはいくつかあります。わたしの携帯電話には、今も衣里果の携帯番号がメモリーされています。手っ取り早く、本人に尋ねるのが一番であることは、よく分かっているのですが、その番号が今でも通話可能かどうかよりも、そのメモリーをプッシュする勇氣がまだ持てませんでした。

そこで、わたしは中学時代の同級生に、片端から尋ね歩くことにしました。みんな、わたしから話しかけられて、しかも衣里果のことを尋ねられて、少なからず驚きつつも、やはり誰も衣里果の居所を知りませんでした。衣里果は、今のわたしのようにひどく無口で、人と係わり合いを避けるような子でした。そのため、交友関係

とよめるような関係は存在していません。

それでも、衣里果の居場所を知らなければ、六文字の言葉とわたしの気持ちを伝えることはできません。

とうとう芳しい情報を手に入れることが出来ずに、やっぱり直接本人に訊くしかないのかな、なんて腹をくくろうとした矢先、

「菅野さんだったら、北市に引越したはずだよ」

思いがけない人から、衣里果の居場所を聞くことが出来ました。わたしにそれを教えてくれたのは、小鳥さんです。

中学生のころはほとんど面識がなかったために、ついそのことを忘れがちになってしまいましたが、小鳥さんも同じ中学の同窓生で、衣里果が住んでいたお家と、小鳥さんのお家は目と鼻の先だったりします。そのため、小鳥さんも衣里果と特別親しい友達ではなかったにもかかわらず、風のうわさ程度に衣里果の居場所を聞いていたのです。

持つべきものは友達だ。なんていいいますが、そのときほど、小鳥さんと友達になれたことを感謝したことはありません。

そうして、週末。わたしは、衣里果のいる北市へと向かう決心を固めました。ヒースこと、エリカの花はないし、もしかしたら会ってさえくれないかもしれないけれど、わたしは「許してくれるさ」という、先生の言葉を信じることにしたのです。

北市は、わたしたちの住む西市から、バスと電車を乗り継がなく
てはいけない、遠い街です。だから、目覚まし時計より早く起きて、透の朝ごはんを用意し、よそ行きの洋服に着替えて、わたしは玄関へと急ぎました。

上がり框かまちに腰を下ろして、靴を履いていると、少し寝ぼけ眼の透が、薄緑色のパジャマ姿のまま、二階から降りてきます。休日の日の透は、いつも寝坊をします。どうやら、わたしのパタハタという足音に、眠りを妨げられたようで、少し不機嫌そうに眠い目をこすりながら、

「どうしたの、姉ちゃん。こんな朝早く、何処へ行くの？」

と、透が言いました。嘘を返したって仕方ありません。わたしが正直に「衣里果に会いに行く」と言うと、なぜだか透は眠気が一気に吹き飛んだようで、少しばかり険しい顔つきをします。

「衣里果って、姉ちゃんの昔の友達だのね？」

「今も。わたしは、今も衣里果のことを友達だと思ってるよ」

「どうして、今頃になって、その人のところに行くの？ あんなことがあってから、もう三年も会ってないんでしょ？」

透は、わたしと衣里果の間に何があつたかよく知っています。あのときを境に、わたしは変わってしまった。口数も減り、笑わなくなつて、喧嘩も言い合いもしなくなりました。そんなわたしの変化を具に見てきたのは、家族であり、不在がちな両親と違い、いつも顔をあわせる弟だからです。

「会ってないから、だから衣里果に会わなきゃいけないの」

「今更、会ってどうするのさ。あのときのこと、ごめんなさいって言うつもり？ あれは、姉ちゃんが悪いわけじゃないじゃん。姉ちゃんはあの人のこと、イジメてたわけじゃない。それなのにあの人は、まるで姉ちゃんの所為みたいにして、何処かの街へ引っ越していったんじゃないか」

「そうかもしれないけど、わたしは友達なのに、衣里果を守ろうとしなかった。自分が、イジメに巻き込まれるのが怖かったの。だから、わたしの所為でもあるんだよ」

わたしは、透に背中を向けたまま、靴のソールに踵を収め、ふと透のスニーカーに目をやりました。

「でも、ごめんなさいって言ったって、あの人は許してくれないかもしれない」

「それでも、わたしは、前に進みたい。そのためには、衣里果にちゃんと向き合わなくちゃいけない。そう桜井先生が教えてくれたの」

「桜井……」

透は眉間にしわを寄せて、桜井先生の名を忌々しそうに、呼び捨てました。どうしてなのか、その理由は分かりません。家族だって、

心の内側まで知ることとは出来ないからです。わたしは、バッグを肩にかけると立ち上がり、くると、透の方を向きました。

「透、一つだけ訊いてもいいかな？」

「えっ？ 何？」

きよんとする透。わたしは、すうつと息を吸い込むと、透のスニーカーを拾い上げました。

「違ってたら、ごめんね。でも、中庭の花壇を荒らしたのって、透だよな？」

責めるようなつもりで言ったわけではありません。ただ、確かめただけなのですが、一瞬で透の顔が青ざめ、引きつっていくのが、わたしにも分かりました。

「あの日、透のスニーカーが泥だらけだったのを覚えてる。透は部活がんばってるもんね。よく知ってるよ。だけど、いくら部活でグラウンドを走り回っても、肥料の混じった泥がこびりつくくらい、汚れたりしない。それに、花壇に残ってた靴跡、透のスニーカーの靴底と同じ形してた」

「な、何？ 突然、探偵気取り？」

もちろん、確証があることではありません。透の言葉を借りるなら、状況証拠をあげつらうのは、探偵としては失格です。ですが、以前から、気になっていました。透は、わたしが園芸部をすることや、桜井先生と仲良くなることに、嫌悪感を露にしているのを、知っています。

「わたしは、小説の中の探偵みたいに、賢くないよ。でも、本当に透がやったんだったら、どうしてなのか教えて。怒ったりしないから」

わたしは、なるべく棘のない口調を心がけました。本当に、透を責めたいわけではありません。もう終わったことです。それに、花壇が荒らされて、ヒースが全滅しなければ、きっとわたしは衣里果に会うことを、この期に及んでも迷ったに違いありません。

「ぼくは」

気まずい沈黙が続いた後、おもむろに透が口を開きました。

「ぼくは、今の姉ちゃんの方が好きだ。昔みたいに喧嘩ばかりしたくない。世界でたった一人しか居ない姉ちゃんには、今のままで居てほしいんだ！」

「透……」

まだ、わたしが明るい女の子だったころ。わたしと透はことあるごとに、喧嘩ばかりしていました。いわゆる、きょうだい喧嘩とてうやつで、何処の姉と弟も一度や二度くらいしたことがあると思います。ただ、わたしのほうが、透より口達者で手が早かったから、いつもビンタときつい言葉で、透を泣かせていました。全勝負けなしです。

『弟なんだから、お姉ちゃんの言うことは何でも聞くのが当たり前』
そんな風に横柄に考えていたことは、否めません。それでも、恥ずかしいから口に出して言うことは出来ないけれど、もちろんわたしは家族のことを心から愛しています。

「姉ちゃんは今ままでいいんだ。無理して、昔を取り戻さなくていいんだ。桜井に何を吹き込まれたのか知らないけど、花なんか植えてなくていい、あの人のことも全部忘れてしまえばいいんだ！だから、ぼくが花壇をめちゃくちゃにした！！」

まくし立てるように、すべてを吐き出すと、透は泣き出しそうな顔になりました。わたしが変わってしまうことを、なんだか、遠くに行ってしまうと勘違いしたのかもしれない。とくに、不在がちな両親のために、わたしと透は、いつも二人で炊事洗濯、掃除に買物、ありとあらゆる家事を切り盛りしてきました。楽しいときには一緒に笑って、寂しいときには傍に居る。喧嘩ばかりしていても心の中は違って、当たり前家族より、ちょっとだけきょうだいの絆が深いのです。

「桜井先生は何も吹き込んでなんかいないよ。背中を押してくれただけ。それに、誰に言われたからってわけじゃなくて、変わりたいって、わたしが思ってる。でも、昔のわたしに戻りたいんじゃない

んだよ。ただ、今より前に進みたいだけ。だから、心配しないで」

「前に進むなら、なおさら昔のことなんて、忘れちゃえばいいんだ。忘れられるのは、人間の特権だよ」

「透は、哲学者気取り？」

「そんなつもりじゃない……」

「たとえ特権でも、わたしは忘れたくない。受け止めて、前に進みたいの」

「受け止めきれないかもしれないよ。それでも、行くの？」

透が低い声で尋ね、わたしはこくりと強く頷きました。

せめて、笑顔を添えられたら、きっと透も安心して送り出してくれるはずです。だけど、笑い方を忘れたわたしに出来ることは何もなく、透の視線を背中にピリピリと感じながら玄関の扉を開き、衣里果の住む街へと向かうしかありませんでした。

24・前に進みたい（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

25・ 教頭室のあるじ

今頃、宮野は親友のもとへと向かっているころだろうか。秋の名残から、冬に変わる、季節の境目をあらわすような、薄い空を窓越しに見上げながら、俺はリノリウムの廊下を歩く。

土曜日の学校は静かだった。おおよそ、大会と呼べるものはすべて終了し、文化部も運動部も、受験の控える三年生は引退した後だ。雪の降る季節になれば、残された後輩たちが次の目標に向かって、再び活気づいてくるだろうが、今はちょうど季節の境目にあたる。もちろん、園芸部も例外ではない。部員は一人しかいないため、二度と活気づくことはないが、本当なら、今頃最初で最後の開花を、宮野と二人で喜び合っていただろう。このまま園芸部として何も形を残すことなく、三年生である宮野も卒業してしまうのか、と思うと少しばかり、さびしい気もする。

それでも、宮野は自分で前へ進むことを決意した。花壇が荒らされなければ、彼女はまだ立ち止まっていたかもしれない。よかったのか、悪かったのか、一概に言うことはできないだろう。少なくとも、どのような結果であっても、宮野が過去と決別する意思を固めたことは、俺にとっても嬉しいことだった。

だが、嬉しいことは、そう何度も続いたりしない。そういう風に世界はできているのだから。

「桜井です。失礼します」

教頭室と書かれた札のかかる部屋の扉をノックする。すると、間髪入れずに、ややくぐもった声で「入りなさい」と帰ってきた。その声に、俺はやや不安を感じてしまう。

教頭室は、小さな事務机と資料の詰まった棚があるだけの、如何にも殺風景な部屋だ。もっとも、それはこの部屋の主の趣味である。部屋の主……教頭は、痩せぎす、神経質、すだれ禿頭の、絵にかいたような人物であり、同時に誰もが想像難くないように、教育者の

鏡であるかのごとく、事なかれ主義の権化でもある。責任ある立場の人間だから、仕方ないのだとしても、俺はあまり教頭という人間が得意ではなかった。

そういう人間に呼び出されたのだ。教師だというのに、つい、まるで悪さを咎められた生徒のような気分になってしまったのだ。

「中庭は、どうになりましたか？」

教頭は、デスクに向かって、何やら書き仕事をしながら、俺に尋ねた。意外にも穏当なしゃべり方に、拍子抜けしてしまう。

「片づけはあらかた済ませました。宮野も、受験が控えていますし、今さら新たに花を植えることも難しいですから、更地に戻すつもりです」

「苦労が水の泡……。そういう顔をしていますね、桜井先生」

「まあ、そりゃあそうでしょう。でも、六月から、一生懸命花を育ててきたのは、宮野です。あの子が納得しているなら、顧問として口をはさむべきことは、何もありません。あとは、宮野が無事に受験を突破して、笑顔で卒業していくのを、望むばかりです」

「ほほう、ずいぶんと模範的な解答ですね」

何やら、言葉の端々に不穩当が顔を見せ始める。俺は一瞬眉をひそめたが、教頭は相変わらず、書き物を続けていた。

「生徒たちが無事に卒業していつてくれること。よく言えば、我々教師が最大にして最高の責務を果たし終えたという証でしょう」

「悪く言えば……？」

恐る恐る問いかけてみる。

「悪く言えば、肩の荷が降りるというものです。我が校は進学校でもなければ、有名私学でもない。どこにでも存在しているといえれば語弊があるかもしれませんが、ごく普通の公立高校です。まじめで優秀な生徒がいる反面、目に余る落ちこぼれもいる」

「この学校には、それほど落ちこぼれはいないはずですが。受験偏差値も、それなりのレベルです」

盾突くわけではないが、意見を言上すると、教頭はようやく書き

物の手を休めて、顔を上げた。まるで能面のような無表情さは、これから彼が言うであろう言葉の重みをなぞらえていたのかもしれない。

「だから、問題なのです。高校とは、『高等学校義務教育化法制』の施行以降、義務教育の最末端にあるものです。その義務とは、教育を受けさせるべき立場にある親御さんに発生するものですが、同時に、我々教育人はその義務を果たすための、最大限のサポートをするべき立場にあります」

ウンチクを思わせるような、教頭の口ぶり。そういう高説なら、朝礼で校長の長話を聞かされる生徒と同じように、教師も煙たがるものだ。そんなことを聞かせるために、教頭はわざわざ俺を読んだというのか。こぼれそうな溜息を飲み込みつつ、俺は仕方なく教頭の言葉に耳を傾けた。

「我々は、生徒たちが無事立派な社会人となるよう、指導をしていかなければなりません。その意味で、地域清掃という地元貢献をはじめとして、成績、生活態度、あらゆる側面で、最高とは言えないまでも、我が校はそれなりの実績と信頼を得ていると思っています」
教頭はそこで一拍おく。話を切り替える時の、教頭特有の癖だ。

「宮野美咲という生徒について、担任の先生から、とても大人しいが真面目で勉強熱心な生徒だ、と伺っています」

「はあ、それが何か？」

何故いきなり、宮野の話が出てくるのか、意に介さない。そもそも、部屋に入った途端に、中庭のことを尋ねられたことにも、まだ合点がいつていなかった。

「桜井先生、あなたのことは、それなりに評価しています。屋上で喫煙したりと、少しばかり素行に問題がありますが、生徒たちからの信頼がある。それは、先生が生徒たちのことをよく観ているということですよ。これは、なかなか難しいことで、教育者という立場から言えば、それは理想とも言える」

「なんですか、いきなり。回りくどいい方をしないでください」

「おや、これは失敬。つつい、回りくどくなるのは、私の悪い癖です。では、単刀直入に言わせていただきます」

再び、教頭は一拍おいた。

「あなたと、宮野美咲はどのような関係なのですか？」

質問とは違う、ある意味叱責するような声音が、教頭室に響き渡った。おそらく、教頭は俺の顔が青ざめるのを見逃さなかっただろう。

なんと答えたものか。間違っても、宮野に対して、世間に顔向けできないような、やましいことをした覚えはない。だからと言って、俺が宮野に少なからず心惹かれているのは事実だ。平穩無事に生徒たちを世の中に送り出すことが使命だと思ってやまない教頭にとって、教師が特定の生徒のことを想うのは、最大のタブー以外の何物でもない。

「先日のことです、保護者の方からご連絡をいただきましたね……。あなたと、宮野さんが植物園にいらるところを見かけた。ちょうどその日は、あなたが理由も告げずに、無断早退した日でしたよね。同じ日に、宮野さんも無断欠席している」

俺が答えに窮しているのを悟った教頭は、少ばかり頭を抱えた。「担任の先生から伺った宮野美咲の生活態度や、あなたの教師としての器は評価に値すると思っています。ですが、そういう連絡を受け、かつあなた方二人が示し合わせたかのように、欠席したとなれば、事実かどうか、そしてあなた方の関係を知らなければなりません。お答えください、桜井先生」

「別に、示し合わせたわけはありません。しかし、彼女を連れて植物園に行ったのは事実です」

やっぱり、教頭の顔に浮かんだ表情がそう言っているような気がした。教頭は、深く溜息をつく。

「弁解はしないのですか？」

「宮野と俺は、後ろ指刺されるような関係ではありません。あくまで、先生と生徒です。教師が落ち込んだ生徒を励ますのは、悪いこ

「とではないでしょう」

「たとえそうだとしても。いや、よしんば私があなた主張に頷いたとしても、親御さんたちは、そのように思うはずがないでしょう」
事なかれ主義が、見事にたたき崩された瞬間。面倒には関わりたいくなかったのに、そんな風に教頭は思っているに違いない。

「軽率でした。申し訳ありません」

「ええ、確かに軽率です。先生が特定の生徒と学校行事にかかわりあいなく出かける……つまり、デートするなど、あつてはならないことです。そんなことは、あなたも授受う承知していたことでしょう？ この責任は、誰かがとらなければなりません。いや……これは二人の問題であつて、教頭の私が取つても仕方がないこと」

教頭はそういうと、デスクの引き出しから、二枚の紙を取り出した。

「こちらは、あなたに対する教育委員会への転勤申請書です。もう一つは私が用意した宮野さんへの、転校の手続き書です」

「転校の手続きつて、宮野は受験生です。もう数か月もすれば、彼女は大学受験に臨まなければならない。そんな時期に転校だなんて無茶ですっ」

「ええ、分かっています。しかし、あなたは先ほど仰られた。あなたと宮野さんは、ただの先生と生徒の関係だと。ならば、身を引くべきなのは、どちらか考えるまでもないでしょう。この書類、どちらもあなたに預けておきます。月末までには、結論を出してください」

「しかしっ」

言いかけた俺の言葉をふさぐように、教頭は二枚の書類を俺に突き付けた。俺は、それ以上何も言うことが出来ず、あまりにも無機質な要求が書き連ねられた書類を受け取るほかなかった。

25・教頭室のあるじ（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

26・再会

携帯電話の受話器から聞こえるコール音とともに、わたしの心臓は破裂しそうなくらい、早鐘を打っていました。まだ、わたしと衣里果が笑い合っていたらたころ登録した電話番号。もう使われていないかもしれない、そんな風に、この期に及んでも逃げ道を探そうとする心を押しとどめ、わたしは衣里果に電話を掛けました。

わたしの住む西市と衣里果の住む北市は、名前こそよく似ていますが、ずいぶんと離れています。どちらも郊外型のベッドタウンと、繁華街を備えた街並みで、日本の街なんて、どこも大して変わらなという印象を受けてしまえます。もともと、街を遊覧するために来たわけではありません。その目的を見失わないうちに、わたしは衣里果に合うことにしました。

電話口に現れた衣里果の声は、三年前の彼女とはまるで別人の、とても透き通った青空を思わせるような声に、わたしの緊張はピクに達してしまい、次の言葉がうまく話せたかどうかとも思い出せません。本当は、明るく切り出そうと思っていました。それなのに、わたしの声が必要以上に上ずっていたことだけは確かです。

「久しぶり」そんな言葉さえ、うまく話せないまま、わたしは衣里果に手近な場所まで来てくれるように、お願いしました。電話の向こうにいる、衣里果がどんな顔をしているのかよくわかりません。もしかすると、とても怖い顔をしていて「いやだ、電話なんかかけてこないで」と拒否されるんじゃないかと、不安が心に空いた穴の中を、ぐるぐると駆け巡ろうとしたその時、衣里果が電話の向こうで頷くような息遣いが聞こえてきました。

衣里果に指定された場所は、北市の駅からほど近い場所にある、小さな公園でした。児童公園として造られたにもかかわらず、ビルの谷に挟まれて、子どもの遊ぶ声なんて、聞こえてきません。そんなひどく閑散とした公園で、ブランコをベンチ代わりに座って、衣

里果を待ちました。

すると、十分もしないうちに、パタパタと足音が公園に駆け込んできました。背中を向けたわたしが、衣里果だと察するまでもありません。向こうから、わたしの名前を呼んだのです。

「宮野さん……」

わたしは、怖くて振り返ることも、彼女の名前を呼ぶことも出来ませんでした。衣里果はわたしの背後で息を整えると、ゆっくりと空いた方のブランコに腰を下ろしました。横目に見る衣里果は、一瞬見知らぬ人のように見えました。

わたしの知っている衣里果は、どこか自信がなさげで、いつも無口で、弱い女の子でした。ところが、今わたしの隣にいる衣里果は、垢抜けたというか、文学少女の雰囲気さえ漂わせていません。長かった髪をバッサリと切り、明るい色のパーカーとジーンズのラフな格好。でも、ちよつとだけ薄化粧しているのが分かります。

むしろ、どこか自信なさげで、いつも無口で、弱いのは、誰の目から見ても、わたしの方でした。まるで、わたしと衣里果がそっくりそのまま入れ替わったみたいです。

そんなお互いの姿を確かめながら、なぜかわたしたちはぎこちないまま、一言も言葉を発することができませんでした。衣里果にとつては、わたしは裏切り者です。「親友だ」と口にしながら、衣里果が一番困っているときに、わたしは自分の身を心配して、彼女をイジメから守ることも、元気づけたり勇気付けたりすることもありませんでした。

だったら、せめて、その時のことを責めてほしい……。「あんたなんか、大嫌い！」と罵ってほしい。

あの日の罪を許してもらうために、わたしはたったひとかけらの勇気を、桜井先生に押してもらってここまで来たんだから、もしも衣里果の気が済むなら、言葉汚くても、なじってくれた方が、わたしの気も楽になります。ところが、衣里果は気まずそうな顔しかしません。何も言葉にすることはなく、ただ、耳が痛くなるくらい静

かな時間だけが、だらだらと流れていきます。

そのことが、とても悲しく思えてきて、わたしは胸が苦しくなりました。不安がより一層激しく、心の穴の中を駆け巡ります。

「えっ、ちよっと、宮野さん。なんで泣いてるの!？」

突然、衣里果が驚きの声をあげました。ふと気が付けば、わたしの頬をぽろぽろと涙が伝い落ちていくではありませんか。泣くのはこれで最後……そう先生と約束したのに、その舌の根も乾かないうちに、わたしは泣き出していました。

「ごめんなさい。本当にごめんなさい」

わあっと、こぼれだした泣き声とともに、わたしは何度も何度も、六文字の言葉を告げました。衣里果は少しだけ戸惑った様子で、わたしの背中をさすりながら、「もういいよ」と言ってくれます。それなのに、わたしが泣き止んだのは、それから一時間もたった後でした。

「宮野さんって、そんなに泣き虫だったっけ？」

衣里果はわたしにハンカチを差し出しながら、思い出の中にある過去のわたしと重ね合わせるように言いました。驚かない方が不思議かもしれません。あの頃と、百八十度変わってしまったことは、自分が一番よく分かっています。

笑わない、泣き虫、自分に自信のなさそうな弱弱い姿。どうしてわたしが、そうなってしまったのか。それはわざわざ告げるまでもなく、衣里果にもわかることでした。だけど、衣里果はあえて、そのことに触れようとはしませんでした。

「眼鏡やめたんだね」

衣里果は、両手の人差し指と親指で丸をつくって、目にあてがいます。わたしがコクリと頷くと、衣里果は「その方が似合ってる」と、ほのかに笑いました。

「あたしもね、変わった。本の虫は卒業したの。高校に入ってから、友達もたくさんできたよ。笑うことも多くなった。宮野さんは？」

「わたしは……」

言葉に詰まります。衣里果とは正反対の道をひた走った結果、高校生という大切な時間を無駄遣いし続けています。でも、それはわたしの罪の償い方でした。親友面して、衣里果を最期一歩手前まで追い込んだ罪人としての。

「怒らないの？ わたし、衣里……菅野さんのこと」

「衣里果って呼んでよ。宮野さんって、遠慮するような子じゃなかったじゃん」

わたしの言葉にかぶせるように、衣里果が眉をひそめます。

「ホントはね、宮野さんが電話してきたとき、ぶん殴ってやろうって思った。でもね、宮野さんの後ろ姿が見えたら突然、傷痕がチクチクし始めたの」

そう言って、衣里果は袖を少しばかりめくりました。白く透き通った色の手首に刻まれた痕は、衣里果が自殺を試みた時についたものです。それが、三年たった今も生々しくそこにあって、一生消えないものかもしれない、と思うと、わたしの胸は張り裂けそうになりました。

「ごめんなさい、ごめんなさいっ」

「もういいって。もう、ぶん殴ろうなんて思っていないから」

困ったように、衣里果が苦笑いします。

「あの時は腹が立った。なんであたしのこと見捨てたんだろうって、考えるだけで悲しかった。でも、別にあたしは宮野さんにいじめられたわけじゃない。だから、許すとか、許さないとか、そういうことじゃなくて、あたしは、感謝してるんだよ。あのことがなければ、あたしは変われなかった。今も、あのころのままだったかもしれない。一歩を踏み出せたのは、宮野さんがいてくれたからだよ」

「わたし？」

「そう。高校に入って、周りは知らない人だらけ。宮野さんだったら、どうする。どうやったら、みんなと仲良くできるのかなって考えたの。そうしたら、全部うまくいった」

「それでも、わたしは感謝される資格なんてない。もしもあの時、

衣里果が死んでいたら、わたしは人殺しと変わらなつた。親友を裏切つた、ただの殺人者」

「乱暴だなあ。あたしね、そういうの好きじゃない」

溜息を洩らした衣里果は、何を思ったのか、不意にわたしの両手を取りました。

「あたしは生きてる。だから、宮野さんは人殺しじゃないよ。それに、ずっとこの三年、引きずってきたんでしょ？ もう十分だよ。宮野さんの肩にあるもの、全部おろしてよ。そうじゃなきゃ、あたしは宮野さんと親友に戻れない」

意外な言葉に、わたしはきょとんとしてしまいます。衣里果が、こんなわたしのことを、まだ親友と呼んでくれるのは、ほとんど衝撃でした。

「あのつ、わたし、まだ衣里果と友達でいられるの？」

「あたりまえだよ。だって、あたしの初めての親友は、美咲だけだから。あたしは、もう一度美咲と笑いあいたいって思ってるよ」

親友を信じられないのか？ 桜井先生が言つた言葉が、わたしの心によみがえりました。許してくれる、先生の言つた通り、思い過ぎだったとさえ思うほど、衣里果は何の迷いもなく、わたしのことを許してくれました。時間が、わたしと衣里果の溝を埋めてくれたのかもしれませんが。それとも、わたしの償いが終わったということなのでしょうか。

どちらでもいいのです。もう一度笑いあいたい、その言葉だけでわたしは心に空いた穴が、ふさがつていくのを感じました。

「衣里果……」

わたしは親友の名を呟きながら、自分の意志で、心からの笑顔を見せました。三年前に青春や友情やそういう形のないものと一緒に置き去りにして、忘れ去ってしまった笑い方。それが、自然と心の中に、よみがえってきたのです。

エリカの花が芽吹いたときに感じた嬉しさ、衣里果を再び親友と呼べることへの嬉しさ。たつたそれだけのことで、笑顔なんて簡単

に溢れ出てきます。

それは、わたしの心に空いた穴がふさがった証拠なのかもしれ
ない、とわたしはふと思いました。

26・再会（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

27・どうするべきか

宮野のことを気にかけていたのは事実だ。

初めて宮野に会ったとき、その横顔や醸し出す雰囲気、過去と重ね合わせた。だが、屋上を聖域だと言って、禁則を破るような不良教師でも、宮野を他の誰かと重ねて、自分の心に空いた穴を埋め合わせようとするような愚昧な人間ではないと、自分では思っている。

始まりは確かに、宮野のことを見ていなかったのかも知れない。それでも、一緒に園芸部を初めて、少しずつ宮野に近づいていくと、いろいろなことに気付いた。

宮野は、俺と同じような心のどこかに、ぽっかりと空いた穴を持っていて、時折、季節の風に運ばれてきた砂によって、ザラザラとした感覚に顔をしかめている。そして、宮野には、どこか放っておけないところがあった。そういうのに、男ってやつは、とても弱くて、それについては俺も例外ではなかった。

三年前に犯した罪を背負い込み、明るかった自分を押し殺す。それだけが贖罪だと信じて疑わない。厳密に言えば、宮野は親友をいじめたわけではない。ただあたりまえのように、自分を守っただけなのだ。しかし、その結果が親友との辛い別れだった。だから、宮野はバカが付くぐらい正直に、自分の罪だと言って、背負い込んだのだ。そんなこと出来る人間なんて、そんなにたくさんはいない。

だが、そんな自分と訣別したいと願うあまり、宮野は、ひとりで思い詰めて、がむしゃらに行動して、他人に迷惑がかかったと知り、ひどく後悔した。人一倍泣き虫で、さびしがり屋で、自分に自信を持てなくて、でも前に進みたいと願い頑張る宮野の姿に、大げさな言い方をすれば、「守ってやりたい」と思ってしまったのだ。

だから、花壇が荒らされ、宮野が無断欠席したあの日。取るものとりあえず、仕事を放り出して、宮野をデートに連れ出した。そ

の時点で、宮野という存在が、俺の中で特別になってしまった。平たく言えば。心惹かれてしまったのだ。もちろん、相手は生徒で、俺は教師。特別に思ってはいけない相手だとわかっている。それなのに、そういう思いは、本やドラマなど創作の世界だけの出来事であるはずなのに、いざ自分の身に降りかかると、心に嘘はつけなかった。

教師になろう、そう思った遠い日、俺は立派な教師になるつもりだった。テレビの学園ドラマのような熱血教師ではなくて、多くの生徒を分け隔てなく接していけるような、そういう身の丈分の立派な教師だ。

しかし、現実には、生徒に特別な思いを抱いてしまふ、とんでもない悪辣な教師になってしまった。それでも、後悔していないのはなぜなのか……。宮野が、笑っていてくれさえすれば、それでいいと思えるのはなぜか……。

その理由も、ちゃんとわかっている。あとは、自分が教師としてではなく、俺自身として、どう決断するかだけだった。

教頭から、二通の書類を渡され俺は、頂垂れながら大川の聖域ごと、保健室へと向かった。大川は、いつも通りコーヒーを出してくれたが、俺の話を聞くにつれ、だんだんと険しい顔とあきれ顔の入り混じった複雑な表情を見せた。

そして、話し終えた俺に一言。

「ロリコン」

突きつけられた、まるで矢じりのような言葉を、俺は寸でのところで交わす。

「誰がロリコンだ、人聞きの悪い！ 宮野は、十八だ。べつに年齢は関係ないだろ！？」

「じゃあ、淫行教師」

続いて、大川の口から、弾丸のような凶悪な言葉が飛び出した。冗談の類じゃないことは、大川の表情を見ればすぐにわかる。宮野と違って、大川は考えていることを表情に出すことを拒まない。い

つもなら、お互い知った仲だから、冗談に冗談で返してやるどころだが、相手が冗談のつもりではない以上、こちらも冗談では返せなかった。

「淫行って、そんなことしてねえ！」

「そりゃ、そうよね。そんな度胸ないわよね、桜井くんにも。でも、宮野さんに特別課外授業はまずかつたわね」

「特別課外授業って、ただ、植物園に行っただけだよ。今後の園芸部の活動方針を決めるために」

「宮野さん、卒業するのに？」

鋭いツツコミに、「うつ」と思わず絶句してしまう。

宮野をデートに連れ出したのは、本当にやましい気持ちなどなくて、落ち込む宮野の背中を、少しだけ押してやるつもりだった。植物園なんて、目的地はどこでもよかったのだ。ただ、宮野とゆつくり話せる場所がほしかっただけ。だが、そういう内心を言葉にするのは、想像以上に恥ずかしいもので、特にかつて恋人同士だった時期のある大川には話せなかった。

「まあ、桜井くんが宮野さんのことをどう思っているかは、とつくの昔に気付いていたことだし、桜井くんが、淫行教師に成り下がるようなやつじゃないことはよく知っているわ。お互い、付き合いが長いものね。でも、桜井くんは、どうなの？ その気持ちに嘘偽りはないの？ 過去を引きずったままなのは、あなたも同じじゃないかしら」

大川は、昔のことを知っている。まだ俺たちが宮野と同じ歳で、俺の隣に彼女として並んでいた大川は、俺と俺の家族の次に、あの日の出来事に近いところにいる。まったくの第三者という視点で、大川

俺を通してすべてを知っている。

「過去を引きずったままなのは、否定しない。でも、自分でも確信がある。俺は、陽香と宮野を重ね合わせたりしていない。最初はそのうだったかもしれないが、今はきっぱり『違う』と言い切れる」

「本当に？　もしも、あなたが宮野さんと陽香ちゃんを重ねているとしたら、悲しむのは宮野さんじゃないかしら」

なんでもお見通しの大川は、コーヒーをすすりながら、カップの隙間からチラリと鋭い視線を向けて言った。

「宮野が？」

「そうよ。他の誰かと重ねられるというのは、女の子にとっては致命的なのよ。自分だけを見てほしいっていう、独占欲かもしれないわね。わたしも十代のころは、そうだったからよくわかる」

フツと遠い眼をする大川。その瞳が、俺を通り越して見ているのは、きつと、まだ宮野たちと歳の変わらない高校生の俺たちだろう。「今は違うのかよ？」

「あら、わたしをいくつだと思ってるの。あなたで苦い経験もした。そして、あなたと別れてから、たくさん恋してきたわ。そうやって経験値をためていったんだもの、今さら純情な乙女を気取るつもりなんてない。でもね、宮野さんは違う。高校生活という青春のページを、良心の呵責だけで潰してしまった。彼女にとって、これが本当の恋なら、あなたの言葉の真偽は、とても重いものなのよ」

「本当の恋って、宮野が俺に？　悪いけど、そんな自惚れはないよ。宮野には似合う年頃のやつがいるだろう。よりもよって、生徒と先生の間を壊したいなんて」

「思うのが、純情な乙女ってやつよ。宮野さんは今、そういう時間を生きている。そして、優しくしてくれるあなたに、心惹かれてる。これは間違いないわ。女の勘っていうより、むしろ生徒の心まで気を配る、そういう職業柄の直感よ」

俺の言葉にかぶせた、大川は微笑みを浮かべた。しかし、俺はもとさら驚きはしていなかった。うぬぼれてはいない代わりに、そうであつたらいいのに、と思っていたことは事実だ。俺にとって、心の中で宮野が特別になったように、宮野の心の中で、俺が特別であつてほしいと願っていた。もしも叶うなら、気恥ずかしさを圧してでも、宮野と気持ちを伝えあいたい。

しかし、それは……。

「道ならぬ恋」

俺が呟くように言うと、大川はあからさまな溜息をついた。

「時代が寛容になっても、教師と生徒の恋愛なんて、認められるものじゃないわね。職業倫理ってやつ。面倒なことだけど、教師にとって教え子の一人を特別扱いすることは、医者が手術と銘打った実験をやるのと同じくらい、倫理違反かもしれない」

例えとしては、厳しすぎることを口にした大川は、俺の手元にある二つの用紙を指差した。

「でも、恋することは、間違いじゃない。人を好きになることが悪いことなら、この世は憎しみだけにあふれる。優しさなんてどこにもないなんて、悲しすぎるわ」

「矛盾……してるよな。俺が教師でなければ、宮野が生徒でなければ、出会うことはなかった」

「出会わなければ、恋は始まらないってね、昔読んだ恋愛小説に書いてあったわ。だから、あなたはもう決めているんでしょう？ どうするべきか。大人として、教師として」

「ああ。矛盾を乗り切れるほど、俺も宮野も小利口じゃないからな。誰かが、身を引かなければならない。この場合、俺か宮野か……」

俺は、まるで自分に言い聞かせるように、瞳を二枚の用紙に落とした。この二枚は、ことを大きくしたくない、事なかれ主義の教頭からの、俺たちに向けた「情け」のようなものだ。もしも、保護者会全体に知られることとなれば、俺はおろか宮野も、この学校にはいられなくなるかもしれない。そうなる前に、どちらかが身を引け、そういうことなのだ。

一枚は、宮野の転校申請書。編入試験を受けるためにも、必要な書類の一つだ。もちろん、まだ名前の欄をはじめとする、すべての項目が空欄のままだ。

そして、もう一枚は、俺の転勤届。すでに、転勤先の学校名は記されている。ここへ来る前に紐解いた地図によれば、東北の田舎に

ある定員割れするような小さな高校らしい。

そして、転勤届の名前の欄には、すでに俺の名前と印鑑が捺印されている。それも、ここへ来る前に、書いておいたものだ。

そう、もう決まってるんだ。どうするべきか、身を引くのはどちらか……。

27・どうするべきか（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

28・心の穴

衣里果と仲直りできたことは、桜井先生の後押しがあっただけからです。あの日、デートに連れ出してくれなければ、わたしは透に花壇を荒らされたことを、いつまでもくよくよ悔やんで、とうとう衣里果と仲直りできなかったかもしれない。あの時、泣き出したわたしを、そっと抱きしめてくれた先生の優しさや温かさ。そういったものが、わたしを勇気付けてくれたのです。

だから、真つ先に感謝の言葉を伝えるため、わたしは月曜日、理科準備室に走りました。「ごめんなさい」よりも、「ありがとう」はもっと簡単な言葉です。それを伝えるために。

先生は、わたしの話を自分のことのように喜んでくれました。だけど、先生の笑顔の裏に、小さな寂しさのようなものを感じたわたしは「何かあったのですか？」と問いかけたのですが、先生は何も答えてはくれませんでした。

そのことは、小さなささくれとなって、わたしの心にちくりと突き刺さりました。

先生は、笑っていても、時々影を帯びることがあります。それは、今に始まったことではありません。気にしないふりをしていましたが、先生に妹さんのことを尋ねた時も、同じようにさびしそうな目をわたしに見せました。だけど、その時の寂しさとは明らかに違います。その寂しさのベクトルはわたしに向いているような気がしたのです。

でも、わたしは魔法使いでも超能力者でもなければ、人の心の中を覗くことはできません。

結局、寂しさの理由はわからず、ささくれを抱えたまま、季節は冬になりました。園芸部の活動は唯一の部員であるわたしの引退で終わりをづけ、中庭の花壇は、元の更地に戻されました。雑草にまみれていないだけ、以前よりはマシに見えるのは、わたしが一つの

問題を乗り越えることができたからでしょうか。

わたしにとって、花壇はわたしそのものを映す鏡だったのかもしれない。

来年、もしも園芸部に参加してくれる後輩がいたなら、花壇はわたしの手を離れて、新しい芽吹きを迎えることでしょう。そう願いつつ、わたしには、迫りくる受験という戦いに挑まなくてはなりません。

そんな、十二月の初め。

例年を上回る大寒波が接近しているという天気予報のニュースよりも、わたしを驚かせ困惑させるニュースが飛び込んできました。それを伝えてくれたのは、もちろん小鳥さんでした。

「桜井先生が、学校やめるって。美咲、何か聞いてないの？」

もちろん、何も聞いていませんが、ピンと来るものはありました。お昼休みのチャイムが鳴ると同時に、わたしはあわてて理科準備室へ駆け込みましたが、すでに、先生の姿はそこにありませんでした。「保健の大川先生なら何か知ってるかも」

一緒についてきてくれた小鳥さんが、妙案を教えてくださいました。

桜井先生と大川先生が高校時代の同級生で、その頃とても親しい関係だったことは、わたしも小鳥さんも知っていることです。

本当は、少しだけ大川先生に嫉妬しかけたことがあります。お互い目を交わすだけで、意思を通わせられる二人の関係は、言ってみれば、親友以上の関係です。でも、二人はとても大人で、過去のことは過去のことと、割り切っています。二人は親友以上でも、恋人以上にはならない、そういう関係なのです。

だから、悔しいけれど、一番桜井先生のことを知っていて、わかっているのは大川先生を置いてほかにいません。

「桜井くん、とうとうあなたに何も言わなかったのね……」

いつも通り、保健室のデスクでコーヒーを啜っていた大川先生は、わたしの問いかけにそう答えると、桜井先生が転任することを教えてくださいました。

理由は聞くまでもありません。桜井先生が、落ち込むわたしを元気づけようと、デートに連れ出してくれたことが、問題になりかたに違いありません。

『わたしの所為で、先生が全部背負い込もうとしている』

直感的にそう思いました。きつと、先生は自分がこの学校をやめて、転任することで、問題を解決しようとしているのでしよう。それも、先生の優しさなのかもしれません。わたしは生徒で、先生は教師です。

先生の特別になりたい、なんて思っではいけないことです。けど、わたしはまだ、その気持ちを先生に伝えてすらいません。それなのに、先生はなにも告げずに、たった一人でこの学校から去ろうとしているのは、すべて、わたしを守るため。そう思うと悔しくて悲しくて、涙が零れ落ちそうになりました。

「不器用だから、桜井くんは。受験を控えるあなたに……うつん、特別なあなたに不必要な気遣いをさせたくないって思ったんでしょね。桜井くんって、昔から、そういう不器用なヤツだからね」

大川先生はため息交じりにそう言いながら、わたしと小鳥さんにも自慢のコーヒーを勧めてくださいました。それを飲むと、泣き出しそうな心が、少しだけ落ち着きを取り戻しました。

「大川先生は、桜井先生のことよくご存じなんですな」

コーヒーをすすりながら、小鳥さんが言いました。

「まあね……モトカレだし」

わたしは、先生のこと何も知らない。結局、わたしと先生はただの先生と生徒に過ぎなかったのだ、ということをも「モトカレ」という単語に裏打ちされたような気がしました。すると、先生はわたしの心の内側を読みとったかのように、

「知らなければ、知ればいいのよ。何でも聞いてちょうだい。桜井くんの高校時代のことなら、失敗談でも何でも教えてあげるわよ」と、言うてにっこりしました。

何でも、と言われても、少しばかり困ってしまいます。ですが、

ふと頭の隅によぎったのは、あの先生に貰った、麦わら帽子のことでした。

「じゃあ、一つだけ教えてください、大川先生。先生は、桜井先生の妹さんのこと、ご存じですか？」

ぶしつけな質問とわかっていながら、わたしが問いかけると、先生は驚いた顔をして、しばらく天井を見上げると、遠い過去の記憶を探るような目で語りました。

「宮野さんの想いが本当なら、そのことは一番知っておくべきことなのかもしれないわね……」

なぜか大川先生は、意味深な顔つきで呟くと、わたしのことを見つめてきます。

「桜井くんの妹、陽香ちゃんっていうのだけど、もしも彼女が、生きてたら、今頃は大学を卒業するころじゃないかしら」

「生きてたらって、まさか!？」

耳ざとく聞き分けた小鳥さんが、飲みかけのコーヒーを吹き出しそうになるほど驚きの声をあげました。もちろん、わたしも驚いていました。

夏休み前、先生がくれた麦わら帽子。すでに季節外れのその帽子を、宝物のようにして部屋のハンガーにかけて、わたしの生活空間の一部になった、そのもともとの持ち主が、もうこの世にいないなんて、誰が想像できるでしょう。

「陽香ちゃんね……」

神妙な空気に包まれた保健室に響く先生の言葉は、ひどく重苦しい悲しみに彩られていて、淀みない水面に、ぽたりぽたりと墨汁を垂らしたように、わたしの心を真っ黒に染め上げていきました。

今から八年前の出来事。わたしが抱えた三年前とは比べ物にならないほど、悲しい結末。それらが、大川先生の口から語られていきます。

『宮野も、その子も生きているんだから』

衣里香に会うため、勇気付けてくれた時の先生の言葉の裏に秘め

られた、先生の心の穴の正体。わたしの心に空いた穴は、先生のおかげで埋めることができたのに、先生はまだばかりと空いた穴を胸の奥に抱えたまま、わたしのために、この学校から、この街から去っていかうとしています。

それに気づいたにもかかわらず、わたしは真つ青な顔して、身動き一つできませんでした。

「宮野さんが、桜井くんのことをどんな風に思っているのかは、わかっていくつもりよ。それでも、保健の先生だもの。でも、あなたの想いが本当なら、あなたは桜井くんがそうしてくれたように、彼の心の穴を埋めてあげなくちゃならない」

過去の出来事を語り終えた大川先生は、静かな語り口調のまま、わたしに言いました。

「どうすればいいんですか……？ わたしに出来ることなら」

「さあ、どうすればいいかは、自分で考えなさい。わたしや、小鳥遊さんは助言しかできない。冷たい言い方かもしれないけれど、あなたに明確な答えを授けてあげることは、できないのよ」

大川先生の言葉に、わたしは頂垂れました。どうしたらいいのか、まったく分かりません。先生の抱える、深くて大きい心の穴を、わたしなんかに埋められるはずがありません。だけど、このまま青い顔をして頂垂れていていいはずがありません。

わたしは、罪を背負い続けた三年間とようやく別れを告げ、変わるための一步を踏み出しました。このまま、落ち込んでいるのは、先生が押し出してくれたその一步を無駄にするということですよ。

「そろそろ、引越しのトラック、出発する時刻ね……」

部屋の壁に掛けられた時計を見れば、もうすぐ午後の授業が始まる時刻を指示しています。

「悩んでいる暇なんてないわよ」

保健室からの去り際、ドアをくぐるわたしの背中に、大川先生は言いました。それでも、どうしたらいいのかわかりません。わたしは、小鳥さんと一緒にとぼとぼと、教室へ向かう階段を上るしかあ

りませんでした。

ところが、教室のドアが見えてくる直前、小鳥さんがいきなりわたしの手を強く引っ張りました。

「美咲。大川先生の言うとおりだよ。授業なんか出てる場合じゃない！ どうせ、出席なんかしたって、もう受験には響かないんだから」

「でも……っ」

「でも、じゃないっ。美咲は、桜井先生のこと好きなんですよ？ だったら、ウジウジ悩んでたって仕方ない。もう二度と会えなくなる前に、ちゃんと好きだってこと、伝えなきゃ！」

できない。できるわけがありません。だって、わたしは生徒で、

桜井先生は教師です。

最初は、先生のことなんて意識していませんでした。エリカの花を植えるために、先生を利用してしようとしていたのです。だけど、二人きりで放課後に花壇を耕して、種を植えて、水撒きして、わたしがわがままを言って喧嘩して、でもすぐに仲直りして……そういう、楽しくて騒がしい日々を経て、少しずつ優しい先生のこと好きになっていきました。

だけど、それを世の中では「許されざる恋」というのです。今の先生に、わたしの「特別になりたい」という想いを伝えたところでそれは迷惑以外の何ものでもないのです。

わたしが、返答を渋っていると、小鳥さんは何故だか笑顔になります。

「あのさ、先生と生徒っていうのを気にしてるんだったら、問題はすぐに解決すると思うよ。だって、わたしたち、受験生じゃん。来年になれば大学生。そうしたら、先生と生徒じゃなくなるよ。あとは、美咲が、どうしたいかだけだよ」

ちらりと口元から、八重歯をのぞかせながら小鳥さんが言いました。わたしの人生で第二の親友は、あっさりと問題を一つだけ解決してくれました。ですが、問題はそれだけじゃないんです。大川先

生が言った通り、わたしが桜井先生のことを好きだと思うなら、先生が抱えた八年間の苦しみを、わたしが解かなければなりません。そのため言葉わたしは持ち合わせていないのか、それとも、三年間の間に忘れてしまったのかは定かではありませんが、とにかく、どんな顔をすればいいのかさえ分からないのです。

「ねえ、美咲！」

小鳥さんはやたらとわたしを急かします。先生が、転任先へ引越してしまつまで、もう時間は残されていません。

「あれ、二人とも、教室の前で何してんの？」

押し問答をするわたしたちの背後から声が飛んできて、わたしと小鳥さんは咄嗟に振り向きました。教室の前の廊下で、腕を引つ張り合う光景は、教室のクラスメイト達から見れば疑問符を浮かべたくなるほど滑稽なものだったに違いありません。しかし、通りがかったのはクラスメイトではなく、わたしの弟、透でした。

これはいいところに来た！ とばかりに小鳥さんがわたしの腕を離して、透に事情をかいつまんで話します。もちろん、透にもわたしの桜井先生への気持ちは、告げていません。それどころか、花壇荒らしの一件以来、お互いにぎくしゃくしたままでした。

「姉ちゃんホントなの？ 桜井先生のこと……」

わたしは、こくりと頷くほがありません。透は、きつと薄々感づいていたはずです。今さら嘘を吐くには、手遅れでした。

「そっか」

透は小さくつぶやくと、何を思ったのかズボンのポケットから何やら取り出しました。小さな短冊状の紙切れです。よく見ると、絵柄のように思われたそれは、エリカの花の押し花でした。

「あのね、姉ちゃん。この前はごめん。花壇をめちやくちやにしちやったことも、ごめん。あれから、いろいろ考えたんだ。それでね、やっぱり姉ちゃんは姉ちゃんらしくしてるのがいいと思ったんだ。もしも、昔の姉ちゃんなら、好きな人が遠くへ行っちゃうのに、黙ってウジウジしてなかったと思うよ」

「でも、わたしはどうしたらいいのか分からなくて」

「分かんなくても突っ走るのが、ぼくの姉ちゃんだった。だから、いつも喧嘩して、ぼくが負けてたんだけどね」

へへっと、恥ずかしそうに笑った透はわたしの左手を取ると、押し花の栞を手渡してくれました。

「姉ちゃんのマネしてみたんだ。花屋で買ったものだけど、これ持って、先生の所に行つて。ちゃんと、好きですって伝えなきゃダメだよ。こんなコトで、迷ってる姉ちゃんは、やっぱり、ぼくの好きな姉ちゃんじゃないよ」

「よく言つた、弟くん！ 美咲、先生のことが本気で好きなら、今すぐ先生の所に飛んでいきな！」

小鳥さんが脇からそういうと、わたしの右手を取り上げて、手のひらに鍵を乗せます。それは、小鳥さんの通学自転車の鍵でした。

「届くかな。わたしの想い。届いたら、先生の心の穴を埋めることができるかな？」

わたしは、鍵と栞を握りしめて、二人に尋ねました。すると、二人は、お互いに顔を見合わせると、わたしに力強く頷きます。それだけで、胸の内側が暖かく満たされていくようでした。

「行つてくる。わたし、先生のところへ行つてくるね。それで、気持ち伝える。わたし、頑張るね」

親友と弟に見送られ、わたしは踵を返すと、授業開始の予鈴が鳴り響く中、昇降口へと走り出しました。

28・心の穴（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

29・春になったら、会いに行く

八年前、俺には中学生の妹がいた。

陽香は、人一倍傷つきやすく大人しい性格だが、花を愛する明るく優しい子だった。小さな家の前の花壇を毎日のように手入れしては、俺や父母を喜ばせてくれた。それは、俺たち桜井家の家族にとって、鮮やかで暖かな思い出だ。

だが、思い出が少しずつ色あせてしまうように、思い出の詰まった陽香の花壇も今となっては、主人を失って、荒地同様になってしまった。何とか、過去を振り切って毎日を生きる、父や母にとって、花壇を手入れすることは、つらい記憶を呼び覚ますだけの、禁忌だったのかもしれない。もちろん、高校卒業とともに、教育課程のある大学へ進み、下宿生活を経て、そのまま卒業、教員免許の取得と同時に、故郷から離れた地に赴任した俺にとっても、陽香の花壇に触れることは悲しみを思い出すだけの行為だった。

そう、八年前のあの日、陽香は自ら命を絶った。その瞬間、俺は後悔を背負うことになったのだ。

陽香は、他人を揶揄したり、自分の利益のために他人を陥れようとするような、そんな傲慢さは持ち合わせておらず、むしろ自分の所為で他人が傷つけば、卑屈なほど落ち込んでしまうような子だった。だが、だれも恨まない人間も、聖人君子にはなれない。生きている以上誰かに恨まれる。そうした謂れのない恨みによって、ある日突然、まるで青天の霹靂のように過イジメの毎日が始まったのだ。耐えて耐えて、イジメられるのは自分の行いが間違っていたからだ、と愚直なまでに他人を恨んだりしない陽香は、次第に自分の心を壊していった。

すぐに陽香の変化に気付いたのは、当時高校生だった俺が一番最初だったはずだ。だが、陽香は相談してくるわけでもなく、「なんでもないよ」と青白い顔をして、元氣なく返すだけ。明らかに「な

んでもない」はずがないのだが、俺が執拗に問いただしても、陽香は一向に返答を変えようとしなかった。

そんな態度に、いい加減、腹が立った俺は、思わず声を荒げてしまった。「どうして嘘を吐くんだ！俺は心配して言ってるんだ！」と。

責められるべきは、陽香をイジメているやつらであって、陽香ではない。陽香がなんでもない風を装うのも、家族を心配させたくない一心だったのだろう。そういう、陽香の優しさはよく分かっているのだが、だからこそ、何も相談してれない妹に、腹を立ててしまった。優しさが却って家族を傷つけることになる。そういうことが言いたかった。

だから、きつく言えば、泣き虫の陽香は、すべてを打ち明けてくれるかと思った。ところが、陽香はそれまで家族の誰にも見せたことがないほど、きつく鋭い眼で俺を睨み付け、こう言った。

「お兄ちゃんには関係ない！」

投げられた言葉は、まるで槍のように突き刺さり、俺の心に穴をあけた。そのあとは、売り言葉に買い言葉。きつと、その時の俺は冷静ではなく、大声で陽香を叱り飛ばし、結局のところ、妹を泣かせてしまったのだ。

それが、俺と陽香の最初で最後の喧嘩だったかもしれない。

陽香へのイジメがどれほど過酷だったかは、想像に難くない。無邪気と大人の同居する、中学生たちのイジメは、悪意と害意がおぼろげで、ある意味で大人のイジメよりもひどいものである。長い時間をかけて、傷つきやすい陽香の心を切り刻んでいったに違いない。そうして、陽香が自室で冷たくなっているのを見つけたのは、俺たちが喧嘩した次の日だった。

両親が陽香の亡骸を前に泣き喚くなか、俺は必死に涙をこらえながら、後悔の念に満たされた。陽香によって貫かれた心の穴は、後悔と同義語であり、もう二度と塞がらないだろうと思った。

せめて、兄として妹の折れかけた心を支えてやることができたな

ら、喧嘩なんかせずに真剣に、冷静に陽香を心配してやれたら、この結果は訪れなかったかもしれない。

大川の指摘の通り、それからの八年間、俺はその後悔を引きずることとなった。高校時代、いわゆる恋人だった大川と別れたのも、高校卒業と同時に自然消滅したと言えなくもないが、卒業前から俺は後悔の念に、心ここにあらずで、人知れず大川を傷つけていたのだろう。だから大川の心は少しずつ俺から離れていき、関係は自然消滅する運命にあったに違いない。

どれも「かもしれない」という曖昧なことだが、宮野の三年間と同じように、俺も罪の意識に苛まれ続けたことだけは事実だ。そして、宮野と違うのは、そこから一度も脱しようとしなかったことだ。ただ、流れに身を任せるように、教師となり、まるで消化試合のように教鞭をとるだけ。真っ暗で無味乾燥した人生を、だらだらと送っていくだけだった。

だが、宮野と出会ってからの数か月の間、無味乾燥した人生に、少しだけ優しい風が通り過ぎ、目の前の景色に暖かい色が付いた。初めは、仕方なく始めた園芸部の活動も、宮野と過ごした時間も、喧嘩したことも、宮野を勇気付けるためにデートに連れ出したことも、そして、宮野が三年間の贖罪を果たしたことも、夢中で花を育てる宮野の横顔に、心を寄せるようになったことも、八年の後悔を埋めてくれるには十分だった。

その結果、責任を取ってこの街を去るのなら、自分の決めたことに後悔はしない。宮野の未来のために、去るのだ。男として、これほどかっこいい去り方はないだろう、なんて思ってしまう。だから、宮野にはなにも言わずに、この街を去ることに決めた。

ただひとつだけ、未練があるとすれば、せめてもう一度だけ、宮野の笑顔を見たい。そうすれば再び無味乾燥した人生を送っていくことも、つらくはない。

そんなことを思いながら、去りゆく街の、薄曇りの空を見上げた。ちらほらと、雲の間から白いものが舞い降りてくる。

「この車、スタッドレスじゃないんでしょ？　だつたら雪が積もっちゃう前に行きましょうよ」

車の助手席から顔を出したのは、大学時代の後輩。引越しにあたって、手伝いを頼んだ。名前をポチという。もちろん、本名ではない。見た目が犬っぽいので、そう呼んでいる。

「ああ、悪い悪い」

俺はポチに返しながら、運転席の扉を開けた。荷物を積んだ業者のトラックは、すでに目的地へ出発している。いい加減、俺たちも出発しなければならないのに、どうしても気になって、住み慣れたアパートの前を走る道路を振り返った。その道の先にあるのは、俺が教師を務めた高校だ。

待ち人來たらず……。

宮野には、何も伝えていないのだから、来なくて当然だった。後で俺が転任したことを知れば、宮野はどんな顔をするだろう。自惚れかもしれないが、もしかすると、泣き出してしまいかもしれない。少なくとも、宮野のそんな顔をこの目で見たくはなかった。だから、宮野には何も伝えなかったのだ。

俺がこの街を後にするのは、宮野の所為ではない。俺自身の、教師としてのけじめだ。宮野のことを想う、俺の気持ちに嘘がない以上、事が大きくなって、火の粉が降りかかるのは、受験を控える宮野のリスクの方が高い。それに、宮野に何もかも押し付けてしまうのは、大人のすることじゃない。

「先輩！　寒いっす。車に乗らないなら、ドア閉めてくださいよう！」

寒がりのポチがガタガタと震えながら文句を垂れる。

「いや、もういい。俺たちも出発しよう」

後ろ髪ひかれる思いを振り切るように言うと、俺は最後にもう一度だけ、雪がちらついで霞んだ道の先を見返した。

「先生、待って。待ってください！」

遠く響いてくるかすかな声。ペダルを漕ぐ音に合わせて、白い息

を切らせて、誰かがこちらに向かってくる。ぼやけたシルエットがはつきりとしてくる前に、俺は反射的に、車に乗り込むのをやめた。「先輩、どうしたんですか？　もしかして、待ち人来たるですか」「ポチ、黙って大人しくしてろ」

わざわざ引越しの手伝いに来てくれた、奇特な後輩に、つつけんどんに返す。心の中で「すまない」と思いつつも、ポチにかまっている暇がなかった。

「宮野！」

俺が手を振って、彼女の名前を呼ぶと、自転車に跨る宮野は一気にこちらへと走りこんできた。急ブレーキのキキつという、甲高い音。手袋もマフラーも身に着けていない彼女は、鼻の頭と頬を真っ赤にしていた。

「授業はどうした？　受験生だからって、十二月まではきちんと授業があるんだ。サボっていいわけないだろう？」

本当は、宮野が来てくれたことを、内心嬉しく思っているにもかかわらず、俺は思わず苦言を口にしていた。宮野は、俺の苦言には一切応えず、すごい剣幕で、いきなりまくしたてた。

「どうして、わたしに何も教えてくれなかったんですか？　せめて、転任することだけでも、教えてくれても、いいじゃないですか。わたし、何も知らないまま、先生とお別れなんて嫌です。どうしてですか、どうして教えてくれなかったんですか？」

「それは……」

宮野の勢いに圧されて、思わず口ごもってしまう。「それは、お前の涙が見たくなかったからさ」なんて、気障な科白を吐くような柄でもない。すると、宮野は両肩を落として、しょんぼりとした表情になった。それと分かるように。

「わたしは、先生にとって妹みたいな存在なんですか？」

宮野の視線が足元落ちた。陽香のことを大川から聞いたのだということは、おおよそ察しがついた。そのうえで、俺が妹と宮野を重ねているのではないか、と尋ねてきたのだ。

「そうだな。初めて、中庭の花壇で逢った時に、お前と陽香はどこか似ている気がした。だから、声をかけたのかもしれない」

俺がそう言くと、宮野は鼻をすすった。まるで、零れ落ちそうになる涙をこらえるように。

「でもな、宮野は宮野だと思う。お前が倒れた時、俺が叱ったのは、陽香じゃなくて宮野だ。一緒に花を育てたのも宮野だ。妹じゃない」
「だったら、なんで、わたしなんかのために、学校辞めちゃうんですか？」

「俺は教師で、お前は生徒。お互いが特別な存になる前に、俺が身を引くのが一番だと思った。そうしなきゃ、俺は大切な人を守れないんだ」

「大切な人？」

顔を上げた宮野に、俺は言った。

「宮野。たぶん、俺はお前のことが好きだ。だから、お前が泣くところを、もう二度と見たくなかったんだ。ごめんな、何も言わずに……」

言うのなら今しかないと考えた。もちろん、宮野が俺のことをどんな風に思っているのか、はつきりと分かっているわけではない。それでも、好意を持っていてくれたとしたら、先にそれを伝えなきゃいけないのは、俺の方だと思った。

しばしの沈黙。振り始めた雪が、しんと俺たちの肩に降り積もっていく。街全体が、冬の静けさに包まれる中、俺は宮野の返事を待った。

やがて、おもむろに宮野は口を開いた。

「わたし、雑草まみれでだれにも相手にされていなくて、中庭の隅でひっそりしてる花壇を見たとき、自分と重ね合わせました。本当は、衣里果と仲直りするのに、エリカの花なんて必要ない。必要なのは、言葉だけだったこと、分かっていました。わたしが園芸部を始めた本当の理由は、もしも花壇をよみがえらせることができたら、自分も同じように変われるんじゃないかって思ったんです。で

も、荒らされた花壇を見て、結局人間は変われないんだって、落ち込んだ時、先生はわたしのことを勇気付けて、背中を押してくれました。そのこと、わたしはいつまでも忘れません」

「宮野……」

「先生。わたしっ、先生のことが好きです！」

寒さからではない、明らかに緊張して頬を染めた宮野が、あたりに聞こえるのとはばからずに、大きな声で言った。

「わたしと先生が、生徒と教師じゃなかったら、知り合うこともなかったかもしれないし、一緒に園芸部をすることもありませんでした。だから、わたしは、先生と生徒でよかったと思います」

「そうだな。そうかもしれないな」

そうという考え方もあるのだと、知らされた。気付いていなかったわけではないが、その事実を認めたから、俺はこの街を去るのだ。遠い場所にある、別の学校へ赴任するために。でも、その前に、宮野に伝えておかなければならない。女の子に言わせておいて、男の俺が、何も返さないのは、ポチをないがしろにしているより、もっと失礼なことだと思う。

「俺も、宮野のことが好きだ」

もう一度、確かめるように、噛みしめるように俺が言つと、宮野はより一層顔を真っ赤にして微笑んだ。それは、俺が一番見たかった笑顔かもしれない。

宮野は何を思ったか、スカートのポケットを探り、一枚の小さな葉を取り出した。いや、葉というには、随分と不恰好だが、そこには宮野がこだわり続けた、エリカの花が閉じ込められていた。

「約束の証として、これを預かっていて下さい。その葉は弟が作ったものなんです。でも、今度はわたしが作ります。透には悪いけど、もっと素敵な葉を作ります。受験もがんばります。一生懸命、前を向いて生きていきます。そして……」

春になったら、会いに行きます。

「さよならなんて言いません。たとえどんなに離れていても、絶対会いに行きます。だから、わたしのことを、待っていてくれますか？」

首をかしげながら、それでも満面のほほえみを見せる宮野が、とても愛おしかった。そんな質問しなくても、俺の答えは分かっているはずだ。

本当は、会いに行くべきなのは、俺の方がもしれない。それでも、宮野の想いを受け止めるということは、俺が彼女を待つということだから、今一瞬だけでも、一番愛しい人の一番近くにいたい。アパートの前に止めた車中ではポチが、こちらを見ているかもしれないでも、そんなの構うものか。

「待ってるよ……」

宮野の手をつかみ、半ば強引に引き寄せた。

きっと、俺は不恰好な栞を手にも、春が来るのを待ち遠しく思うことだろう。だが、その時間が、必ず俺の心に空いた穴を埋めてくれることを、抱きしめる彼女の年の割に小さな体に宿る、暖かさを感じながら確信した。

（おしまい）

あとがき

はじめまして&こんにちわ。本作を執筆いたしました、雪宮鉄馬です。

このたびは「春になったら、会いに行く」を、最後までお読みいただき、誠にありがとうございました。この物語を完結させることができたのも、ひとえに、読んで下さった方がいたからだと思っております。また、つたない文章、表現力、誤字脱字のチェック漏れがあったかとは思いますが、常に修行途上の身故に、その点についても、この場をお借りして、陳謝いたします。

「春になったら、会いに行く」長いので、ここからは「はるあい」と称します。執筆中も、長いタイトルなので「はるあい」と呼んでいました。

「はるあい」は、一年ぶりの久々の恋愛小説となります。前作がファンタジーだったのに対して、今回はファンタジー要素がほぼありません。そういう小説を書くのは、本当に久しぶりです。当初のコンセプトは、教師と生徒の恋愛という、タブーに踏み込むつもりだったのですが、それをやっちゃうと、有名な某ドラマのような、ドロドロした展開になりそうだったので、あえて「ガーデニング」という要素をメインに取り入れて、教師と生徒の恋愛、というのはソフトに表現することにしました。

物語自体も、当初の設定から、ずいぶんといじくり倒し、二人が過去の傷から再生し、互いに告白して終わる、読後感の良いものを目指しています。

また、コンセプト段階から、技術的な面として、二人の視点を交互に書くというのを取り入れています。先生、美咲、先生、美咲と、視点が入れ替わることにより、一人称文体の強みである「心理描写」を強化し、かつ弱点である視点切り替えができるように、と考えま

した。

これは、小説においては邪道なのですが、どうしても互いにどんな風に思っているのか、というのを書き出す必要があったためと、今後執筆したい小説のテストヘッドとして用いてみました。ちなみに、なぜ邪道かというと、ビジュアル再現を読者の頭の中で行わせる小説という表現において、一人称文体では視点を切り替えたことが分かりにくいからです。その分かりにくさを、男性と女性、普通の口語文と丁寧口調という、使い分けによって、少しでも伝わるように配慮したつもりです。

先生の視点と、美咲の視点、じつは最大の違いがあることにお気づきになったでしょうか？

実は、先生の視点ではなるべく文章が固くなるように書いて、美咲の視点では難しい言葉は極力避けて柔らかくなるように書いていました。

物語としては、けして明るい小説ではありませんでしたが、心理を書き込むのは楽しい作業でした。視点が変わるたびに、先生になりきって書いて、美咲になりきって書くのは大変でしたが、登場人物も少ないので、ラストまでコントロールできました。

美咲が十八歳なのは、春を迎えて大学生になったら、生徒と教師という関係ではなくなるということへの、布石だったりします。また、ヒースの和名と衣里果とか、大川先生と美咲の名前が一緒だけど物語上何の関係もないというフェイント、小ネタとしての小鳥さんの正体や、花壇を荒らした犯人当てのためのヒントを置いたり、最後まで桜井先生のフルネームは秘密だったり、妙なところで遊んでいます。そういったことも、執筆へのモチベーションにつながったのかと思います。もちろん、最大のモチベーションは、不特定多数の方々が、読んで下さるという期待とうれしさです。

書き終わった後思うことは、やはり恋愛小説は難しい、ということ

とです。どうやって、互いに心惹かれていくのか、その過程を描くのは醍醐味ですが、人の心を描くということは、とても難しいです。その分、挑戦のし甲斐もありました。

そんな拙い、恋愛経験値ほぼゼロの人間が書いた小説ですが、皆さんの目には、どのように映ったのか気になるところでもあります。ぜひ、次回作への活力や執筆の勉強にもつながりますので、ご意見・ご感想をお聞かせいただければ、うれしく存じます。また、他の自作小説同様、ご意見・ご感想はいつまでも受け付けていますので、何卒よろしくお願いいたします。

では、最後になりますが、広大なこのサイトの中で「はるあい」を見つけて読んで下さった皆様。評価してくださった皆様。感想を付けて下さった皆様。本当にありがとうございます。感謝してもきれないほどです。

また、皆様と次回作でもお会いできることを祈りつつ……。

雪宮鉄馬 2011/7

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1115u/>

春になったら、会いに行く

2011年7月23日03時13分発行